

第21節 26号墓

1. 遺構

観察一覧（第62表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から45点の遺物が確認された。中でも墓室からは32点と多数を占めている。種類は沖縄産無釉陶器の転用藏骨器、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、染付・白磁・色絵等の中国産磁器、肥前系染付、煙管・簪・釘等の金属製品がある。過半数を占める沖縄産無釉陶器の器種構成も豊富で、沖縄産施釉陶器では碗・碗の蓋・小碗・皿・杯・小杯・瓶・壺・急須・酒器、沖縄産無釉陶器では壺・水甕・火炉が確認された。火炉は本古墓で確認されたのみである。墓室内外の沖縄産陶器の遺物構成に大きな違いが見られる。

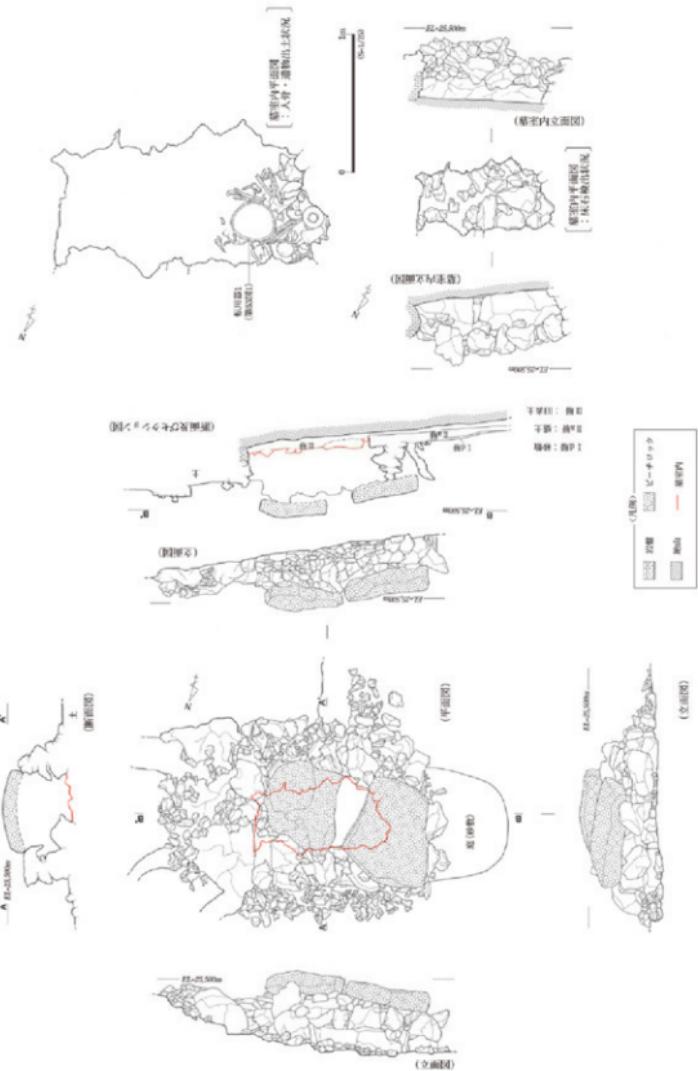
墓室内は沖縄産施釉陶器しか確認されないことに対して、墓室外は沖縄産無釉陶器しか確認されなかった。24・25号墓と同様の状況で、本土産近現代磁器を含まないことからも、本古墓群の中でも古式の様相を呈すると考えられる。

第62表 26号墓観察一覧

押団番号	第52図
図版番号	図版82
立地	調査区西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	分類 石積石室墓（I類A i b）
	規模 縦（東－西軸）約5m×横（北－南軸）約3m 墓室内：縦約1.8～2m×横約0.7～1m×高さ約0.6～0.7m
	工法 地表から少し露出している石灰岩の岩盤を、墓室内にかかる部分を削り、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の開いた隙間を積み重ねて補足する。墓室の周りは多くの礫石を墓に沿うように小高く積んでいる。盛土（IIa層）は墓口を閉じる板石を補強するために盛ったものと思われる。 墓室内奥壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上に石積みで補足。 墓室内右壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上に大小様々な礫で石積み。 墓室内左壁：岩盤を削平して壁面を形成し、その上に大きめの礫で石積み。
	天井 ほぼ同じ厚さの蓋石（ビーチロック）2つで閉じている。
	床 地山直上に床石（石灰岩）が敷かれている。
	墓口 石灰岩の板石と礫石を併用して閉じていたと思われる。 墓口の方位：西
	人骨・遺物出土状況 墓室内から人骨・遺物は墓口近くに集中して出土しており、墓室内から転用藏骨器が1点、沖縄産施釉陶器を中心し、染付の碗類が出土している。その他に床石下から煙管、簪が出土していることが注目できる。 墓室外ではあるが、釘（角釘）が出土していること、墓室内の規模から推測すると、木棺を使用していた可能性がある。
葬法分類	一次葬（I類A）、二次葬（II類B-b）を併用した可能性が考えられる。
砂敷（I d層）	墓口前に砂が敷かれており、庭を形成。
時期	近世～近・現代
備考	



図版81 26号墓出土遺物集合





墓全景〔南西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況〔東より〕



墓室内：床石検出状況〔南より〕



墓室内：完掘状況〔南西より〕



墓口前の断層面〔南西より〕

図版82 26号墓

第63表 26号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地		室内							室外 売土			合計	
			床面				床下		小計					
	転用 骸骨器	沖縄產 施釉陶器	蘭付	色絵	青磁 染付	金銅 製品	金銅 製品	小計		沖縄產 無釉陶器	金銅 製品	小計		
碗	II類	B	a		3				3		0	3		
	日類			1					1		0	1		
	V類			1					1		0	1		
	分類なし				3				3		0	3		
碗の蓋	V類			1					1		0	1		
小碗	日類			1					1		0	1		
	分類なし			1			1		2		0	2		
皿						1			1		0	1		
杯	I類	C		2					2		0	2		
	分類なし								0		0	0		
小杯					1	1			2		0	2		
壺		2		1					1		0	1		
	I類	A							0	1	1	1		
	大	無文		2					2		0	2		
	VI類	A							0	1	1	1		
	分類なし								0	1	1	1		
瓶	II類	I 無文		1					1		0	1		
	III類	I A		2					2		0	2		
水甕			1						1		0	1		
急須	I類			1					1		0	1		
急須の蓋	I類			1					1		0	1		
酒器	I類	Z		1					1		0	1		
火吹									0	1	1	1		
煙管	煙管							1	1		0	1		
	吸口							1	1		0	1		
簪		I類							2	2		2		
	II類							1	1		0	2		
	III類							1	1		0	2		
釘	穴足							1	1		2	2	3	
	破損 頭無し							1	1		1	1	2	
鉄片								1	1		0	1		
合 計			1	19	4	2	1	5	6	38	4	3	74	45

第64表 a 26号墓出土遺物観察一覽

単位: cm

捕獲番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 縁径 器高 底径 / 摻径	分類	観察所見			出土地
第53 図 版 83	転用 骸骨器	1	水甕	底	— 22.2 24.1	—	沖縄產無釉陶器水甕の転用骸骨器である。底部を利用している。素地は暗赤褐色で微粒子、微砂粒が目立つ。			
	沖縄產 施釉陶器	2	碗	口～底	13.3 6.45 6.6	II-B a	褐色釉を施す。高台外底面に「日」字様の墨書。蓋付けにアルミナが付着。素地はにぶい橙色で細粒子。			
		3			13.2 6.55 6.3	II-B a	褐色釉を施す。蓋付けにアルミナが付着。素地はにぶい橙色で細粒子。			
		4			13.3 6.5 6.2	II-B a	褐色釉を施す。蓋付けにアルミナが付着。素地はにぶい橙色で細粒子。			
		5			12.0 6.0 5.05	III	外側に細かい嵌入が見られる。蛇目状に釉剥ぎされた見込みにアルミナが付着している。素地は淡橙色で微粒子。			
		6	腕蓋	口～底	11.9 3.3 10.4	—	蓋上部は白化粧に透明釉を施す。胎色釉で斑点状の模様を描く。蓋下部は白化粧のみ。			
		7	碗	口～底	12.0 6.5 6.25	V	内外面に白化粧で透明釉を施すが、高台外底面はムラがあり、白化粧されない部分がある。外側は蓋と同様の模様を描く。蛇目状に釉剥ぎされた見込みと釉剥ぎされた口唇部にはアルミナが付着する。素地は灰白色で微粒子。			
		8	小碗	口～底	8.8 4.6 4.2	III	内外面に白化粧で透明釉を施すが、見込みは蛇目状に釉剥ぎ、高台底面は露張る。蓋付けにアルミナが付着する。			

第64表 b 26号墓出土遺物観察一覧

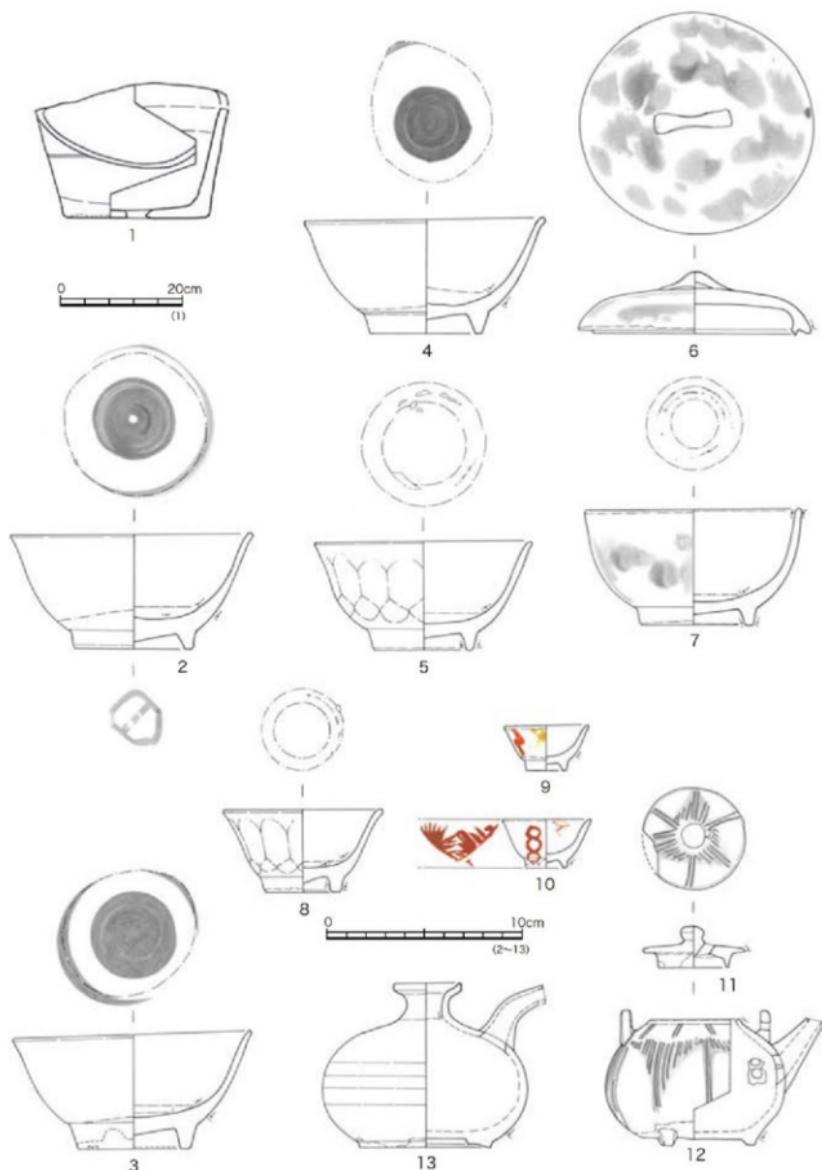
単位: cm

器物番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/摘要	分類	観察所見	出土地
第53 図 ・ 国 版 83	沖縄産 施釉陶器	9	杯	口～底	4.25 2.5 2.2	I-C	外面に赤色と黄色(?)によりカミナリ状の文様が描かれる。素地は白灰色で微粒子。成形が特に丁寧な良品である。	室内 床面
		10			5.0 2.7 4.2	I-C	外面に赤色で葉文と不明文が描かれる。素地は白灰色で微粒子、9と並んで成形が丁寧な良品である。	
		11	急須 蓋	口～底	5.6 2.3 3.8	-	蓋上面は釉が施されるが下面は露胎。素地は灰色で微粒子。	
		12	急須	口～底	5.0 7.0 5.5	I	外面は釉が施されるが、内面は露胎。素地は白灰色で微粒子。	
		13	酒器	口～底	3.8 7.1 7.2	I-2	胎色釉が施される。高台に砂が付着。素地は灰色で微粒子。丁寧に成形されている。	
第54 図 ・ 国 版 84	沖縄産 施釉陶器	14	甌	口～底	5.6 12.0 5.9	I	大型。黒色釉を高台脇まで施し、高台を露胎させるが、外底面は雑に黒色釉が塗られている。釉の垂かりがさつて、部分的に露胎する場所がある。素地は灰白色で微粒子。	室内 床面
		15	瓶	頭～底	- - 9.3	I-2	大型。黒色釉を高台脇まで施すが、雑で、部分的に露胎する場所がある。高台は露胎するが、外底面は雑に黒色釉が塗られている。素地は灰色で微粒子。	
		16		口～底	3.9 19.4 6.7	II-1	褐色釉をほぼ全面に施すが、豊付け付近は露胎させる。胸部下方に2条の沈割線が巡る。	
		17	瓶	頭～底	- - 5.4	III-1A	口縁部から胴部上方まで黒色釉を、腰部は白化粧に透明釉を施す。胸部中央から下方まで露胎するが、黒色釉を掛け流している。豊付けからの高台は露胎。胸部下方と上方にそれぞれ2条の沈割線が巡る。素地はとうしょくで微粒子。	
		18	甌	口～底	9.4 20.9 7.5	I-A	小型。全般的に丁寧な作りである。肩部から屈曲して稜を持ち頭部が垂直に立ち上がる。口縁部がし字状に折れ曲がる。口縁部や頭部の面がシャープである。素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が少量混入する。	室外 表土
		19			16.8 37.8 14.0	VI-A	口縁部をし字状に折り曲げ、上部を長く、下部を短く形成する。口唇部下方に沈割があり、装飾的である。肩部に2条の沈割線が巡り、その上に不明な判がある。	
第55 図 ・ 国 版 85	沖縄産 無釉陶器	20	火鉢	口～底	12.0 7.3 8.8	-	胸部が円筒形でそのまま口縁部に至る。口唇部は平坦に成形する。底部付近を斜めに削る。内外面の横ナギが顯著である。素地は細粒子で、大粒の砂粒が少量混入する。	
		21	碗	口～底	16.2 7.0 8.15	-	徳化窯系。腹部が丸く張り、口縁部が弱く外反する。外面に五つの草花文。見込み中央に不明文。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇の目釉剥ぎ。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
		22			14.2 6.6 7.35	-	徳化窯系。胸部が丸く張り、口縁部が弱く外反する。高台が高い。器高が低い。外面に寿文と梅花文、腰部に簡略化された蓮瓣文。見込みには不明文。外面腰部に二条、口縁部に一条の團線。内面口縁部に一条、見込みに二条の團線が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
		23			13.0 6.0 6.0	-	徳化窯系。胸部が丸く張り、口縁部が弱く外反する。高台が高い。器高が低い。文様は2.2と一緒に。外面腰部に二条、口縁部に一条の團線。内面口縁部に一条、見込みに二条の團線が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
		24	小甌	口～底	9.7 5.2 4.2	-	18世紀後半～19世紀前半。腹部が丸みを帯び、口縁部が弱く外反する。内面脚部に八卦文、見込みに太极文。外底面には字鎬が入る。外面は青味を帯びた明暎灰色、内面・外底面は青味を帯びた透明釉が掛かる。内面口縁部と腰部付近に一条ずつ團線が入る。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	

第64表c 26号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

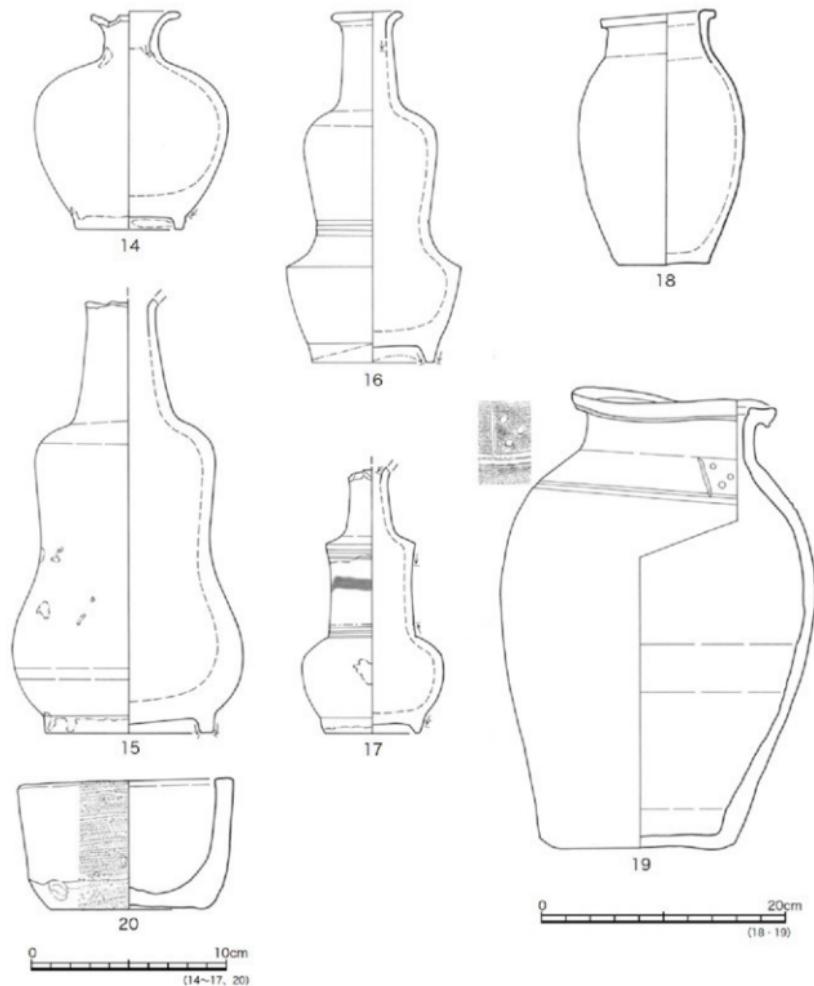
捕獲番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 縁径 器高 / 底径 / 捅径	分類	観察所見	出土地
第55 図・ 図版 85	染付	25	小杯	口～底	7.1 3.2 3.7	—	徳化窯系。腰が丸くなり、直口口縁になる。全体的に釉が溶けていて、文様の判別がつきにくい。外面に二条の團線に挟まれた簡略化された花文(?)と底の点文。高台脇に一条の團線が入る。腹部に簡略化されたアラベスク文(?)が等間隔に三つ並ぶ。全体に白濁した釉が掛かる。口唇部は釉剥げ。	室内 床面
	色絵	26	皿	口～底	16.0 3.2 7.6	—	高台から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁部は外反。内面の口縁部、見込みに一条ずつ團線が入る。中に五つの点が入る区画文と花文の区画文が交互に並び、見込みには漢詩と思われる文章が繪付されていたが、全て剥げ落ちており、判別が付きにくい。漢文は「一臘 請意(喜?)味多(詞?)」、と書かれていると思われる。(余満市教育委員会生涯学習振興課の金城善氏より御教示)。書かれている内容としてはおそらく、「漢詩(?)」を差し上げる。料理を御馳走になったが、この料理の味(喜び?)は、言葉や文章では言い表せない」と思われる。全体に透明釉が掛かり、豊付けは釉剥げされている。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
		27	小杯	口～底	4.0 2.1 1.8	—	型成形。直口口縁。外面に緑色の絵付で、草花文が描かれている。全体に白濁した釉が掛かる。素地は観察出来ず。	
第56 図・ 図版 86	簪	28	—	完形	— — —	III	竿の断面は六角形で、先端から13.2cmの所で面が互い違いになる。竿幅は先端に向かって緩やかに大きくなり、先端部は六角錐となる。長さ20.2cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。重量22.8g。銅製。	室内 床面
		29	—		— — —	III	竿の断面はやや二面が長い六角形で、先端から13.3cmの所で面が互い違いになる。竿幅は先端に向かって若干太くなり、先端部は六角錐となる。長さ18.55cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm。重量18.0g。銅製。	
		30	—		— — —	II	竿の断面はやや二面が長い六角形で最大径0.25cm、先端から6.3cmの所で面が互い違いになる。竿の先端部は六角錐で鋭く尖る。長さ10.1cm、幅0.5cm、厚さ0.25cm。重量2.9g。銅製。	室内 床下
		31	—		— — —	II	竿の断面は六角形だが、磨耗して曲面化している部分が多い。先端部は六角錐だが、磨耗し丸みを帯びる。長さ15.7cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm。重量4.2g。銅製。	室内 床面
	破損	32	—	破損	— — —	I	花が欠損し、花の基部が竿に付く。花弁は6枚で径は2.2cmを計る。下部は首、ムディー、竿からなり、首は径0.4cmの六角形で磨耗して曲面化。ムディーは径0.3cmの円形、竿は径0.5cmの四角形で先端部は四角錐となる。長さ10.1cm。重量13.3g。銅製。	
		33	—		— — —	I	花型の頭部のみ残存。花径は2.0cm、花厚は0.55cmをそれぞれ計り、花弁は6枚。中央部に7個の花心が浅く象られる。重量2.2g。銅製。	
		34	雁首		— — —	—	火皿外径1.4cm、火皿内径1.15cm。羅宇接続部外径1.05cm、羅宇接続部内径0.85cm、長さ4.2cm。重量9.3g。火皿は側面から押され、やや歪んでいる。火皿は緩やかなラップ状。頭部は羅宇接続部に向けてやや側の厚みが増す。内部には羅宇と思われる竹が一部残存。銅製。	室内 床下
	煙管	35	吸口	完形	— — —	—	吸口外径0.7cm、吸口内径0.3cm、羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.9cm、長さ6.5cm。重量10.8g。内部には竹と思われる羅宇が残存。吸口は緩やかなラップ状。34の雁首と対をなすものが。	
		36	釘(角釘)		— — —	—	長さ5.7cm、最大径0.7cm、重量8.7g。頭部はL字状を呈していたと思われるが、判然としない。頭部断面は方形をなす。本質は一部付着し、確方向に走る。	



第53図 26号墓出土遺物① 転用藏骨器(1)、沖縄産施釉陶器(2～13)



图版83 26号墓出土遗物①



第54図 26号墓出土遺物② 沖縄産施釉陶器(14~17)、沖縄産無釉陶器(18~20)



14



15



16



17



20

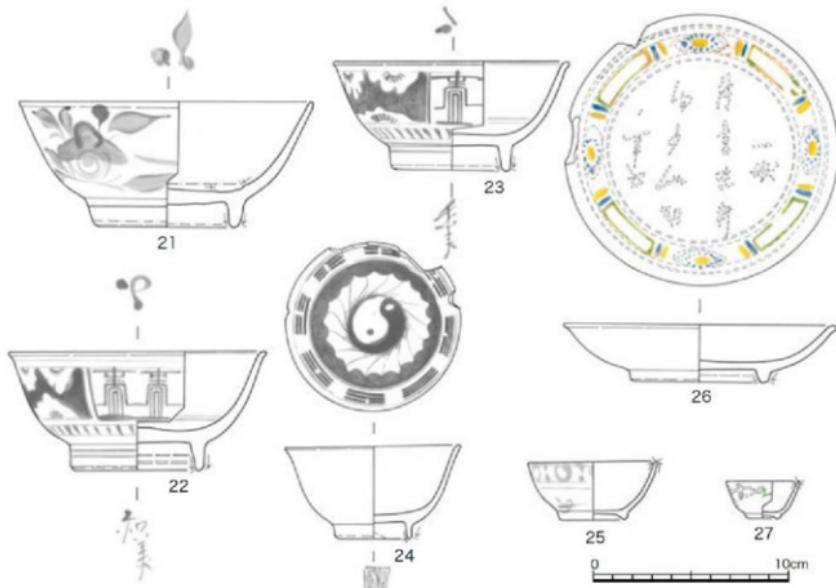


19



18

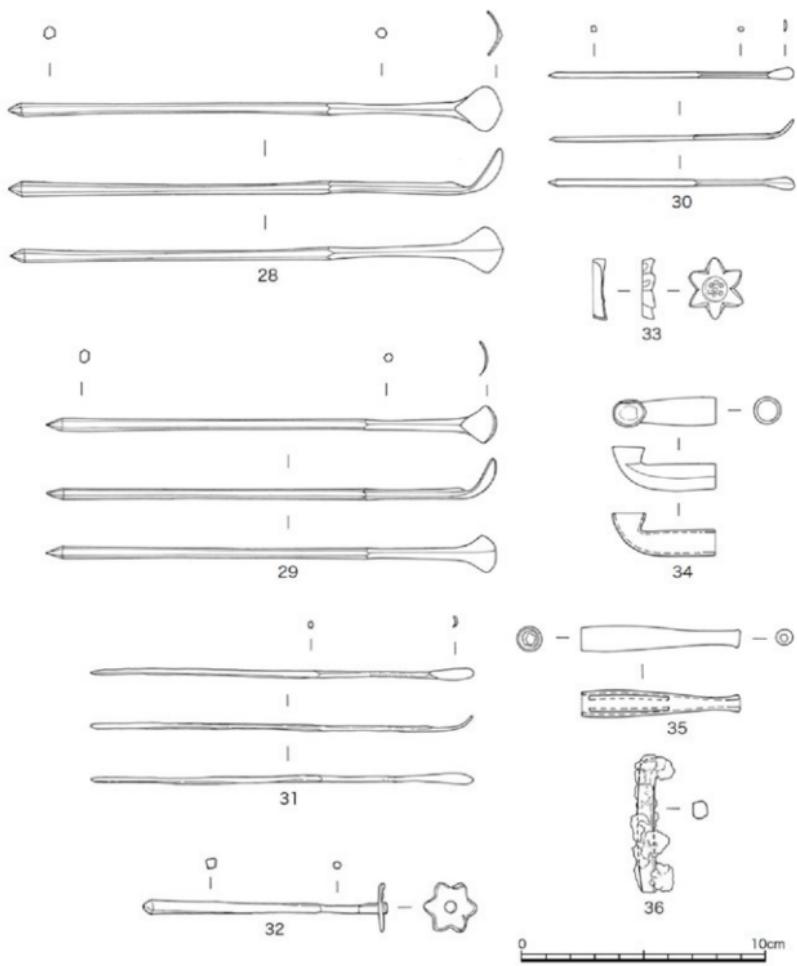
图版84 26号墓出土遗物②



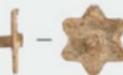
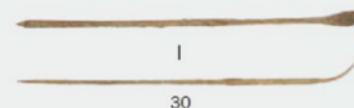
第55図 26号墓出土遺物③ 染付(21~23・25)、色絵(26・27)、青磁染付(24)



図版85 26号墓出土遺物③



第56図 26号墓出土遺物④ 煙管(34・35)、簪(28~33)、釘(36)



36



33



34



35

图版86 26号墓出土遗物④

第22節 27号墓

1. 遺構

観察一覧（第65表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から64点の遺物が確認された。中でも墓室内からは45点と多数を占めている。種類はマンガン釉を掛ける専用蔵骨器、沖縄産施釉・無釉陶器、白磁・染付・色絵等の中国産磁器、煙管・簪等の金属製品、ビール瓶等のガラス製品がある。過半数を占める沖縄産陶器の器種構成も豊富で、施釉陶器では碗・小碗・皿・小皿・杯・瓶・壺、無釉陶器では壺が確認された。24～26号墓と異なる点は、専用蔵骨器が登場することである。また、ガラス製品が確認されているがすべて墓室外表土で確認されたものである。近世から長期的に使用された墓と考えられ、本古墓群の中でも古式の様相を呈する。



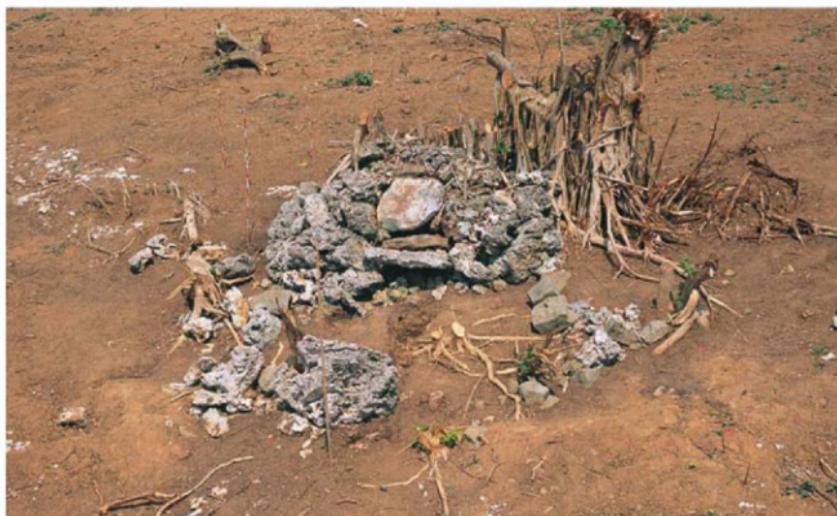
図版87 27号墓出土遺物集合

第65表 27号墓観察一覧

押図番号	第57図
図版番号	図版88
立地	調査区西側の緩やかな傾斜地。
分類	石積石室墓(Ⅰ類B1a)
規模	縦(東一西軸)約2.5m、横(北一南軸)約2.9m。 墓室内: 約1m、横約0.7m。
構造	地山を掘り下げて整地。 墓室内奥、右、左壁: 石灰岩の石積みをほぼ垂直に立ち上げる。石積みは下部に大形の石を使用し、上部には大きさ拡大程度の石を使用する。 墓室の周囲はマウンド状に積まれ墓室内に比べると積み方が粗くなる。石は大小様々な大きさの石灰岩を大部分使用しているが、一部砂岩も見られる。
工法	板状に加工した砂岩を1枚、ビーチロックを2枚蓋石として使用するが、斜めに傾き、蓋石の上には石灰岩が雑多に積まれる。
蓋石	地山を整地し、床石(板状の砂岩と一部石灰岩)が敷かれている。
床	方形状に加工した砂岩を並べ、そのすぐ上に天井の蓋石(ビーチロック)が乗っている。 蓋口の方位: 西
人骨・遺物出土状況	墓室内右奥から納骨された(成人女性1体分) 専用蔵骨器(第58図1、2)が出土。専用蔵骨器周辺を掘削すると大量の人骨(成人男性3体、成人女性1体、性別不明成人1体の計5体分)が散在して出土した。また、人骨に伴って沖縄産施釉陶器、白磁、染付等の中国産磁器、煙管・簪などの金属製品も多数出土した。出土状況で特徴的なのは碗が重ねられて出土している。
葬法分類	二次葬で厨子甕に納骨された(Ⅱ類A)、墓室内に散骨されたもの(Ⅱ類C)の2つ。
砂敷	墓口前から砂が敷かれ、庭を形成。
時期	近世～近・現代
備考	遺構と遺物の関係を見ると、墓室内は掘削前の地表面から床面まで約20cmと土が厚く堆積し、地表面から床石直上まで大量に入骨、遺物が出土したが、蔵骨器は床石直上に置かれており、順番としては蔵骨器を先に安置し、その後人骨を墓室内に散骨しながら盛土(Ⅱa層)して埋めたと考えられる。



图27 27号基



墓全景 [西より]



墓室内：藏骨器 [西より]



墓室内：人骨・遺物検出状況 [西より]



墓室内：床石（砂岩）検出状況 [南より]



藏骨器内の人骨

図版88 27号墓

第66表 27号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 床面								室外 表土				底			合計	
		専用 骸骨器	沖縄產 施釉陶器	沖縄產 無釉陶器	白磁	染付	色絵	肥前系 染付	金属 製品	小計	沖縄產 施釉陶器	沖縄產 無釉陶器	ガラス 製品	小計	沖縄產 施釉陶器	ガラス 製品	小計	
骸骨器		1								1				0		0	1	
骸骨器の蓋		1								1				0		0	1	
碗	I類	A	無文		6					6				0		0	6	
	A	a	無文		1					0	1			1		0	1	
	II類	B	b		1					1				0		0	1	
	分類なし					2	2	1		5				0		0	5	
小碗	II類	B	b		2					2				0		0	2	
I類				1					1				0		0	1		
皿	II類	2	A		1					1				0		0	1	
	分類なし									1				0		0	1	
	小皿									1				0		0	1	
	小杯					1				1				0		0	1	
盃	A									0		1	1	0		0	1	
	I類	大	無文		2					2				0		0	2	
	小				2					2				0		0	2	
	II類		A							0		3	3	0		0	3	
	III類		小		1					1				0		0	1	
	分類なし					1				1				0		0	1	
瓶	A									0		1	1	0		0	1	
	B									0		1	1	0		0	1	
	分類なし					1				1				3		0	4	
	小瓶					1				1				0		0	1	
煙管	I類	2			1					1				0		0	1	
	II類	1	無文		2					2				0		0	2	
	III類	3	A		1					1	1			1		0	2	
	V類									0	1			1		0	1	
	VI類	1			1					1	2			2		0	3	
	IX類				2					2				0		0	2	
煙口	煙首									1	1			0		0	1	
	吸口									2	2			0		0	2	
唇	I類									4	4			0		0	4	
	III類									1	1			0		0	1	
ガラス瓶										0			4	4	1	1	5	
合計				2	24	2	1	4	3	1	8	45	5	8	4	17	1	1

第67表 a 27号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

捕図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 縁径 器高 底径 / 摘径	分類	観察所見			出土地	
第58 図 ・ 図 版 89	専用 骸骨器	1	蓋	口～底	29.8 14.0 —	—	マンガン釉が掛けられた専用骸骨器の蓋である。外面に「大」字様と不明の墨書きが見られる。			室内 床面	
		2	身	口～底	28.3 57.3 20.0	—	マンガン釉が掛けられた専用骸骨器である。胴上部が脛り、口縁部が垂直に立ち上がり、バチ形に開く。横帶3が2条の凸帯となっており、本古墓群でこれ1例のみである。肩部文様帯が沈葉文。胴部文様帯が沈蓮花文。肩門がアーチ形で、上に玉飾り。柱基部に玉飾り。胴下部文様帯は沈波状文。				
	沖縄產 施釉陶器	3	碗	口～底	13.3 6.1 7.0	I-A	灰釉。豊付けに砂が付着。素地は灰白色で微粒子。				
		4			13.4 6.0 6.8	I-A	灰釉。豊付けと見込みに砂が多量に付着。素地は灰白色で微粒子。				

第67表 b 27号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

括図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 緯径 器高 / 捨径	分類	観察所見	出土地
第58 図 ・ 図版 89	沖縄産 施釉陶器	5	碗	口～底	13.65 7.0 6.2	I-A	釉色は濃緑灰色を呈する。豊付けと見込みにアルミナが付着。素地は明褐色で細粒子。鉄釉か。	室内 床面
		6			13.6 5.95 6.6	I-A	灰釉。豊付けに少量の砂が付着。素地は灰白色で微粒子。	
		7			13.1 6.1 6.5	II-A a	豊付けと蛇目状に釉剥ぎされた見込みにアルミナが付着。素地は白灰色で微粒子。高台外底面に釉のひび割れが目立つ。	
		8			12.8 6.6 5.9	II-B b	外面は褐色釉。内面は白化粧に透明釉で、細かい貫入がある。蛇目状に釉剥ぎされた見込みと豊付けにはアルミナが付着。素地はにぶい褐色で細粒子。	
第59 図 ・ 図版 90	沖縄産 施釉陶器	9	小碗	口～底	10.4 5.2 4.2	II-B b	外面は褐色釉、内面は白化粧に透明釉。素地は褐色で微粒子。	室内 床面
		10			9.4 4.8 4.0	II-B b	外面は黒褐色釉で、内面は白化粧に透明釉。豊付けと蛇目状に釉剥ぎされた見込みにアルミナが付着。素地は白灰色で微粒子。	
		11	皿	口～底	12.95 4.1 7.2	I	淡緑灰色の灰釉。素地は淡橙色で細粒子。	
		12			13.35 4.4 7.0	II-2 A	内外面白化粧に透明釉を施す。細かい貫入が目立つ面取された口唇部には褐色釉を施す。豊付けと見込みにアルミナが付着。	
		13	壺	口～底	6.8 13.1 5.9	I	大型。飴色釉を外面腰部まで施す。横ナデの成形が丁寧である。素地は白橙色で細粒子。	
		14			4.0 8.85 4.4	I	小型。褐色釉を外面腰部まで施す。素地は灰白色で微粒子。	
		15			3.7 5.6 5.9	III	褐色釉を底部付近まで施す。高台を作らず、底部を内削りして基筒底状を呈する。素地は淡橙色で細粒子。	
		16	瓶	口～底	4.9 22.1 8.3	I-2	褐色釉を外面総釉し、豊付けを釉剥ぎする。素地は淡橙色で細粒子。	
		17			3.75 21.8 6.8	II-1	褐色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。脇部中央に3条の沈窓線が巡る。素地は細粒子。	
		18	肩～底		— 7.5	II-1	褐色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。素地は淡赤褐色で細粒子。	
第60 図 ・ 図版 91	沖縄産 施釉陶器	19	瓶	口～底	3.4 15.6 6.2	III-3 A	口縁部から胴上部は黒色釉、腰部は淡緑色の灰釉。胴上部と胴下部にそれぞれ2条の沈窓線。豊付けに多量のアルミナが付着。素地は乳白色で細粒子。	室外 表土
		20			2.5 14.1 5.3	III-3 B	口縁部から肩部まで飴色釉、腰部は白灰色の灰釉。豊付けと外底面の半分が露胎。素地は乳白色で微粒子。	室内 床面
		21			3.5 16.8 6.1	V	高台脇まで黒色釉を施す。高台は露胎とするが、外底面には難に黒色釉を薄く塗る。肩部に8条の沈窓線。豊付けに砂が付着。素地は微粒子。	室外 表土
		22			3.9 15.05 5.0	VI-1	高台腰部まで褐色釉を施す。肩部と頸部の境界に2条の沈窓線。素地は淡橙色で微粒子。	室外 表土

第67表 c 27号墓出土遺物觀察一覧

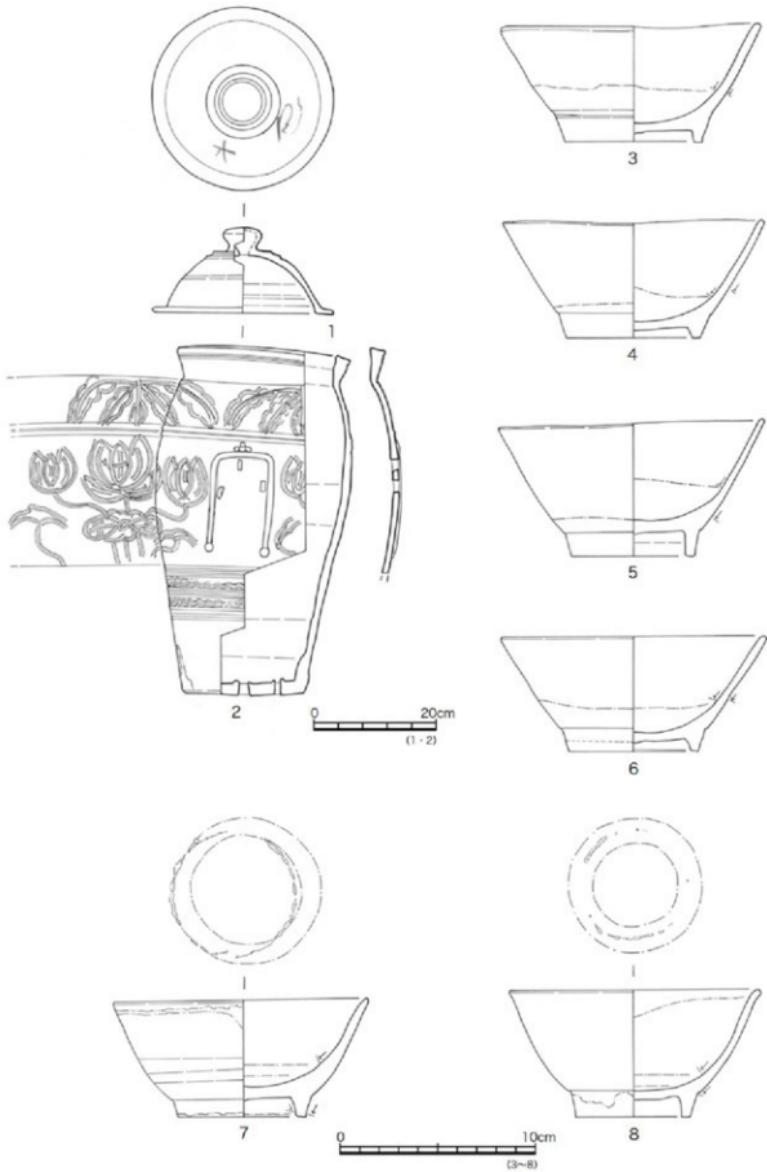
単位:cm

捕図番号 圖版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 線径 器高 底径 / 摘径	分類	觀察所見	出土地
第60圖・ 圖版91	沖縄產 施釉陶器	23	瓶	頸～底	— 5.0	VI-1	高台腹部まで褐色釉を施す。肩部と頸部の境界に2条の沈圈線。素地は淡橙色で微粒子。22と同一品と考えられる。	室外 表土
		24		口～底	3.2 13.5 6.2	IX	胎色釉を底部付近まで施す。外底面には輪に胎色釉を塗る。肩部と頸部の境界に7条の沈圈線。素地は微粒子。	
	染付	25	碗	口～底	14.0 6.7 6.4	—	徳化窯系。高台脇から口縁部にやや逆ハの字状に開く。口縁部は弱く外反する。外面に寿字文と梅花文。見込み中央に不明文。腰部に簡略化された蓮弁文(?)。外面口縁部、腹部に一条の圈線。内面口縁部に一条、見込みに二条の圈線が入る。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。豈付け釉剥ぎ。外底面に「和美」。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。素地は白色微粒子。	
		26		口～底	12.5 5.9 5.2	—	波佐見焼の丸形碗。1820年代～1860年代か。外面に丸文(中に斜線)と、二つ一组の小丸文が三つ等間隔に配置されている。見込み中央にコンニャク印判五弁花文。外面高台に二条の圈線。腰部に一条の圈線。内面口縁部に一条、見込みに二条の圈線が入る。全体に白濁した釉が掛かる。口唇部、豈付けは釉剥ぎ。見込みは蛇目状釉剥ぎで、釉剥ぎ部には濃いアルミナを塗布。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
	染付	27	碗	口～底	14.5 6.5 7.0	—	徳化窯系。腰部が丸く張り、直口縁を呈する。外面は丸文に二段の花卉文がそれぞれ交互に4つずつ配置。見込みに不明文。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇目状に釉剥ぎ。豈付けも釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
		28	皿	口～底	17.6 2.9 10.4	—	徳化窯系(?)。高台から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁部は直口。その圈線の間に不明文が三つ等間隔に入る。見込みに簡略化された玉取獅子(?)が入る。内面の口縁部と胴部に一条ずつ圈線が入る。全体に青味を帯びた釉が掛かる。口唇部は釉剥ぎ。外底面は大難把に釉剥ぎ。素地は観察出来ず。	
	染付	29	小壺	口～底	4.1 8.5 4.6	—	外面に松竹文と岩文(?)が描かれている。外面高台脇、腰部に一条の圈線。外面部に三条の圈線が入るが、その内の二条の圈線で網代文を挟む。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。口唇部と豈付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
		30	碗	口～底	14.4 6.9 6.7	—	徳化窯系。高台径、口径が大きい。腰部が弱く折れる。口縁部が弱く外反。僅かに豈付けが残っている。外面に丸文(中に格子状の絵)と花文が交互に描かれている。外面の文様の外枠は赤色の絵付け。その中に赤・緑色で絵付け。高台脇に一条、腰部に二条赤色の圈線が入る。全体に透明釉が掛かる。豈付けは釉剥ぎ。素地は灰色微粒子。	室内 床面
第61圖・ 圖版92	色絵	31		口～底	12.4 5.9 6.5	—	徳化窯系。高台径、口径が大きく、器高が低い。高台が高い。腰部が弱く折れる。口縁部が外反。外面に丸文(中に格子状の絵)と花文が交互に描かれている。外面の文様の外枠は赤色の絵付け。その中に赤・緑色で絵付け。高台脇に一条、腰部に二条赤色の圈線が入る。全体に透明釉が掛かる。豈付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
		32	壺	口～底	4.2 6.15 3.7	III	口縁部を外反させるが、外面に段を作する。素地に微砂粒が混入する。	

第67表 d 27号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

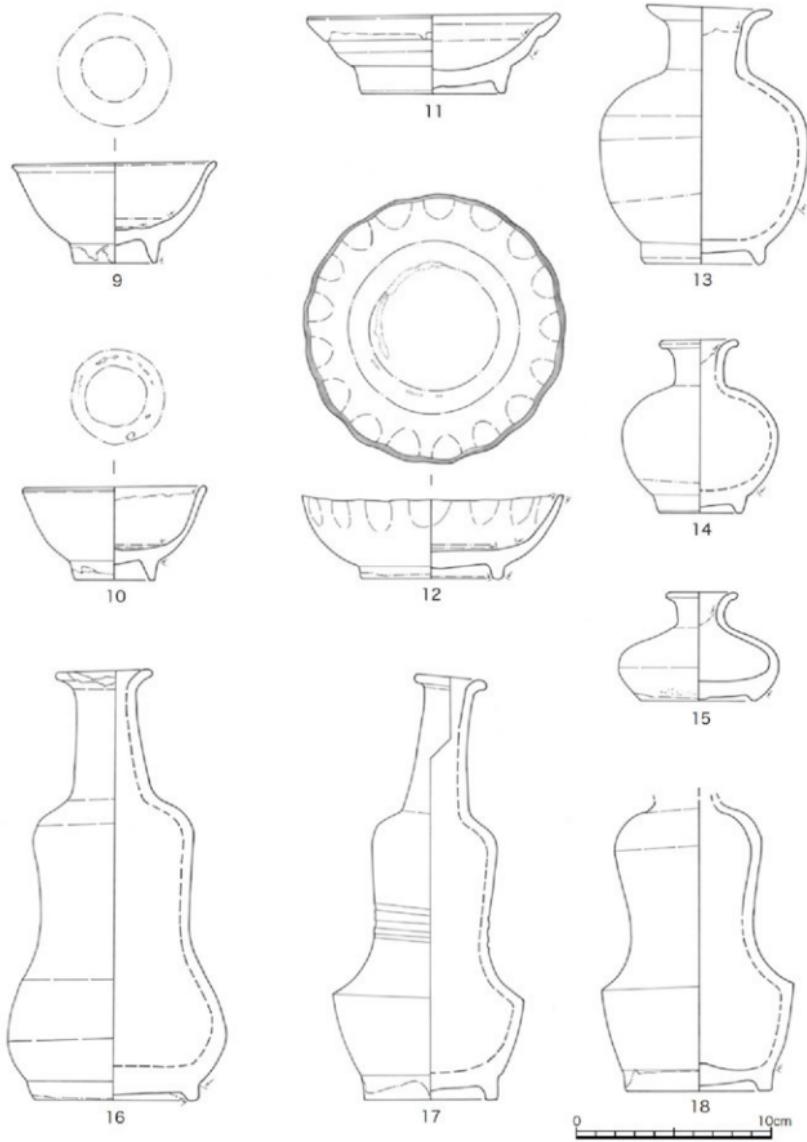
括図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 / 縁径 器高 底径 / 摘径	分類	観察所見	出土地
第61 図・ 図版 92	沖縄県 無釉陶器	33	壺	口～底	8.7 13.9 9.0	II-A	小型。33・34はほぼ同一品である。肩部に稜を持った屈曲し、頸部が垂直に立ち上がり、口縁部が肥厚する。素地は暗赤褐色で微粒子、大粒の白色鉱物と微砂粒が少量混入する。肩部に「十」と「八（？）」の判がある。	室外 表土
					8.4 5.6 7.3	II-A	小型。33・34はほぼ同一品である。肩部に稜を持った屈曲し、頸部が垂直に立ち上がり、口縁部が肥厚する。素地は暗赤褐色で微粒子、大粒の白色鉱物と微砂粒が少量混入する。頸部に「十」、肩部に「九（？）」or「大（？）」の判がある。	
		35			12.5 35.1 16.5	V-B	大型。肩部から頸部への立ち上がりがなめらかで、口縁部がL字形に折れ曲がる。口縁端部の成形がAのようにシャープでなく、丸みがある。素地は細粒子で、白色鉱物が目立つ。	庭
第62 図・ 図版 93	簪	36	完形	-	- - -	III	竿の断面は六角形で先端から14.0cmの所で面が互い違いになる。 竿幅は先端に向かって若干太くなり。先端部は六角錐となる。長さ20.2cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重量26.3g。銅製。	室内 床面
		37			- - -	II	竿の断面は先端から5.4cmの所まで六角形、そこからカブまでは円形。最大径は0.2cm。先端部は六角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。先端から1.3cmのところで若干折れる。長さ13.9cm、幅0.4cm、厚さ0.3cm、重量3.7g。銅製。	
		38		破損	- - -	I	花が欠損し、花の基部が竿に付く。花弁は6枚で径は2.1cmを計る。カブと首、ムディー、竿からなり、首は径0.4cmの六角形で、ムディーは径0.3cmの円形、竿は径0.4cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。長さ10.4cm、重量10.6g。銅製。	
		39	完形	-	- - -	I	花は花弁が6枚で径は2.2cm。中央には花心が象られるが、磨耗して文様がつぶれ気味である。下部は首、ムディー、竿からなり、首は径0.3cmの六角形で、ムディーは径0.25cmの円形でやや曲がる。竿は径0.35cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。長さ10.6cm、重量10.1g。銅製。	室内 床面
		40			- - -	I	花のみ残存。花弁は6枚で径は2.05cm、厚さ0.13cm。中央には花心が象られるが、磨耗して文様がつぶれ気味である。重量0.8g。銅製。	
	煙管	41	雁首	完形	- - -	-	長さ5.1cm、火皿外径1.3cm、火皿内径1.1cm。羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.8cm。重量7.2g。胴部は上面だけ平坦に形成し、断面で見ると半円形となる。銅製。	室内 床面
		42	吸口	完形	- - -	-	長さ4.2cm、吸口外径0.5cm、吸口内径0.25cm、羅宇接続部外径1.1cm、羅宇接続部内径0.9cm。重量6.4g。胴部は吸口から羅宇接続部にかけて一部平坦な面を形成。銅製。	
		43			- - -	-	長さ3.5cm、吸口外径0.4cm、吸口内径0.2cm、羅宇接続部外径1.2cm、羅宇接続部内径0.9cm。重量3.4g。胴部は接合痕が見られ、吸口付近でやや瘤んでいる。銅製。	



第58図 27号墓出土遺物① 専用蔵骨器（1・2）、沖縄産施釉陶器（3～8）



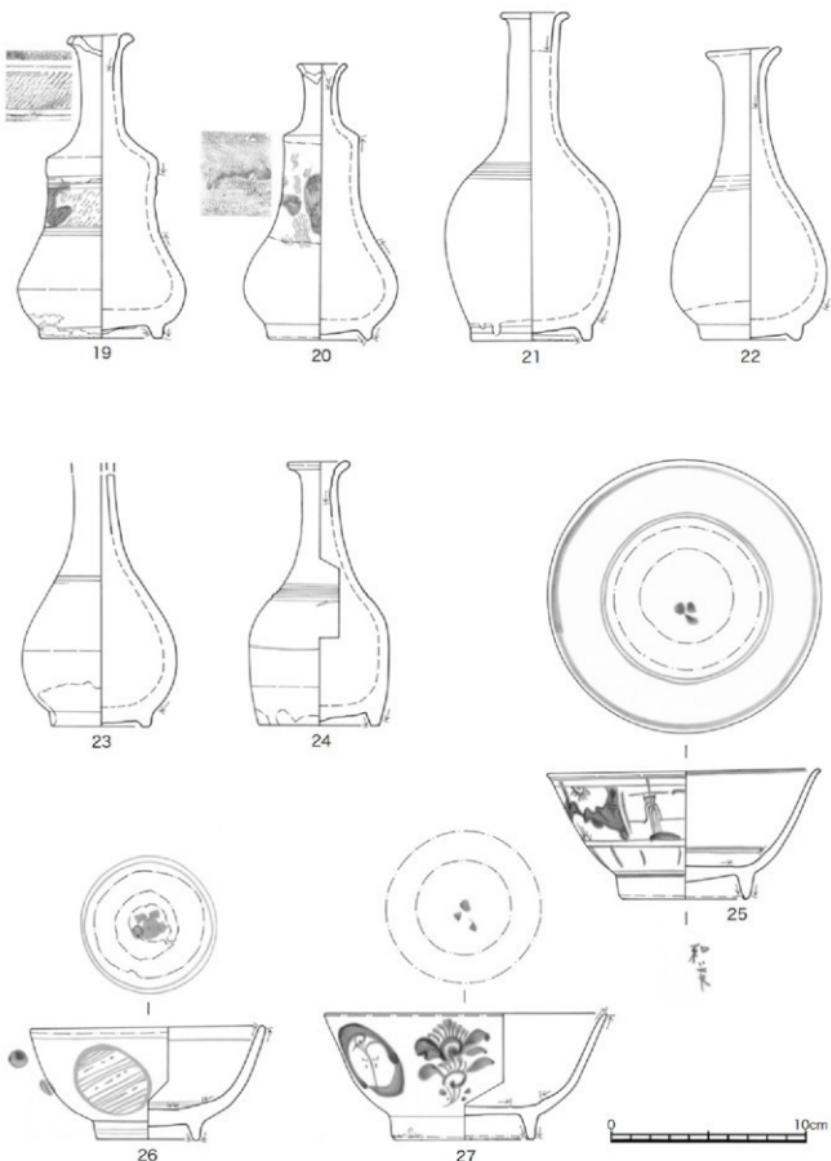
图版89 27号墓出土遗物①



第59図 27号墓出土遺物② 沖縄産施釉陶器



图版90 27号墓出土遗物②



第60図 27号墓出土遺物③ 沖縄産施釉陶器（19～24）、染付（25・27）、肥前系染付（26）



19



20



21



22



23



24



I

25



I

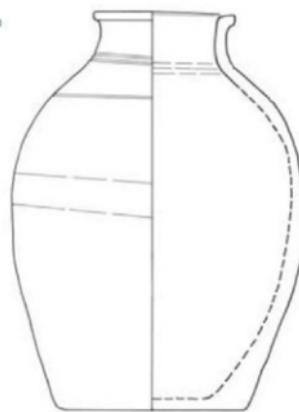
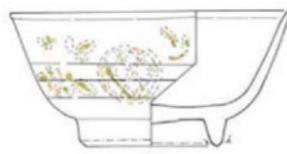
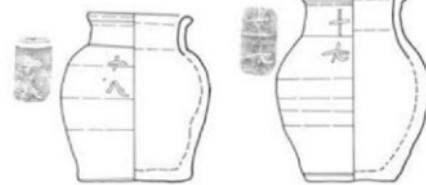
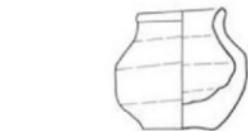
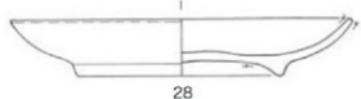
26



I

27

图版91 27号墓出土遗物③



第61図 27号墓出土遺物④ 沖縄産無釉陶器 (32~35)、染付 (28・29)、色絵 (30・31)



1



28



29



30



32



31



33



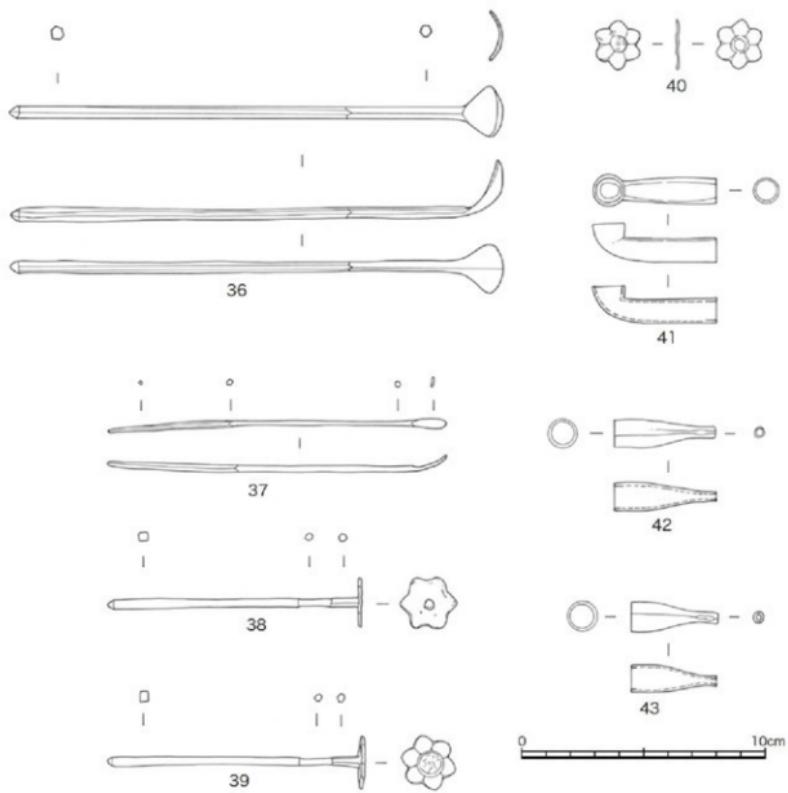
34



35



图版92 27号墓出土遗物④



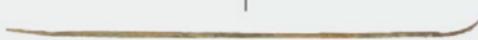
第62図 27号墓出土遺物⑤ 煙管(41~43)、簪(36~40)



|



|



40



-



-

图版93 27号墓出土遗物⑤

第23節 28号墓

1. 遺構

観察一覧（第68表）に示す。

2. 出土遺物

墓があったと思われる位置から28点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、白磁・染付等の中国産磁器、土器等である。沖縄産施釉陶器については、他の古墓のように瓶が主体となっておらず、瓶・壺・酒器が目立つことは特徴的である。本土産近現代磁器を含まないことから、本古墓群の中でも古式の様相を呈すると考えられる。



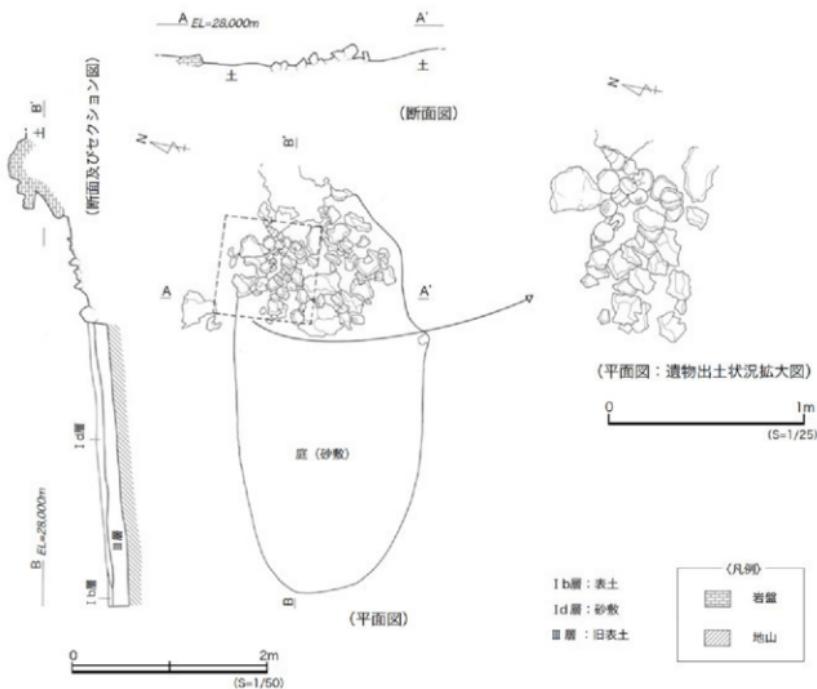
図版94 28号墓出土遺物集合

第68表 28号墓観察一覧

掲載番号	第63図
図版番号	図版95
立地	緩やかな傾斜地に岩盤が露出する。
構造	分類 石積石室墓（I類C）
	規模 縦（東－西軸）約1.6m、横（北－南軸）約1.7m
	工法 調査前に造成等で墓の大部分が破壊され、石積の一部が僅かに残る。
	天井 何で閉じられていたかは不明。
	床 墓室内外の領域が不明瞭な状況。
	墓口 何で閉じられていたかは不明。
人骨・遺物出土状況	沖縄産の瓶や壺、酒器などが集中し、且つ良好な状態で出土したため、この遺物出土地が墓室内と思われる。
葬法分類	不明（III類）
砂敷	墓口前から砂が敷かれ、庭を形成。
時期	近世～近代
備考	

第69表 28号墓遺物出土状況

器種・分類	市土地 種類	表土				合計
		沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	白磁	埋納軸	
小鏡				1		1
杯				2		2
壺	I類	A		1		1
	大	有文②	1			1
	II類	A 小	1			1
		B 小	1			1
	V類	B 小		1		1
		分類なし		9		9
瓶	II類	I 有文①	1			1
	III類	3 C	1			1
	VI類	2	1			1
		VII類	2			2
		有文	1			1
酒器	II類	無文	1			1
		A	1			1
		B	1			1
				1		1
瓦				1		1
合計		13	11	1	2	28



第63図 28号墓



遺景 [西より]



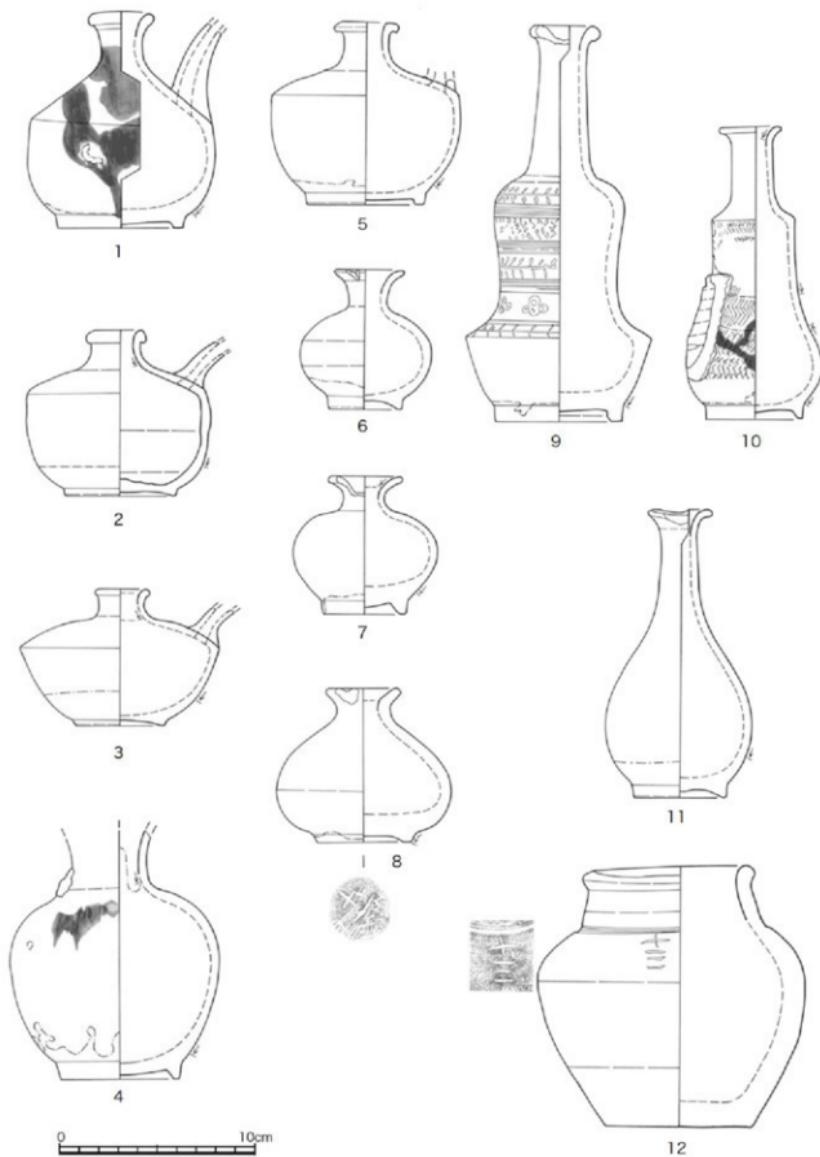
遺物出土状況 [西より]

図版95 28号墓

第70表 28号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見	出土地
第64図 ・ 図版96	沖縄産 施釉陶器	1	酒器	口～底	3.4 11.1 6.3	II-1 有文	灰釉を腰部下方まで施す。高台は露胎とする。腰部や高台に砂が付着する。素地は灰色で微粒子。	表土
					3.1 8.5 5.8	II-2A	白化粧に透明釉を腰部上方まで施す。腰部下方から高台は露胎とする。素地は灰色で微粒子。	
					2.8 7.0 4.7	II-2B	飴色釉を腰部上方まで施す。腰部下方から高台は露胎とする。素地は白灰色で微粒子。	
		4	壺	頸～底	— — 6.0	I 有文②	灰釉を腰部まで施し、腰部下方から高台は露胎とする。貫入が目立つ。高台に砂が付着する。体部の至る所に粘土塊が張り付いており、効果を狙ったものでないとすれば、粗悪品である。	
		5	酒器	口～底	3.4 9.4 6.1	II-1	褐色釉を腰部上方まで施す。腰部下方から高台は露胎とする。高台に砂が付着する。素地は白灰色で微粒子。	
		6	壺	口～底	3.6 7.1 3.8	II-2	褐色釉を腰部上方まで施す。腰部下方から高台は露胎とする。比較的頸が長い。成形が丁寧である。素地は灰白色で微粒子。	
		7			3.8 7.05 4.3	II-1B	赤褐色の釉を腰部下方まで施し、高台は露胎とする。高台に砂が付着する。素地は乳白色で微粒子。	
		8			3.8 7.9 4.8	V-B	褐色釉を高台脇まで施す。豊付けから外底面は露胎とする。重量感があり、重い。外底面に「十」「一」の判がある。素地は暗灰色で微粒子、微砂粒が目立つ。	
		9	瓶	口～底	3.6 20.3 6.5	II-1 有文①	白色釉を腰部まで施す。高台外側と豊付けは露胎とするが、外底面は釉が塗られる。素地は橙色で微粒子。	
		10			3.2 15.0 4.9	III-3c	口縁部から胴部中央までは飴色釉、胴部下方は露胎、腰部は灰釉を施す。胴部下方から飴色釉が流し掛けされる。腰部と外底面に砂が付着する。素地は灰白色で微粒子。	
		11			3.3 14.8 4.8	VI-2	褐色釉を腰部まで施し、高台は露胎とする。素地は灰白色で微粒子。	
	沖縄産 無釉陶器	12	壺	口～底	8.8 13.4 7.4	II-B	寸胴。肩部から頸部に向かって屈曲し頸部に至る。口縁部は僅かに肥厚する。肩部に「十」「三」の判がある。素地は淡橙色で微粒子、大粒の砂粒が混入する。	



第64図 28号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器（1～11）、沖縄産無釉陶器（12）



图版96 28号墓出土遗物

第24節 29号墓

1. 遺構

観察一覧（第71表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外や庭から72点の遺物が確認された。本古墓群中、最も多くの遺物が確認された古墓である。その内、墓室内は36点と半数を占めている。種類は、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、中国産白磁・染付・唇、ガラス瓶がある。沖縄産陶器が遺物の大半を占めており器種構成も豊富で、沖縄産施釉陶器では碗・小碗・皿・杯・瓶・壺、沖縄産無釉陶器では壺が確認された。この古墓では26号墓と同様に墓室内外の遺物構成に大きな違いが見られる。

墓室内は沖縄産施釉陶器が主体となる（施釉：無釉 = 29点 : 1点）ことに対して、墓室外は沖縄産無釉陶器の壺が主体をなし（施釉：無釉 = 3点 : 28点）ている。ガラス瓶が1点庭から確認されているが、本古墓使用時というよりは後年持ち込まれたものであると考えられる。本土産近現代磁器を含まないことからも、本古墓群の中でも古式の様相を呈していると考えられる。



図版97 29号墓出土遺物集合

第71表 29号墓観察一覧

挿図番号	第65図
図版番号	図版98
立地	調査区西側の緩やかな斜面地。
構造	<p>分類 石積石室墓（I類B i c）</p> <p>規模 縦（北東—南西軸）約2.8m×横（北西—南東軸）約1.6m 墓室内：縦約0.7m×横約0.4～0.5m×高さ約0.3m</p> <p>工法 地面を少し掘り下げて整地。整地した後に盛土（IIa層）をしていると思われる（床石の下は掘り下げてはいないが、庭を掘削して確認した層から推測）。墓室の周りを板石や礫石を積んでいる。墓室の周りは多くの礫石を敷き沿うように小高く積んでいる。 墓室内奥・右・左壁：大きな板石（石灰岩）を組み、その上に石積みで補足。 左壁の一部は地面の上にそのまま石積みする。</p> <p>天井 蓋石（砂岩・ビーチロック）で閉じており、砂岩の上からビーチロックを重ねるように乗せる。</p> <p>床 床石（砂岩・石灰岩）が敷かれている。床石下には盛土（IIa層）があると思われる。</p> <p>墓口 墓口前にブロック状の砂岩を並べているが、何で閉じられていたか不明。 墓口の方位：南西</p>
人骨・遺物出土状況	墓室内から人骨・遺物が散在して検出された。沖縄産施釉陶器の瓶が墓口付近にまとまって出土。 庭・墓室外には沖縄産無釉陶器を中心に出土。
葬法分類	二次葬（II類C）
砂敷（I d層）	墓室内から墓口前まで砂が敷かれており、墓口前は砂敷で庭を形成。
時期	近世～近・現代
備考	墓口前には石灰岩の疊石をマウンド状に積んであり、その一帯には沖縄産無釉陶器の破片・蓋石（ビーチロック）の一部と思われるものが散在している。遺物等を廃棄する場所としての可能性がある。



墓全景〔南西より〕



庭（砂敷）検出状況〔南西より〕



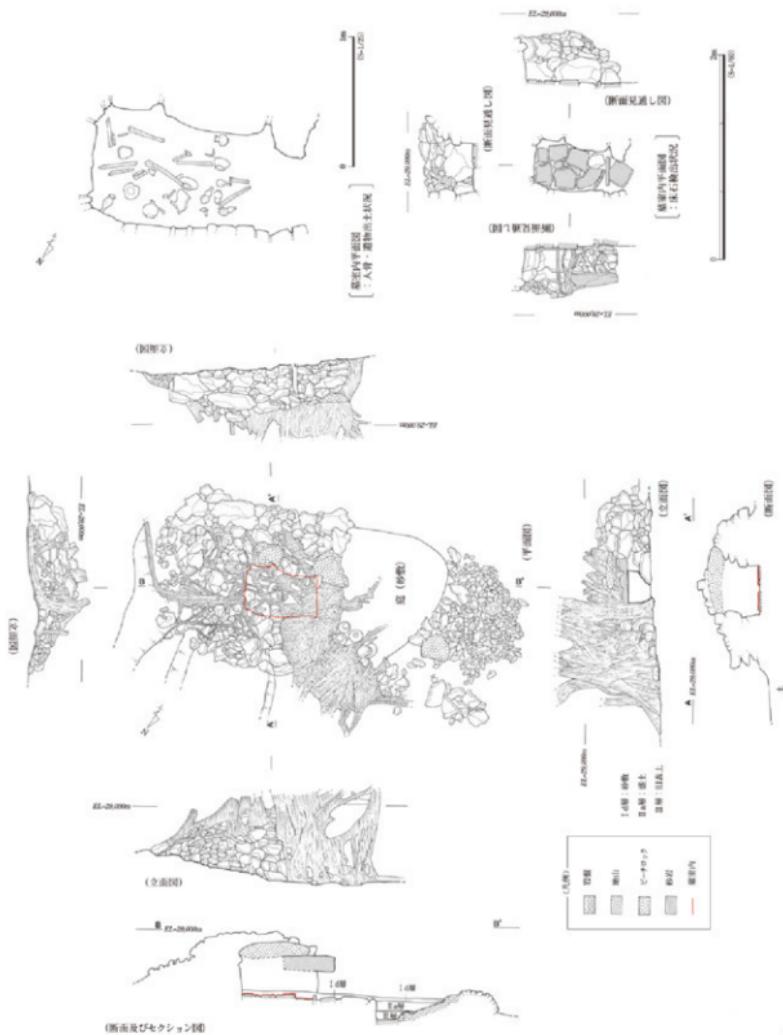
墓室内：調査前状況〔南西より〕



庭・墓室外：遺物検出状況〔南西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況〔南東より〕



第65図 29号層

第72表 29号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 床面						室外 裏土			庭		合計
		沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	白磁	染付	肥前系 染付	金属 製品	小計	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	色絵	小計	
碗	I類 A 無文	7						7			0	0	7
	A a 有文③	1						1			0	0	1
	II類 無文	2						2	1		1	0	3
	B b	1						1			0	0	1
	B c	2						2	1		1	0	3
	分類なし			1		1	1	1	1	2	0	0	3
	小杯		b	1		1		1		0	0	0	1
皿	II類 B	c	2			2		2		0	0	0	3
	皿					1		1		0	0	0	1
	小杯					2		2		0	0	0	3
	A							0	1	1	1	0	1
	I類 有文①	1				1		1		0	0	0	1
	大 無文	1				1		1		0	0	0	1
	II類 A							0	1	1	1	0	1
	III類 1 A小	2				2		2		0	0	0	2
	IV類 小	1				1		1		0	0	0	1
	分類なし							0	2	2	2	0	3
瓶	V類 A		1			1		1		1	1	0	2
	V	B						0		0	1	1	1
	VI類 A					0		1		1	1	1	2
	B					0		2		2	0	0	3
	VII類 A					0		0		1	1	1	1
	分類なし					0		20		20	0	0	20
	III類 1 B	1				1		1		0	0	0	1
瓶	IV類	2				2		2		0	0	0	2
	VII類 1	1				1		1		0	0	0	1
	VII類	2				2		2		0	0	0	2
	VIII類	1				1		1		0	0	0	1
菅	I類					1	1	1		0	0	0	1
	II類					1	1	1		0	0	0	1
ガラス瓶						0		0		0	1	1	1
	器種不明		1			1		1		0	0	0	1
合計		29	1	2	1	1	2	36	3	28	1	32	3
									3		1	4	72

第73表a 29号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高/底径/横径	分類	観察所見	出土地
第66図 ・ 図版 99	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.4 7.0 7.8	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。	室内 床面
					13.0 6.25 6.4	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。	
		2			12.9 6.5 6.6	I-A	灰釉。釉色は1・2と比べて暗い。素地は微粒子。	
		3			12.0 6.0 6.2	II-Aa 有文③	外面に鈴釉と緑釉で花文を施す。疊付けと見込みにアルミナが付着する。素地は灰白色で微粒子。	
		4			11.9 6.2 6.1	II-Aa	白化粧に透明釉で総釉するが、見込みは蛇目状に釉剥ぎする。釉剥ぎ部分が小さい円である。高台外底の白化粧は縦で露胎部分がある。器面の細かい貫入が目立つ。疊付けにアルミナが付着。素地は灰白色で微粒子。	

第73表b 29号墓出土遺物観察一覧

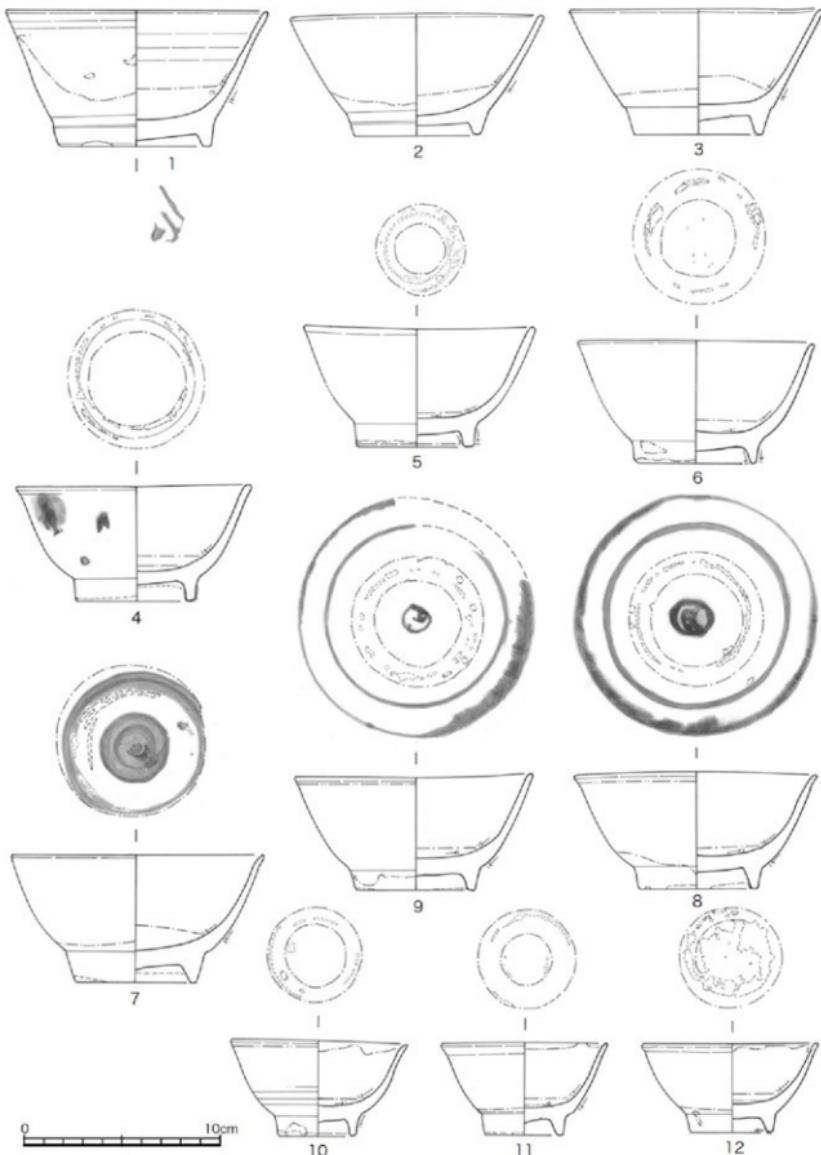
単位:cm

擇団番号 圖版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/摘径	分類	観察所見	出土地
第66図 ・ 図版 99	沖縄産 施釉陶器	6	碗	口～底	12.2 6.3 6.3	II-Aa	白化粧に透明釉で縁剥がすが、見込みは蛇目状に釉剥ぎする。高台外底の白化粧は雑で露胎部分がある。器面の細かい貫人が目立つ。豊付けにアルミナが付着。素地は灰白色で微粒子。	室内 床面
		7			13.0 6.65 6.2	II-Ba	褐色釉を施す。豊付けと見込みにアルミナが付着する。素地は灰白色で微粒子。	
		8			12.5 5.9 6.2	II-Bc	外面は褐色釉、内面は淡緑色の灰釉を施す。高台は露胎。豊付けと蛇目状に釉剥がされた見込みにアルミナが付着する。素地は白灰色で細粒子。	
		9			12.2 6.0 6.1	II-Bc	外面は褐色釉、内面は淡緑色の灰釉を施す。高台は露胎。豊付けと蛇目状に釉剥がされた見込みにアルミナが付着する。素地は白灰色で細粒子。	室外 表土
		10	小碗	口～底	9.1 4.95 4.0	II-Bb	外面は褐色釉、内面は白化粧に透明釉を施す。内面の貫人が目立つ。豊付けにアルミナが付着。素地は淡橙色で細粒子。	室内 床面
		11			8.5 4.8 4.1	II-Bc	外面は褐色釉、内面は灰釉を施す。豊付けにアルミナが付着。素地は淡橙色で細粒子。	
		12			9.05 4.6 4.3	II-Bc	外面は褐色釉、内面は灰釉を施す。豊付けと見込みに砂が付着。素地は灰色で細粒子。	
		13	不明	底	— — 8.3	—	肥前が関西系と思われる。台付製品の台である。豊付けとその周辺を除き、淡緑灰色の釉を施す。立ち上がり部を意図的に割り取っているため、転用品となっている。細粒子。	
第67図 ・ 図版 100	沖縄産 施釉陶器	14	壺	口～底	6.5 13.9 6.4	I 有文①	大型。褐色釉を口縁部から肩部にかけて掛け流す。素地は灰色で細粒子。	室内 床面
		15			— 11.3 5.8	I	大型。黒色釉を腰部下方まで施すが、高台外底面には雑に塗る。高台内側面や腰部に多量の砂が付着する。素地は灰色で微粒子。	
		16			2.9 5.75 3.4	II-1A	褐色釉を施す。素地は灰色で微粒子。	
		17			3.65 8.35 5.6	II-1A	飴色釉を腰部下方まで施し、さらに高台外底面は雑に塗る。素地は淡橙色で細粒子。	
		18	瓶	肩～底	2.05 5.25 3.7	IV	高台内削りがやや雑で豊付けの幅が均一ではない。白化粧に透明釉を施すが、白化粧は胴部中央の最大径まで、透明釉はそれよりやや下方まで施し、装飾的である。素地は細粒子。	室内 床面
		19		口～底	3.1 15.2 6.0	V	口縁部を肥厚させる。口縁部から頸部までは褐色釉で、胴部から底部までは飴色釉を施す。外底面は飴色釉を薄く雑に塗る。頸部付近に文様を施す。素地は灰色で細粒子、微砂粒を含む。	
		20			— 5.2	III-1B	20-21は同一形状の製品。口縁部から頸部まで青白色の釉を、肩部から高台外側面まで褐色釉を施す。豊付けから外底面は露胎とするが、外底面に一部褐色釉を塗る。	
		21			2.35 14.75 5.25	IV	肩部の縁から口縁部まで灰釉。腰部から飴色釉を統一し、豊付けを釉剥ぎする。露胎する胴部に飴色釉を流れ掛けする。胴部上方に2条、胴部下方に1条、腰部上方に1条の沈巻線。豊付け内面側面に砂が付着。素地は灰白色で微粒子。	
		22			2.6 15.4 5.5	IV		

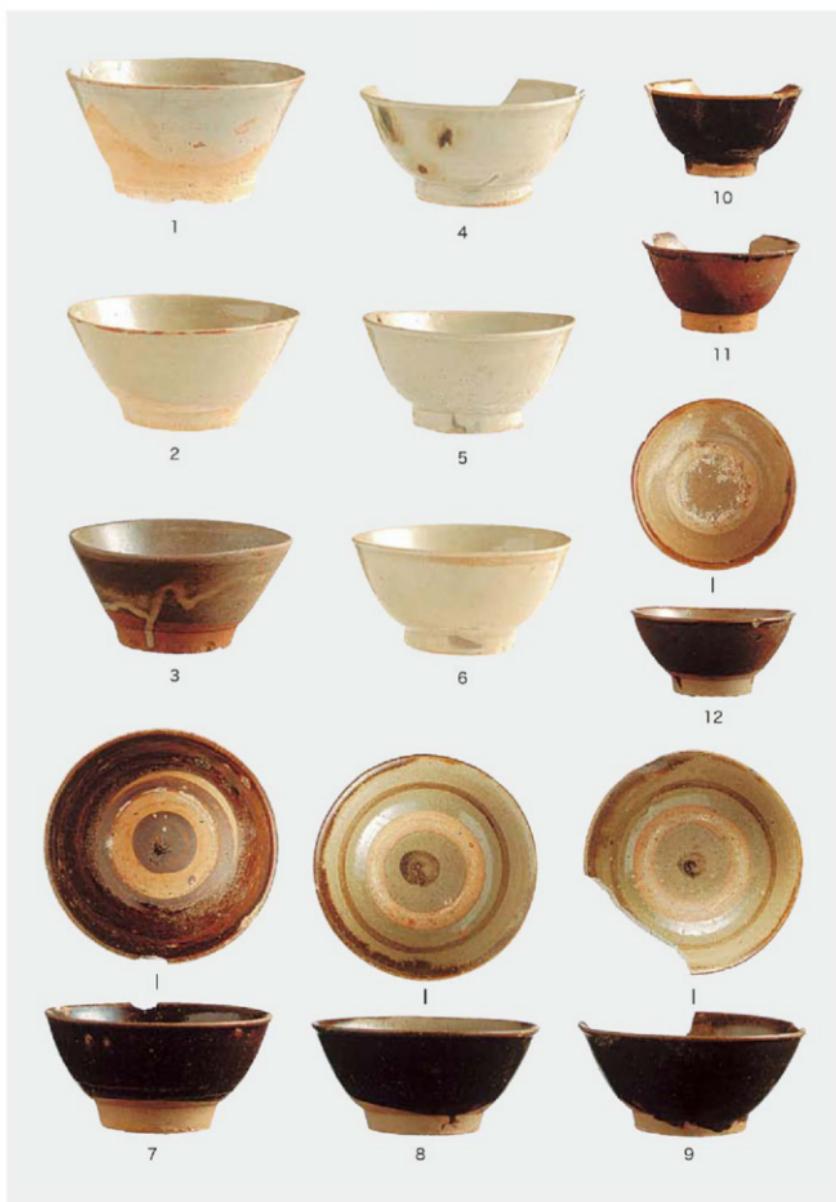
第73表c 29号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

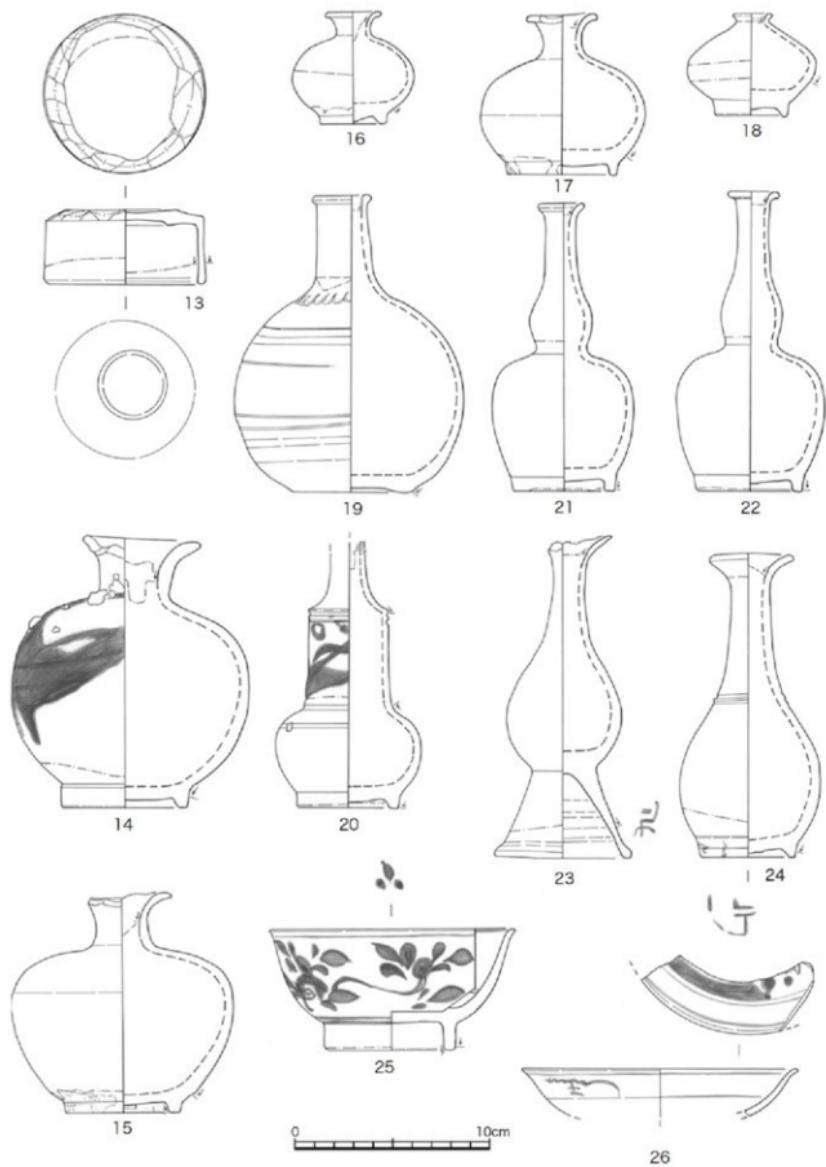
挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/横径	分類	觀察所見	出土地
第67 図 ・ 図版 100	沖縄産 施釉陶器	23	瓶	頭～底	— 16.5 7.0	VII	持状の高台を張り付ける。褐色釉を高台外側面の下方まで施す。素地は橙色で細粒子。	
		24		口～底	4.35 15.6 4.8	VI-1	頭部と肩部の境界付近に2条の沈圧線。褐色釉を腰部まで施す、外底面に墨書きがある。素地は細粒子で、微砂粒が目立つ。	
	染付	25	碗	口～底	12.6 6.25 6.7	—	徳化窯系。腰部が丸く張り、口縁部が弱く外反する。高台が高く、器高が低い。外面に五つの草花文。見込み中央に不明文。外面の高台脇、腰部、口縁部に一条ずつ圧線が入る。内面口縁部に一条、見込みに二条の圧線が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。疊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
	肥前系 染付	26	皿	口	14.2 — —	—	腰部が丸く張り、口縁部が弱く外反する。外面胴部に簡略化した毫文。見込みに荒磯文が描かれているように見えるが、不明である。外面口縁部に一条の圧線。内面口縁部に一条、見込みに二条の圧線が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。素地は灰白色微粒子。	
	色絵	27	碗	底	— — 6.5	—	徳化窯系。高台径が大きく、腰部が丸みを帯びる。外面腰部に赤色の顔料で、蓮弁文が絵付け。全体に明緑色の釉が掛かる。疊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室外 表土
	白磁	28	小杯	口～底	3.75 2.0 2.0	—	徳化窯系。型成形。灰黄色の釉が掛かる。素地は観察出来ず。	室内 床面
		29			3.8 2.05 1.95	—	徳化窯系。型成形。28より高台が低い。直口口縁で口壳げ。灰黄色の釉が掛かる。素地は観察出来ず。	
第68 図 ・ 図版 101	沖縄産 無釉陶器	30	壺	口～底	13.7 34.6 13.0	V-B	肩部に1条の沈圧線。その上に「十一(?)」の判がある。	庭
		31		口～肩	15.2 — —	VI-B	肩部に2条、肩部と頸部の境界に1条の沈圧線。素地は暗赤褐色で微粒子。	室外 表土
		32		口～底	17.0 36.3 16.3	VI-A	肩部に2条の沈圧線。その上に「三」の判がある。	庭
		33		口～胴	16.6 — —	VI-A	肩部に2条の沈圧線。素地は赤褐色で細粒子、大粒の砂粒を少量含む。	室外 表土
		34		口～底	14.8 — —	V-A	肩部に1条の沈圧線。明褐色で微粒子、大粒の砂粒を少量含む。	室内 床面
		35		口～底	12.3 37.0 16.5	VII-A	肩部上方に7条の沈圧線、その下に「〇」の判、その後に1条の沈圧線。素地は暗赤褐色で細粒子、大粒の砂粒を多量に含む。	庭
		36	—	完形	— — —	III	竿の断面は六角形で先端から14.1cmの所で面が互い違いになる。竿幅は先端に向かって若干太くなり先端部は六角錐となる。長さ20.6cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重量26.3g。銅製。	室内 床面
	簪	37	—	破損	— — —	I	花が欠損し花の基部が竿に付く。花弁は6枚で径は2.0cm、下部は首、ムディー、竿からなり、首は径0.5cmの六角形、ムディーは径0.4cmの円形で浅く細かいねじれが見られる。竿は径0.5cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。長さ11.0cm、重量17.0g。銅製。	



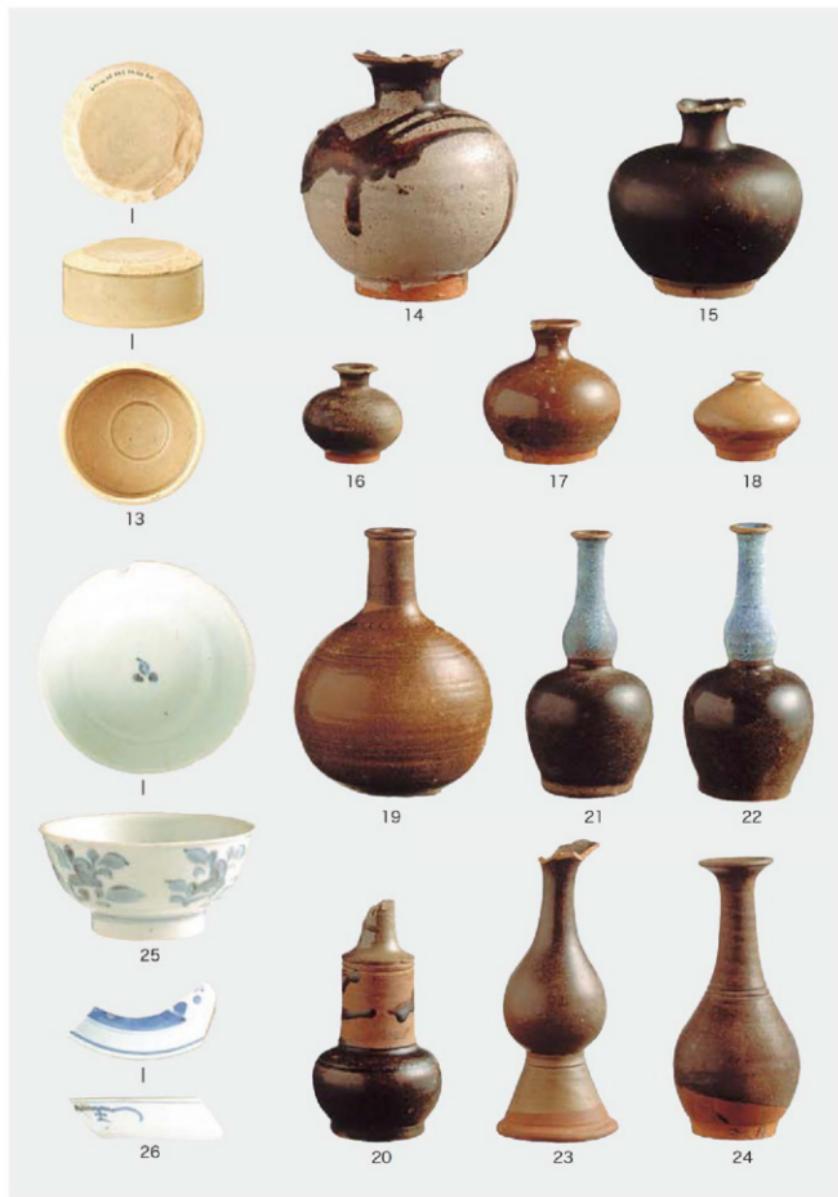
第66図 29号墓出土遺物① 沖縄産施釉陶器



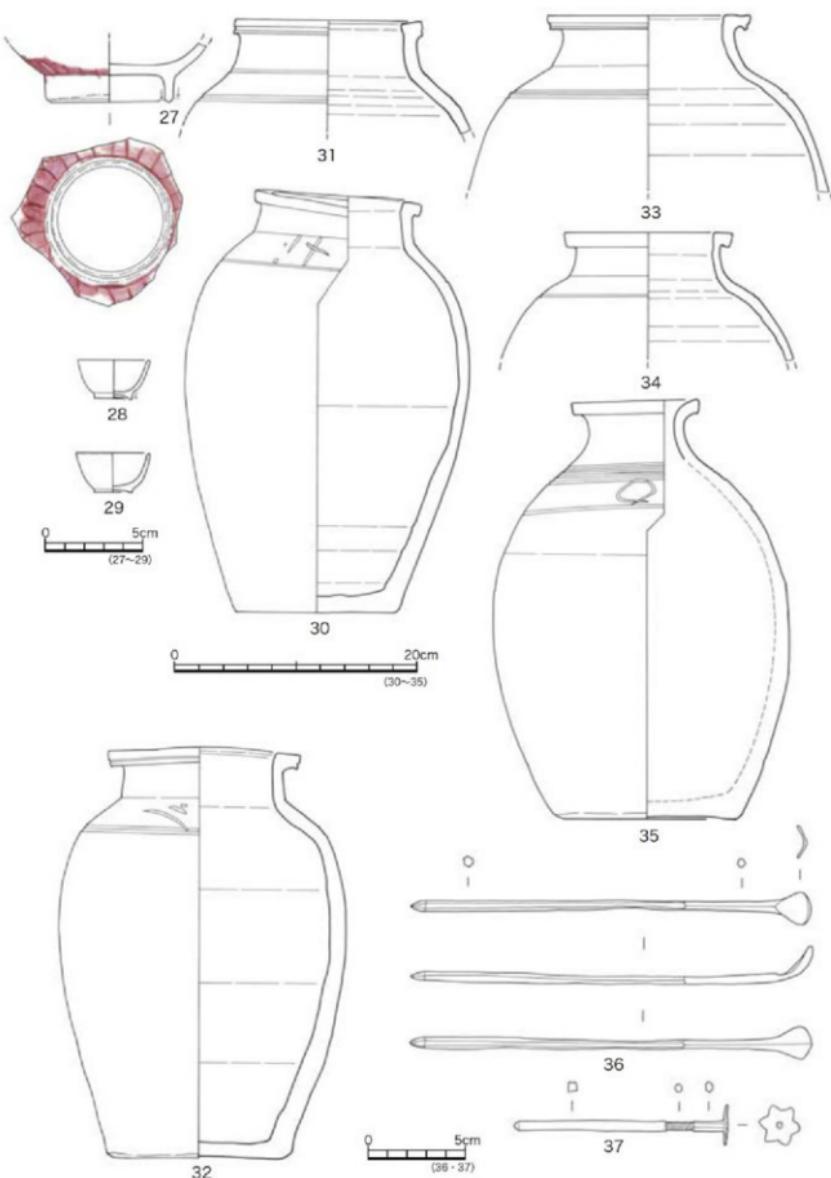
图版99 29号墓出土遗物①



第67図 29号墓出土遺物② 沖縄産施釉陶器（14～24）、染付（25）、肥前系染付（26）、本土産陶器（13）



图版 100 29号墓出土遗物②



第68図 29号墓出土遺物③ 沖縄産無釉陶器(30~35)、白磁(28・29)、色絵(27)、簪(36・37)



图版101 29号墓出土遗物③

第25節 30号墓

1. 遺構

観察一覧（第74表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から38点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・染付・瑠璃釉・色絵等の中国産磁器、簪、ガラス製品等がある。遺物量では沖縄産陶器が過半数を占めている。この古墓も26・29号墓と同様に沖縄産陶器の遺物構成に違いが見られる。墓室内は沖縄産施釉陶器しか確認されていない（施釉：無釉 = 6点：0点）のに対して、墓室外や庭は沖縄産無釉陶器が主体となって（施釉：無釉 = 2点：17点）いる。また、28号墓を除く24～29号墓と本古墓には遺物出土量に大きな違いが見られ特徴的である。28号墓を除く24～29号墓は墓室外よりも墓室内的遺物出土量が過半数であったのに対し、本古墓は墓室外が28点と過半数を占めている。本古墓からは沖縄産無釉陶器の大型花瓶が確認されている。この大型花瓶が確認されたのは本古墓のみである。これまで見てきた24号墓～29号墓と同様、本古墓群の中でも古式の様相を呈すると考えられる。



図版102 30号墓出土遺物集合

第74表 30号墓観察一覧

掲図番号	第69図
図版番号	図版103
立地	調査区西側の緩やかな斜面地。
分類	石積石室墓（I類 Bib）
規模	縦（東一西軸）約4.9m、横（北一南軸）約3.5m。 墓室内縦約1.6m、横約0.9m、高さは0.5～1.1m。
構造	地面を掘り下げ整地し、その上から盛土（IIa層）をしていると思われる（床石の下は掘り下げていないが、墓庭を掘削して確認した層から類推）。 墓室内奥壁、左、右壁：石灰岩を板状、あるいは方形状に加工し丁寧に積み上げる。 墓室の周囲は衝鉢状に積まれ墓室内に比べると積み方が粗くなる。石は大小様々な大きさの石灰岩を大部分使用しているが、一部砂岩も見られる。
工法	天井 大型の蓋石（砂岩）を3枚重ねて使用。
	床 床石（砂岩・石灰岩）が敷かれている。床石下には盛土（IIa層）があると思われる。
	墓口 調査前にはセメントブロックで閉じられていた。 墓口の方位：西
人骨・遺物 出土状況	墓室内は人骨が墓の持ち主によって大部分持ち出されたため、取り損ねたものと思われる人骨が一部残存していた。
葬法分類	二次葬（II類D）。
砂敷	墓口前には砂が敷かれ、庭を形成。
時期	近世～近・現代
備考	調査期間内に墓の持ち主により、人骨が持ち出された。なお、移転の状況、聞き取りなどは行っていない。

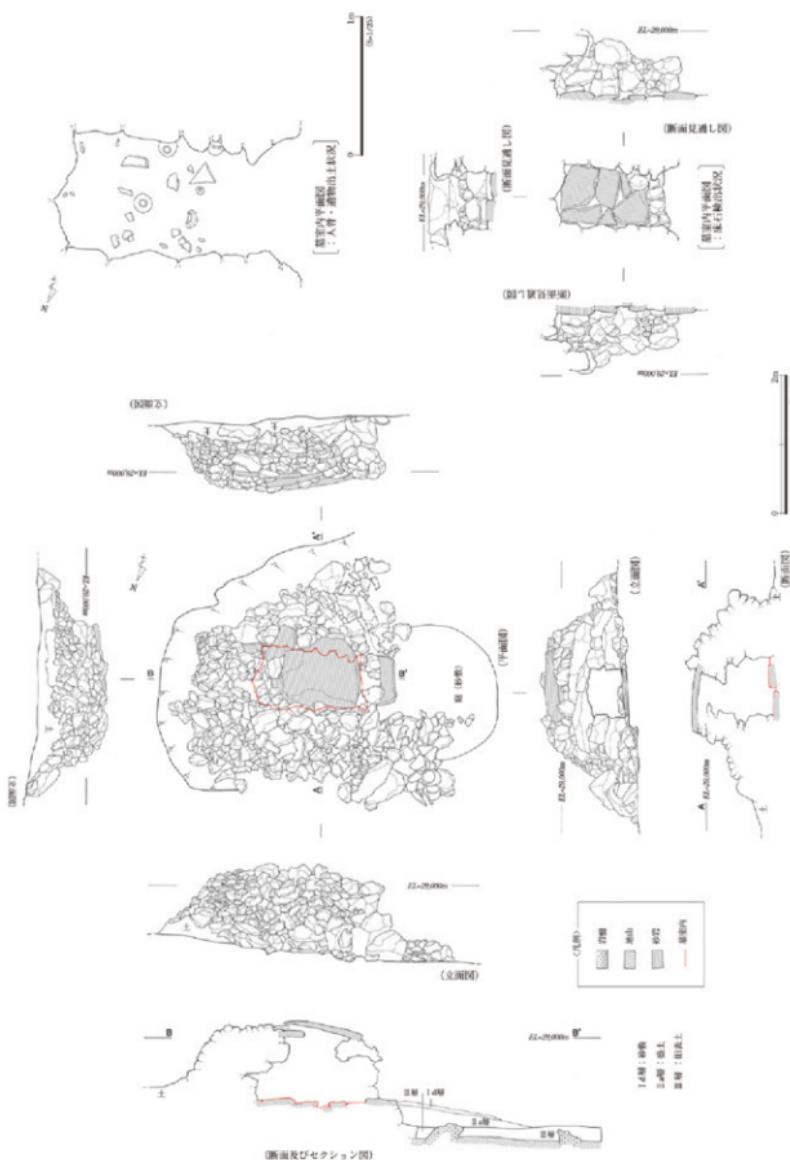


図69図 30号墓



墓全景〔西より〕



蓋石（砂岩）検出状況〔南より〕



蓋石除去後〔西より〕



墓室内：人骨・遺物出土状況〔西より〕



墓室内：床石（砂岩）検出状況〔西より〕

第75表 30号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 床面					室外 表土					底					合計
		沖縄産 施釉陶器	婆付	色絵	端模様	金属 製品	小計	沖縄産 施釉陶器	ガラス 製品	瓦	小計	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 施釉陶器	本土産 陶器	ガラス 製品	小計	
碗	II類	A a 無文					0			0	1				1	1	
		B a	1				1			0					0	1	
b		b	1				1			0					0	1	
							0			0			1		1	1	
筒碗							0			0							
瓶	Ⅰ類	I	C	1			1			0					0	1	
	Ⅱ類	2	B	1			1			0					0	1	
分類なし				1	1		2			0					0	2	
杯	Ⅰ類	A	1				1			0					0	1	
小杯							1	1		0					0	1	
壺	IV類	底部					0			0		1			1	1	
	V類	A					0	1		1					0	1	
	VII類	B					0	1		1					0	1	
	分類なし	A					0			0	1				1	1	
花瓶							0	1		1					0	1	
酒器	Ⅲ類		1				1			0					0	1	
	分類なし						0			0	1				1	1	
簪	Ⅰ類					1	1		0						0	1	
ガラス瓶							0			0					4	4	
コップ							0		3	3					0	3	
瓦							0			1	1				0	1	
合計			6	1	1	1	10	13	3	1	17	2	4	1	4	11	38

第76表a 30号墓出土遺物観察一覧

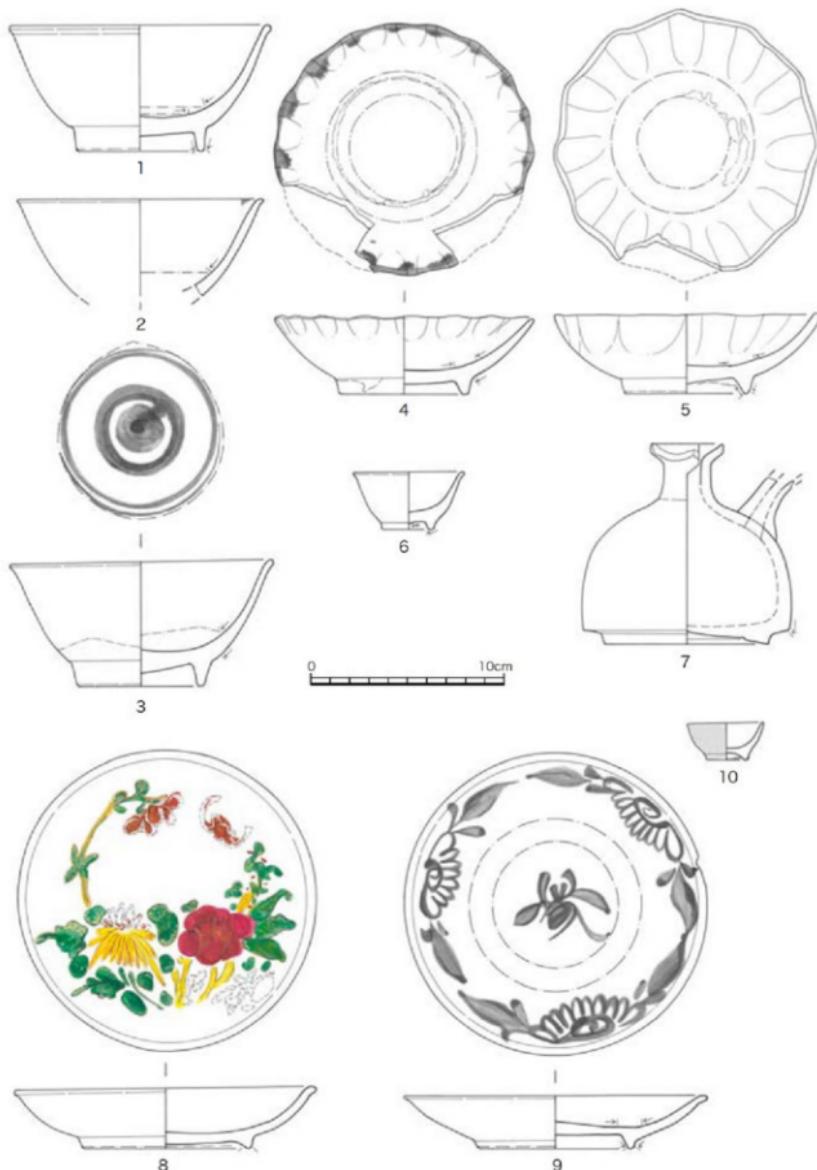
単位:cm

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縦径 横径/底径/横径	分類	観察所見		出土地	
							壁	床面		
第70 図 ・ 図 版 104	沖縄産 施釉陶器	碗	口～底	1	13.3 6.5 6.6	II-Aa	白化粧に透明釉で総輪する。器面に細かい貫入が目立つ。見込みは蛇目状に釉剥ぎ、疊付けにはアルミナが付着。素地は灰色で細粒子。		庭	
				2	12.6 — —	II-Bc	外面は鈎色釉、内面は灰釉を施す。素地は灰白色で細粒子。			
				3	13.5 6.5 6.4	II-Ba	褐色釉を施す。見込み中央に丸、その脇に帯状の線を2条描く。素地は淡橙色で細粒子。			
		皿	口～底	4	13.3 4.0 6.6	II-1C	外面は黒色釉、内面は白化粧に透明釉を施す。白化粧に透明釉を施した後、黒褐色釉を施しておらず、内面に垂れている。見込みは蛇目状に釉剥ぎ、高台は癪胎とする。疊付けと蛇目状に釉剥ぎされた見込みにアルミナが付着する。素地は灰白色で細粒子。		室内 床面	
				5	13.6 4.1 6.2	II-2B	外面は褐色釉、内面は白化粧に透明釉を施す。成形外後に褐色釉を施した後、内面に白化粧を施す。その後、口唇部の面取りを行い、最後に透明釉を施す。見込みは蛇目状に釉剥ぎ、疊付けも釉剥ぎ。外底面の釉は難に塗られており、一部が露胎する。疊付けにアルミナが付着する。素地は淡橙色で細粒子。			

第76表b 30号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

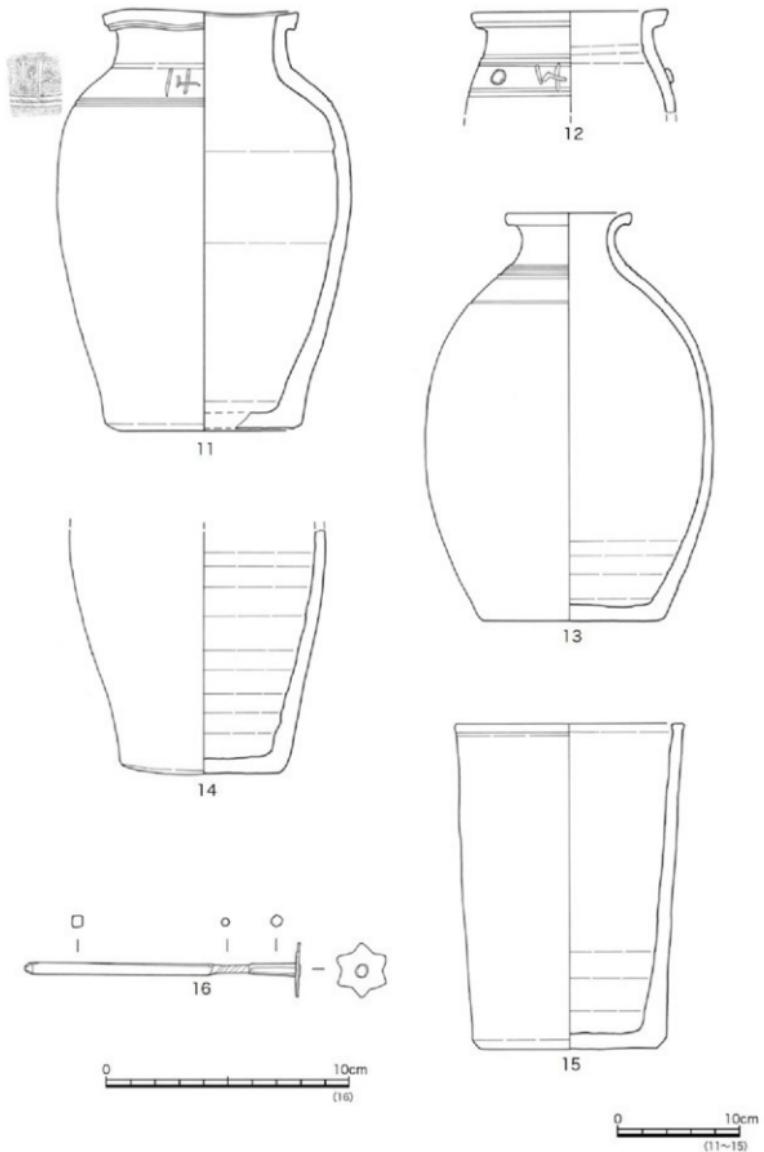
挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 高さ/底径/横径	分類	観察所見	出土地
第70図 ・ 図版 104	沖縄産 施釉陶器	6	杯	口～底	5.7 3.0 2.6	I-A	高台内側面から外底面を除き白化粧に透明釉を施すが、豊付けは透明釉を施さない。器面に細かい貫入が目立つ。素地は淡橙色細粒子。	
		7	酒器	口～底	3.6 10.3 8.4	III	光沢を持つ赤色釉を腰部まで施す。釉には黒斑が浮き出ている。このタイプの釉は本古墓群では少量しか確認されていない。素地は灰白色で微粒子。	
	色繪	8	皿	口～底	15.5 3.2 8.4	—	高台から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁部は外反する。内面全体に赤・茶・黄・緑の色で、花文が繪付けされている。全体に透明釉を施す。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。	室内 床面
		9			15.6 2.8 7.6	—	徳化窯系。高台脇から逆ハの字状に開き、胴部で少し丸みを帯びる。口縁部は外反する。内面胴部に半菊花文が三つ配置。見込みに花文(?)。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇目釉剥ぎ。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	
	瑠璃釉	10	小杯	口～底	3.9 1.9 2.0	—	成型形。口縁部は直口。外面のみに瑠璃釉が掛かる。内面は透明釉。素地は白色微粒子。	
第71図 ・ 図版 105	沖縄産 無釉陶器	11	壺	口～底	17.3 3.72 17.3	VI-A	肩部に2条の沈匿線。その上に「十二」の判。素地は暗赤褐色で細粒子、大粒の砂粒が含まれる。	
		12		口～胴	16.2 — —	VI-B	頸部と肩部の境界に3条の、胴部上方に2条の沈匿線、その間に「十一」の判。丸いボタン状のものを張り付ける。素地は暗赤褐色で微粒子、微砂粒を含む。	室外 表土
		13	壺	口～底	11.2 35.9 15.5	VII-A	肩部と頸部の境界に7条の、胴部上方に1条の沈匿線。素地は暗赤褐色で微粒子、微砂粒を含む。	庭
		14		底	— — 14.2	—	素地は暗赤褐色で細粒子、微砂粒を含む。	室外 表土
		15	花瓶	口～底	20.3 28.7 15.5	—	底部から直線的に開き口縁部に至る方形の器形。口唇部は平坦に形成する。素地は灰色と赤褐色で微粒子、微砂粒を含む。本古墓群で1点のみ確認された。	
	簪	16	—	破損	— 11.3 —	I	花が欠損し花の基部が竿に付く。花弁は6枚で径は2.25cm。下部は首、ムディー、竿からなり、首は径0.5cmの六角形で花に向かって若干太くなる。ムディーは径0.4cmの円形で浅く大まかにねじれが見られる。竿は径0.5cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。重量17.9g。銅製。	室内 床面



第70図 30号墓出土遺物① 沖縄産施釉陶器 (1~7)、染付 (9)、色絵 (8)、瑠璃釉 (10)



图版 104 30号墓出土遗物①



第71図 30号墓出土遺物② 沖縄産無釉陶器（11～15）、簪（16）



11



12



14



13



15



16

图版105 30号墓出土遗物②

第26節 31号墓

1. 遺構

観察一覧（第77表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から31点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、中国産染付、瓦である。沖縄産施釉陶器が大半を占めており、染付と簪はそれぞれ1点確認されたのみである。大半の遺物が墓室内で確認されており、墓室外からは沖縄産無釉陶器のみである。沖縄産陶器の構成は墓室内外で遺物出土状況が大きく違う。墓室内は沖縄産施釉陶器のみ、墓室外は沖縄産無釉陶器のみとなっている。沖縄産施釉陶器では碗と瓶がほぼ同じ量確認されており、施釉陶器の主体となっている。本古墓群の中でも古式の様相を呈すると考えられる。



図版106 31号墓出土遺物集合

第77表 31号墓観察一覧

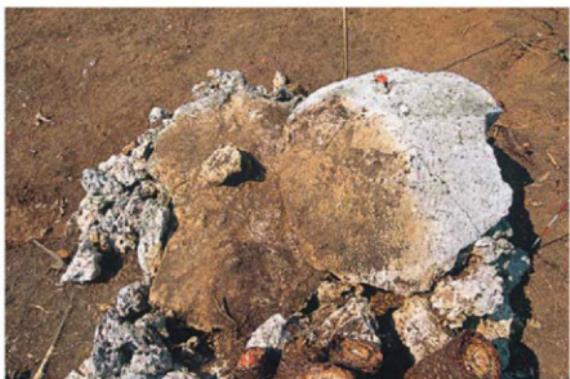
挿図番号	第72図
図版番号	図版107・108
立地	調査区西側の斜面地。
分類	石積石室墓（I類C）
規模	縦(東—西軸)・横(北—南軸)約1.7m四方。 墓室内:縦・横約1.1m四方×高さ約0.5m。
構造	地面を地山まで掘り下げて整地。墓室内は地面の上にそのまま練石を積んで囲っている。墓室の周りは多くの練石を墓に沿うように小高く積んでいる。 墓室内北・東・南壁:大小様々な練石で石積み。
工法	地面を地山まで掘り下げて整地。墓室内は地面の上にそのまま練石を積んで囲っている。墓室の周りは多くの練石を墓に沿うように小高く積んでいる。 墓室内北・東・南壁:大小様々な練石で石積み。
天井	蓋石(ビーチロック)二枚で閉じている。
床	地山を利用。
墓口	板石(石灰岩)で閉じている。 墓口の方位:西
人骨・遺物 出土状況	墓室内から人骨は散在して出土。 墓室内から沖縄産施釉陶器を中心にして出土しており、これらは墓口近くに集中して出土。 墓室外からは沖縄産無釉陶器を中心にして出土。
葬法分類	二次葬（II類C）
砂敷（I d層）	無し。
時期	近世～近代
備考	墓外南西部の傾斜地に石積みがあるが、土留め用の石積みと思われ、墓に伴う可能性がある。この石積みは北—南軸約3.4m×東—軸約0.3—0.7m×高さ0.1～0.25m。



图722图 31号墓



墓全景〔北西より〕



蓋石（ビーチロック）検出状況
〔南より〕



奥：31号墓・手前：土留め石積み
〔南西より〕

図版107 31号墓①



蓋石除去後【北西より】



墓室内：頭蓋骨【北より】



頭蓋骨拡大【北より】



墓室内：人骨・遺物出土状況【北より】



墓室内：出土遺物拡大【北より】

第78表 31号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内床面				室外表土			合計
		沖縄産 施釉陶器	染付	金属 製品	小計	沖縄産 無釉陶器	瓦	小計	
碗	I類	A 有文	1		1		0	1	
		無文	9		9		0	9	
		無文	1		1		0	1	
	分類なし			1	1		0	1	
皿	I類		1		1		0	1	
	I類	小	1		1		0	1	
	II類	A			0	1	1	1	
	IV類				0	1	1	1	
瓶	分類なし				0	2	2	2	
	I類	2	2		2		0	2	
	II類	1 有文	1		1		0	1	
	III類	2	2		2		0	2	
酒器	3 B	1	1		1		0	1	
	VI類	1	2		2		0	2	
		2	2		2		0	2	
器	I類	1 無文	1		1		0	1	
簪	II類				1	1	0	1	
瓦					0	1	1	1	
合計			24	1	1	26	4	1	31

第79表a 31号墓出土遺物観察一覧

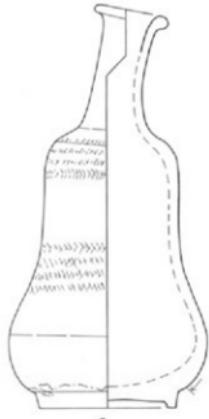
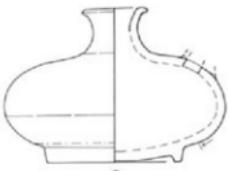
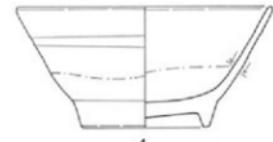
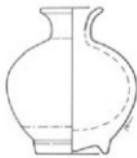
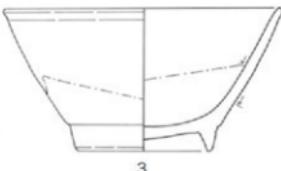
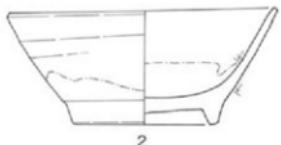
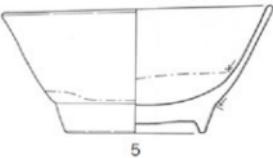
単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/摘径	分類	観察所見	出土地
第 73 図 ・ 図 版 109	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.65 5.35 6.9	I-A 有文	灰釉。胎色釉で2ヵ所、口縁付近に文様を施す。外底部に亀裂が入っている。疊付けに砂が付着する。素地は細粒子。	室内 床面
		2			13.8 6.95 7.45	I-A	灰釉。素地は淡橙色で細粒子。	
		3			14.3 7.4 7.1	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。	
		4			13.1 6.2 6.6	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。疊付けに砂が付着。	
		5			13.9 6.55 7.2	I-A	灰釉。細かい貫入が目立つ。素地は灰白色で微粒子。	
		6	皿	口～底	14.4 4.3 7.1	I	口縁部が外側に折れて屈曲する。透明釉を脣部中央まで施す。内削りが浅い。見込み中央に2条、口縁部付近に2条の帯状の線を描く。素地は淡橙色で細粒子。	
		7	壺	口～底	3.2 7.5 3.7	I	小型。褐色釉を脣部まで施す。素地は細粒子。	

第79表b 31号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高/底径/擴徑	分類	観察所見	出土地
第73図 ・ 図版 109	沖縄産 施釉陶器	8	酒器	口～底	3.35 7.9 6.9	I-1	褐色釉を腰部まで施す。高台の成形が丁寧である。素地は乳白色で細粒子。	室内 床面
		9	瓶	口～底	3.85 20.75 7.0	I-2	肩部と胴部下方に格子状の文様を施す。黒色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。素地は細粒子。	
		10			4.1 15.95 5.7	I-2	肩部から腰部まで文様を施す。黒色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。素地は淡橙色で細粒子。	
		11		頸～底	— — 6.1	II-1 有文②	赤褐色の釉を腰部下方まで施し、高台は露胎とする。釉に黒斑が浮き出ている。外底部に「水」の字状の墨書きが見られる。素地は白灰色で微粒子。	室内 床面
第74図 ・ 図版 110	沖縄産 施釉陶器	12	瓶	頸～底	— — 5.6	III-3B	肩部から上は褐色釉、腰部は灰釉を高台外側面まで施す。胴部は露胎とするが、褐色釉を流し掛けする。胴部に格子状の文様。素地は白灰色で微粒子。	室内 床面
		13		4.25 16.5 5.4	III-2	13・14は同一形状の製品である。胴部上方と腰部と胴部の境界にそれぞれ2条の沈線を施し、施釉範囲の区画とする。口縁部から胴部上方まで褐色釉を、腰部は灰釉を高台外側面まで施す。胴部中央から下方まで露胎とし、褐色釉を流し掛けする。胴部に文様。高台から腰部まで多量の砂が付着する。		
		14		3.85 16.55 5.4	III-2	13・14は同一形状の製品である。胴部上方と腰部と胴部の境界にそれぞれ2条の沈線を施し、施釉範囲の区画とする。口縁部から胴部上方まで褐色釉を、腰部は灰釉を高台外側面まで施す。胴部中央から下方まで露胎とし、褐色釉を流し掛けする。胴部に文様。高台から腰部まで多量の砂が付着する。		
		15		— 15.4 5.2	VI-1	釉を高台脇まで施す。素地は橙色で細粒子。		
		16		3.7 14.95 4.9	VI-1	黒色釉を腰部下方まで施す。素地は微粒子。		
		17		5.1 12.9 5.4	VI-2	17・18は同一形状の製品である。明褐色釉を腰部下方まで施し、高台は露胎とする。肩部と頭部の境界に3条の沈線を施す。素地は白灰色で微粒子。		
		18		4.1 13.15 5.4	VI-2	17・18は同一形状の製品である。明褐色釉を腰部下方まで施し、高台は露胎とする。肩部と頭部の境界に3条の沈線を施す。素地は白灰色で微粒子。		
		19	壺	口～底	8.1 21.05 8.0	II-A	肩部から頸部へはなめらかに立ち上がる。素地は暗赤褐色で細粒子、大粒の砂粒を多量に含み、器面がザラザラする。	室外 表土
		20	碗	口～底	13.0 5.6 6.1	—	徳化窯系。腰部が丸く張り、直口縁を呈する。外面に丸文と花卉文が交互に三つずつ配置。見込みに不明文。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇目釉剥ぎ。叠加は釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。	室内 床面
	簪	21	—	完形	— — —	II	竿の断面は先端から7.8cmの所まで六角形、そこからカブまでは円形。竿は先端に向かって若干細くなる。先端部は六角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。長さ13.5cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、重量7.1g。銅製。	室内 床面

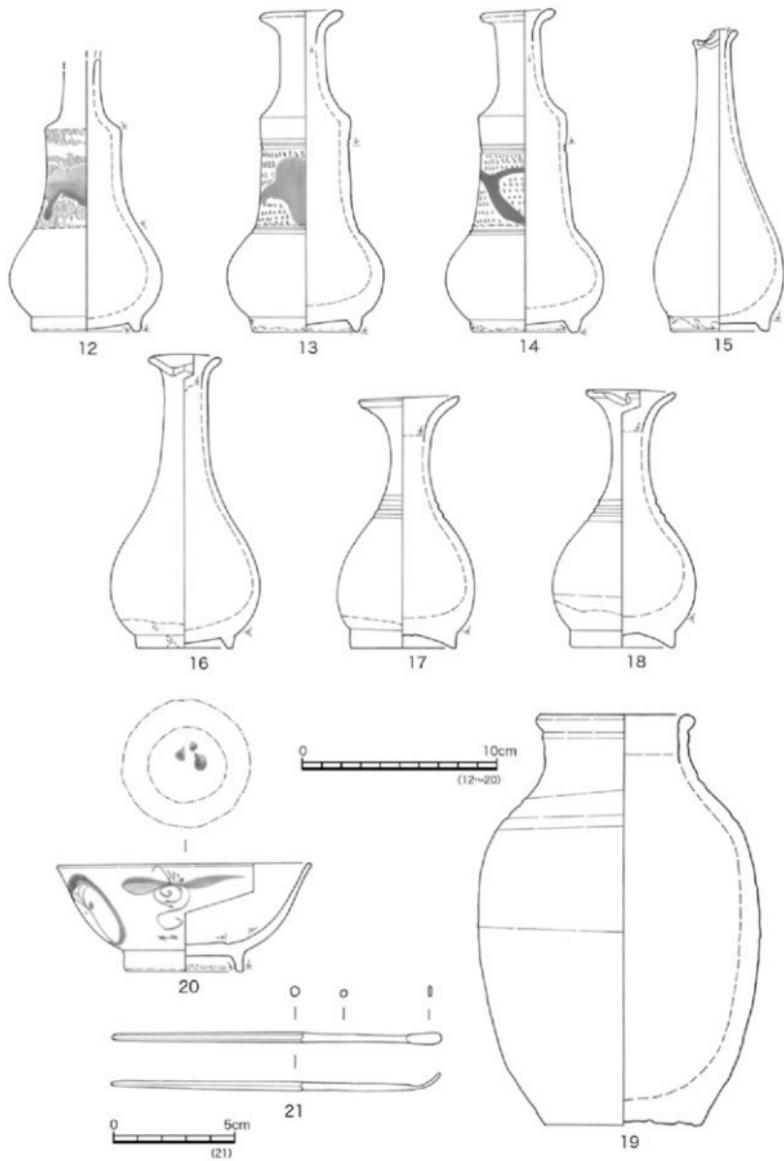


0 10cm

第73図 31号墓出土遺物① 沖縄産施釉陶器



图版109 31号墓出土遗物①



第74図 31号墓出土遺物② 沖縄産施釉陶器 (12~18)、沖縄産無釉陶器 (19)、染付 (20)、簪 (21)



图版110 31号墓出土遗物②

第27節 33号墓

1. 遺構

観察一覧（第80表）に示す。

2. 出土遺物

岩陰内外から15点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、簪・煙管、本土産近現代磁器である。沖縄産陶器が出土遺物の大半を占め、岩陰内が主体である。本土産近現代磁器が1点岩陰外から確認されている。



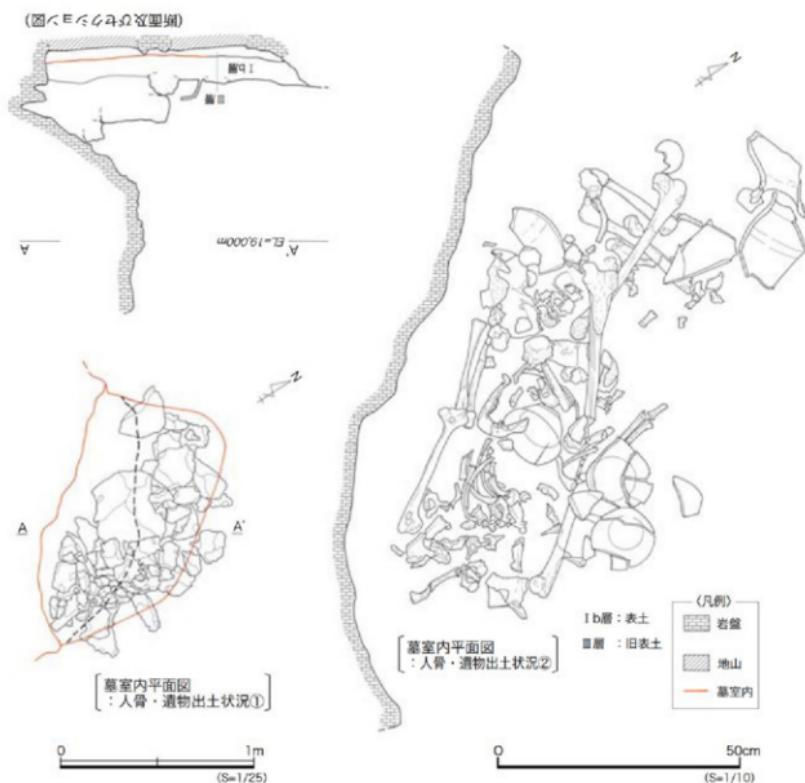
図版111 33号墓出土遺物集合

第80表 33号墓観察一覧

挿図番号	第75図
図版番号	図版112・113
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している緩やかな傾斜地。
分類	岩陰墓(III類A ii a)
規模	縦(北東ー南西軸)約0.9m×横(北西ー南東軸)約1.3m。 岩陰内縦約0.8m×横1.1m×高さ約0.35~0.6m。
構造	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤の一部をそのまま利用し、地面を少し掘り下げて整地。
天井	露出している石灰岩の岩盤をそのまま利用。
床	整地された旧表土(Ⅲ層)直上を利用していると思われる。
墓口	人骨・遺物の上から大小様々な礫石を被せていたと思われる。 墓口の方位:北東
人骨・遺物	岩陰内から成人(男性)1体が検出されており、釘が出土しないことから、風葬と思われる。
出土状況	遺物は沖縄産施釉陶器が人骨の胴体付近に、沖縄産無釉陶器は人骨の足下付近に集中して出土。
葬法分類	一次葬(Ⅰ類B)
砂敷(1 d層)	無し。
時期	近世~近・現代
備考	この墓のすぐ隣(西側)に7号墓が位置する。

第81表 33号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類		岩陰内 床面			岩陰外 表土			合計
	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	金属 製品	小計	本土産 近・現代 磁器	小計			
碗	I類 A 無文	3		3	1	1	1	4	
	分類なし			0		1	1	1	
杯	I類 B	1		1			0	1	
	II類 1 A 小	1		1		0	1		
壺	VII類 A		1	1		0	1		
	分類なし		2	2		0	2		
酒器	I類 3	1		1		0	1		
	瓶首か			1	1	0	1		
煙管	吸口			2	2	0	2		
簪	I類			1	1	0	1		
合計		6	3	4	13	1	1	2	15



図版112 33号墓①



墓全景 [北東より]

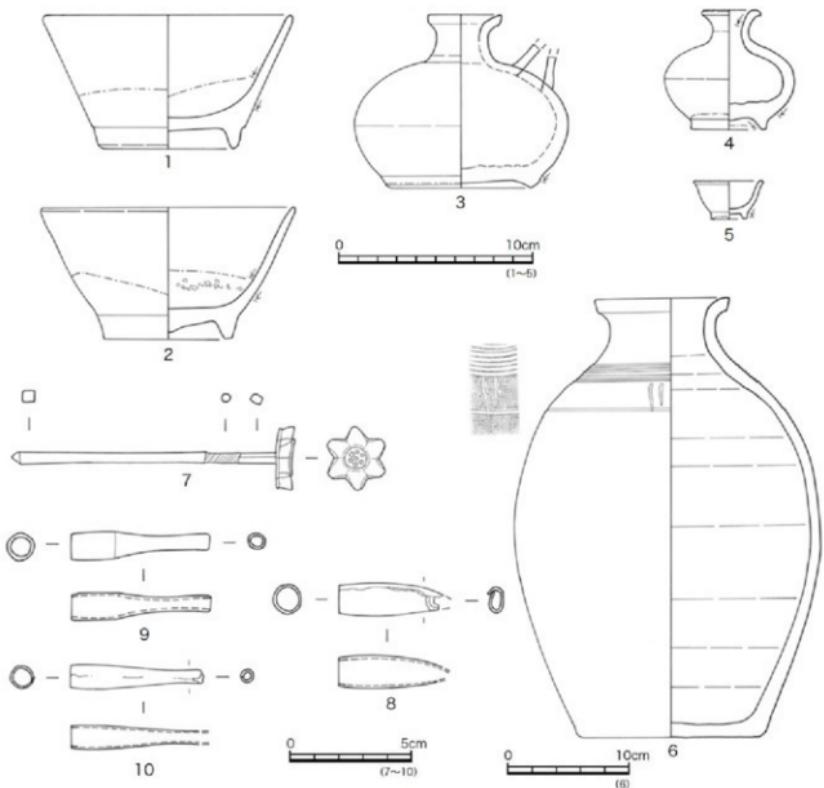


岩陰内：人骨・遺物出土状況
[北東より]



手前：33号墓・後方：7号墓 [東より]

図版113 33号墓②



第76図 33号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器(1~5)、沖縄産無釉陶器(6)、煙管(7)、筒(8~10)

第82表a 33号墓出土遺物観察一覧

捕団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/擴径	分類	観察所見		出土地
							単位:cm		
第76 図 ・ 国 版 114	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口~底	12.8 6.8 6.8	I-A	灰釉。素地は灰色で細粒子。		岩陰内 床面
		2			13.1 6.7 6.6	I-A	灰釉。素地は淡橙色で細粒子。見込みに砂が付着。		
		3	酒器	口~底	3.8 8.9 7.2	I-3	暗褐色の釉を高台外側面まで施す。疊付けにアルミナが付着。素地は白灰色で細粒子。		
		4	壺	口~底	3.0 6.1 3.8	II-1A	褐色の釉を腰部下方まで施す。外底面は同一の釉を雜に塗る。素地はにぶい橙色で細粒子。		
		5	杯	口~底	3.6 1.95 1.8	B	高台外側面まで灰釉を施し、疊付けから外底面まで露胎とする。細かい貫入が目立つ。素地は微粒子。		



図版114 33号墓出土遺物

第82表b 33号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高/底径/横径	分類	観察所見	出土地
第76 図 ・ 図版 114	沖繩産 無袖陶器	6	壺	口～底	11.9 38.8 16.6	VII-A	肩部と頸部の境界に7条の沈圓線、その下に「二」の判、その下に1条の沈圓線を施す。素地は明褐色で細粒子。	
	簪	7	-	完形	- - -	I	花と笄に彫がる花の基部を接合。花は花弁が6枚で径は2.05cm、厚さが0.6cmを計り、花全体は赤錆が目立つ。下部は首、ムディー、笄からなり、それぞれの箇の部分が明確である。首は径0.5cmの六角形。ムディーは径0.4cmの円形で浅くやや細かくなれにそれが見られる。笄は径0.5cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐である。花の基部から下は全体に青錆が目立つ。長さ11.6cm、重量21.1g。銅製。	岩陰内 床面
	煙管	8	雁首	破損	- - -	-	火皿の部分が欠損。羅宇接続部外径1.2cm、羅宇接続部内径0.9cm、長さ4.3cm、重量9.1g。胴部は接合痕が見られ、欠けた火皿の基部から羅宇接続部に向かって1.5cm接合痕が剥離している。銅製。	
		9		完形	- - -	-	吸口外径0.7cm、吸口内径0.4cm、羅宇接続部外径1.15cm、羅宇接続部内径0.8cm、長さ5.8cm、重量11.5g。羅宇接続部から1.8cmの所で段を有し、吸口は若干ラップ状をなしている。銅製。	
		10	吸口	破損	- - -	-	吸口部分が欠損。羅宇接続部外径0.9cm、羅宇接続部内径0.75cm、長さ5.5cm、重量4.9g。胴部は接合痕が見られ、欠損した吸口部分から僅かに接合痕が剥離している。銅製。	

第28節 34号墓・35号遺構

1. 遺構

観察一覧（第83表）に示す。

2. 出土遺物

34号墓からガラス瓶2点と本土産近現代磁器の碗1点が確認された。



図版115 34号墓出土遺物集合

第83表 34号墓・35号遺構観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版116
立地	34号墓・35号遺構とともに調査区北側の岩盤が広範囲に露出している傾斜地。
構造	分類 34号墓: モルタルが掛かる墓(II類C ii) 35号遺構: 性格不明遺構
	規模 34号墓・35号遺構ともに同じ大きさで、小規模。
	工法 34号墓: 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤の一部を少し削る。 35号遺構: 特に加工された痕は無いが、礫石が散乱している。
	天井 34号墓: 崩れしていく判別はつかないが、一部にモルタルが掛かっている。 35号遺構: 無し。
	床 34号墓: 自然の岩盤が露胎しており、不明。 35号遺構: 不明。
	墓口 34号墓: 磨石が散乱しているが、不明。 35号遺構: 不明。
人骨・遺物 出土状況	34号墓: 墓室内から人骨は出土せず、遺物はほとんど出土しないことから、使用されなくなった墓、もしくは持ち主により移転されている墓。 35号遺構: 出土遺物無し。
葬法分類	34号墓: 二次葬(II類D)
砂敷(I d層)	34号墓・35号遺構とともに無し。
時期	34号墓: 近・現代 35号遺構: 不明
備考	



奥から手前に
7号墓・34号墓・35号遺構
[西より]



34号墓：全景 [北西より]



35号遺構：全景 [北西より]

図版116 34号墓・35号遺構

第29節 36号墓

1. 遺構

観察一覧（第84表）に示す。

2. 出土遺物

岩陰内外で17点の遺物が確認された。種類はマンガン釉が掛けられた専用蔵骨器とその蓋それぞれ2点と、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、本土産近現代磁器、煙管、釘、ガラス瓶である。マンガン釉が掛けられた専用蔵骨器が確認された数少ない古墓の1つである。



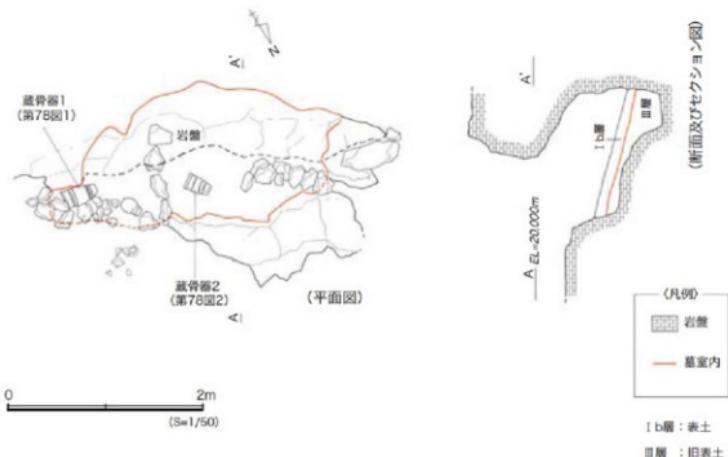
図版117 36号墓出土遺物集合

第84表 36号墓観察一覧

挿図番号	第77図
図版番号	図版118
立地	調査区北西側の岩盤が露出する緩やかな斜面地。
構造	分類 岩陰墓（III類A・b）
	規模 縦（北東—南西軸）約1.3m、横（北西—南東軸）約2.5m。
	工法 自然の岩陰を利用して岩陰墓で岩陰のやや外から内部にかけて落ち込んでおり、その落ち込み内に石列で区分けして墓室を形成する。
	天井 追り出した岩盤をそのまま利用。
	床 旧表土直上であるが、特に整地した形跡は見られず。
	墓口 閉じていたかは不明。墓口の方位：北東
人骨・遺物	岩陰内からは人骨の出土はごく少量。遺物は岩陰内外から専用蔵骨器（第78図1、2）が完品で廃棄されており、他には煙管、釘（角釘）が出土した。
出土状況	葬法分類 出土遺物から類推すると一次葬（I類A）、二次葬（II類A）を併用していた可能性が考えられる。
砂敷	なし。
時期	近・現代
備考	

第85表 36号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	岩陰内 床面				岩陰外 表土			合計
		沖縄産 無釉陶器	本土產 近・現代 磁器	金属 製品	ガラス 製品	小計	専用 蔵骨器	沖縄産 施釉陶器	
糸子甌						0	2	2	2
糸子甌の蓋						0	2	2	2
碗			2			2		0	2
壺		1				1		0	1
油壺						0	1	1	1
油壺の蓋						0	1	1	1
煙管	吸口			1		1		0	1
釘	破損 頭無し			2		2		0	2
用途不明				4		4		0	4
ガラス瓶					1	1		0	1
合計		1	2	7	1	11	4	2	17



第77図 36号墓



遠景 [北より]



遺物出土状況 [北より]



岩陰内：人骨・遺物出土状況 [北東より]



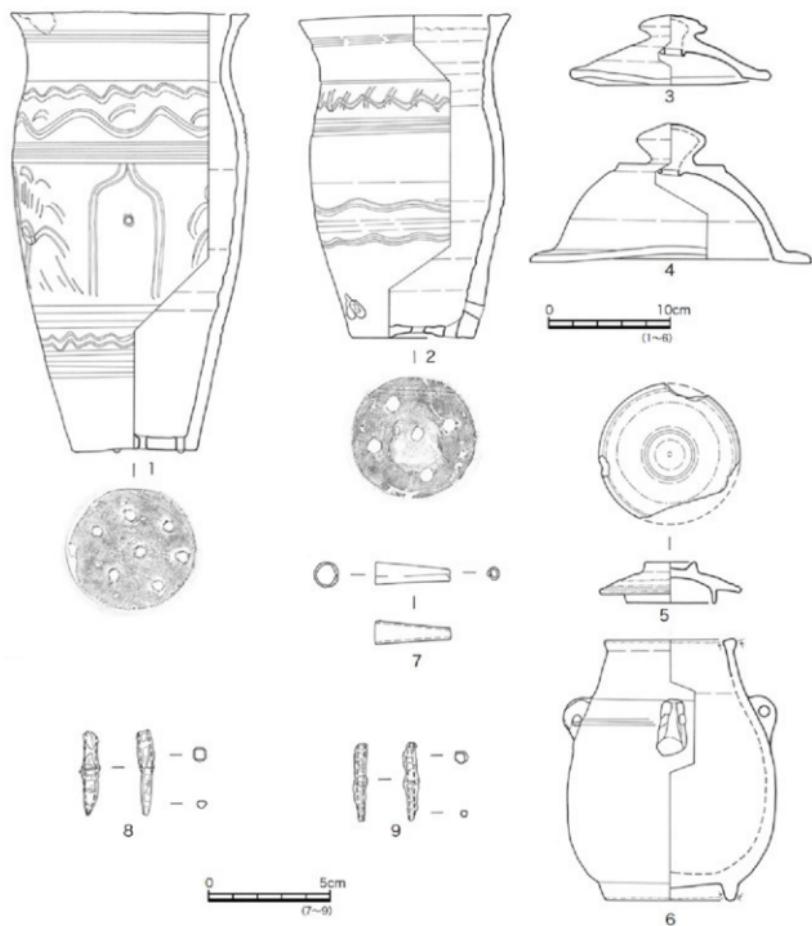
完掘状況 [北東より]

図版118 36号墓

第86表 36号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

捕図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/摘要	観察所見	出土地
第78 図 ・ 図版 119	専用 藏骨器	1	身	口～底	19.4 36.2 10.2	マンガン釉が掛けられた専用藏骨器である。すべて沈線で文様を描く。肩部文様帶と胴下部文様帶は波状文。胴部文様帶は蓮花文。屋門はアーチ形。玉飾りが付かない。全体的に文様がかなりくずれしている。底部に7ヵ所の有穴。	岩陰外 表土
		2			17.4 26.5 10.1	マンガン釉が掛けられた専用藏骨器である。すべて沈線で文様を描く。肩部文様帶と胴下部文様帶は波状文。胴部文様帶・屋門は文様が消滅している。底部に5ヵ所の有穴。	
		3	蓋	口～底	16.4 6.7 -	マンガン釉が掛けられた専用藏骨器の蓋である。器高が低く、全體的にかなり扁平な器形となっている。2に伴うものと思われる。	
		4			- 11.5 23.0	マンガン釉が掛けられた専用藏骨器の蓋である。3と比べて器高が高い。1に伴うものと思われる。	
	沖縄產 施釉陶器	5	油壺 蓋	口～底	11.6 3.4 7.2	油壺の蓋である。外面は黒色釉を施す。中央部は釉剥ぎし、白化粧を施す。内面は露胎とする。素地はにぶい橙色で鉢粒子。	岩陰内 床面
		6	油壺 身	口～底	10.8 21.4 10.4	外面は飴色釉を總釉し、豊付けと口唇部は釉剥ぎする。口唇部には白化粧を施す。高台は全體的に砂が付着する。素地は白灰色で微粒子。	
	煙管	7	吸口	完形	-	吸口外径0.5cm、吸口内径0.35cm、羅字接続部外径1.0cm、羅字接続部内径0.9cm。長さ3.1cm、重量3.4g。胴部は羅字接続部から吸口にかけてほぼ直線的に狭まる。吸口は接合痕が剥離している。銅製。	
	釘 (角釘)	8	-	破損 (頭なし)	-	長さ3.5cm、胴部径0.5cm、重量1.8g。頭部は欠損し、胴部から先端部は残存。先端から1.9cmの所まで横方向に走る木質が残存。	
		9	-		-	長さ3.2cm、胴部径0.5cm、重量1.7g。頭部は欠損し、胴部から先端部は残存。先端から1.8cmの所まで縱方向に走る木質が残存。	



第78図 36号墓出土遺物 専用蔵骨器（1～4）、沖縄産施釉陶器（5・6）、煙管（7）、針（8・9）



图版119 36号墓出土遗物

第30節 37号遺構

1. 遺構

観察一覧（第87表）に示す。

第87表 37号遺構観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版120
立地	調査区北西側の石灰岩の岩盤が露出している斜面地。
構造	分類 不明遺構(集石遺構)
	規模 縦(北-南軸)約2m、横(東-西軸)約2.5m。
	工法 露出した岩盤に沿って大小様々な砾石を積んでいる。
遺物出土状況	出土遺物無し。
時期	不明。
備考	



全景①【北より】



全景②【西より】

図版120 37号遺構

第31節 39号墓

1. 遺構

観察一覧（第88表）に示す。

2. 出土遺物

中国産染付の碗が1点確認されたのみで、徳化窯と思われる。腰部が丸く張り、口縁部が外反する。高台径が大きい。外面腹部に五つの草花文、腰部に簡略化された蓮弁文。見込みに不明文。外面高台脇、口縁部に一条ずつ圓線が入る。外面の草花文と蓮弁文の間に二条の圓線が入る。内面口縁部に一条、見込みに二条の圓線が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。豊付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。口径14.8cm、器高6.9cm、底径7.2cm。岩陰内床面より出土。

第88表 39号墓観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版122
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
分類	岩陰墓(Ⅲ類B)
規模	小規模。
工法	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤を一部削り、岩盤の隅に隠すように作られている。
天井	礫石を被せて隠す。
床	旧表土(Ⅲ層)直上を利用。
墓口	墓口という構造を有していない。
人骨・遺物	岩陰内から人骨・遺物がほとんど出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。
出土状況	人骨は頭蓋骨の小片が出土し、遺物は染付の碗が出土。
葬法分類	二次葬。(Ⅱ類D)
砂敷(I d層)	無し。
時期	近世～近代(?)
備考	岩盤継ぎの北西部に14・38号墓がある。



第79図 39号墓出土遺物 染付



図版121 39号墓出土遺物



全景〔西より〕



岩陰内：人骨出土状況〔南西より〕



岩陰内：遺物出土状況〔南より〕

図版122 39号墓

第32節 40号墓

1. 遺構

観察一覧（第89表）に示す。

2. 出土遺物

墓室外から本土産近現代磁器の小碗2点・杯1点が確認されたのみである。古墓群の中でも新しい様相を呈する。



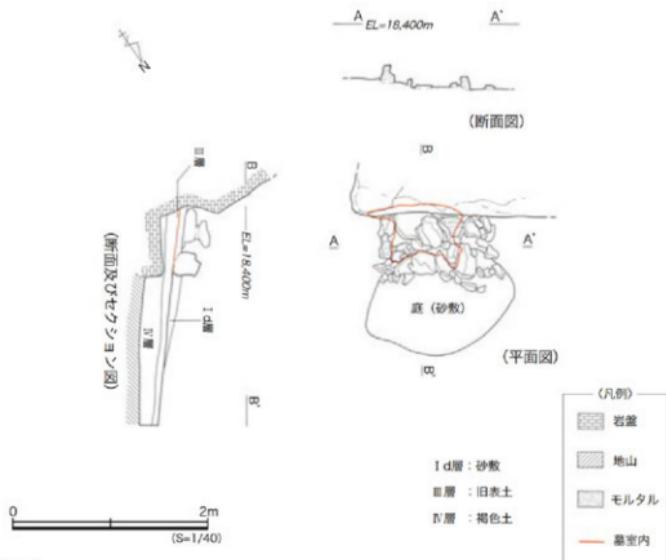
図版123 40号墓出土遺物集合

第89表 40号墓観察一覧

挿図番号	第80図
図版番号	図版124・125
立地	調査区東側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している緩やかな斜面地。
分類	モルタルが掛かる墓（II類C i）
規模	縦（北東—南西軸）約1.5m×横（北西—南東軸）約1.2m 墓室内：縦約0.5m×横約0.7m×高さ不明。
構造	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤の一帯をそのまま利用し、墓室内の窓を礫石を積んで補足する。
天井	何を乗せていたかは不明だが、上からモルタルは掛けていたと思われる。
床	旧表土（Ⅲ層）直上を利用。
墓口	残存状況から、石積みで閉じていたと思われる。墓口の方位：北東。
人骨・遺物出土状況	墓室内から人骨が出土しないことから、持ち主により移転されていると思われる。
葬法分類	二次葬（II類D）
砂敷（I d層）	墓室内から墓口前まで砂が敷かれており、墓口は砂敷で庭を形成。
時期	近・現代
備考	墓の破損状況が著しい。



図版124 40号墓① 遠景【北東より】



第80図 40号墓



図版125 40号墓

第33節 41号墓

1. 遺構

観察一覧（第90表）に示す。

2. 出土遺物

岩陰内外から16点の遺物が確認された。種類と数量は沖縄産無釉陶器の水甕1点・壺1点、本土産近現代磁器の小碗2点・杯2点、釘3点、ガラス瓶7点である。古墓群の中でも新しい様相を呈する。



図版126 41号墓出土遺物集合

第90表 41号墓観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版127
立地	北西-南東方向に継ぐ石灰岩崖の下部。
構造	分類 岩陰墓(Ⅲ類A ii b)
	規模 縦(北東-南西軸)約1m、横(北西-南東軸)約2.5m。
	工法 自然の岩陰をそのまま利用。
	天井 自然の岩陰をそのまま利用。
	床 特に整地した痕跡は見られない。
	墓口 閉じていたかは不明。墓口の方位:北東
人骨・遺物出土状況	人骨はほとんど出土しないため、移転済みか。岩陰内外からは沖縄産無釉陶器、本土産近現代磁器、ガラス瓶等の遺物が出土。
葬法分類	釘が出土したことから一次葬で使用された可能性がある(I類A)。
砂敷	なし。
時期	近・現代
備考	

第91表 41号墓遺物出土一覧

出土地	岩陰内 床面				岩陰外 表土		
	種類	沖縄産無釉陶器	本土産近・現代磁器	金属製品	ガラス製品	沖縄産無釉陶器	
器種分類		水甕	小碗	杯	釘	ガラス瓶	
					破損・腐無し	I類-A	
個数	1	2	2	3	7	1	



全景 [北東より]



岩陰内：遺物出土状況 [東より]



作業風景 [北西より]

図版127 41号墓

第34節 47号遺構

1. 遺構

観察一覧（第92表）に示す。

2. 出土遺物

遺構内から沖縄産無釉陶器の壺が1点確認されたのみである。



図版128 47号遺構出土遺物

第92表 47号遺構観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版129
立地	調査区北西側の緩やかな傾斜地に位置するフィッシャー内。
構造	分類 不明遺構(フィッシャー)
	規模 幅約0.8m、高さ約1mの岩盤の割れ目(フィッシャー)が南北方向に続く。
	工法 特に加工した痕跡は見られない。
人骨・遺物 出土状況	フィッシャー内から沖縄産の無釉陶器(壺)が出土。
時期	近・現代(?)
備考	



全景〔南西より〕



遺構内：遺物出土状況〔南東より〕

図版129 47号遺構

第35節 48号墓

1. 造構

観察一覧（第93表）に示す。

2. 出土遺物

フィッシャー内から沖縄産施釉陶器の碗が1点確認されているのみである。灰釉碗で分類はI-A。口径13.5cm、器高6.1cm、底径7.0cm。室内床面より出土。

第93表 48号墓観察一覧

挿図番号	—
図版番号	図版130
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出しているところの隙間。
構造	分類 フィッシャー墓(VI類)
	規模 岩盤の割れ目が長く伸びているため、判別できないが、人骨・遺物の出土範囲が狭いため、小規模と思われる。
	工法 地表に大きく露出している石灰岩の岩盤の割れ目をそのまま利用。
	天井 岩盤の割れ目が、奥に落ち込んでいるので、天井にあたるのは石灰岩の岩盤である。
	床 岩盤の狭い隙間に、深く入り込んでいるので未確認。
	墓口 閉じられていたかは不明。
人骨・遺物 出土状況	墓室内から頭蓋骨の小片と、沖縄産施釉陶器の碗が1点出土。 墓口の方位:北東
葬法分類	二次葬(II類D)
砂敷(I d層)	無し。
時期	近・現代(?)
備考	

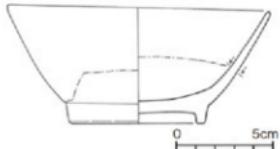


全景 [北東より]



墓室内：人骨出土状況 [北東より]

図版130 48号墓



第81図 48号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器



図版131 48号墓出土遺物

第36節 49号墓

1. 遺構

観察一覧（第94表）に示す。

2. 出土遺物

岩陰内外から9点の遺物が確認された。種類は沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、中国産白磁、煙管・釘がある。本土産近現代磁器やガラス瓶等を含まない。



図版132 49号墓出土遺物集合

第94表 49号墓観察一覧

押図番号	第82図
図版番号	図版133
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
分類	岩陰墓(III類B)
規模	縦(北-南軸)約1.4m×横(東-西軸)約1.8m×岩盤を削っている部分の高さ約1.4m。
構造	地表から大きく露出している石灰岩の岩盤の一部を削って死角を作り、地面を少し掘り下げて整地。岩盤の隅に人骨を隠す。
天井	礫石を上から被せる。
床	旧表土(Ⅲ層)と岩盤。岩盤は墓室の奥側を一部削っており、床面として利用。
墓口	墓口という構造を有していない。
人骨・遺物 出土状況	岩陰内から人骨は成人(男性)一体が足を屈折し、うつ伏せの状態で検出された。 岩陰内から少量ではあるが釘が2点のみ出土していることから推測すると、木棺を使用していた可能性がある。 遺物は沖縄産施釉陶器を中心に出土している。
葬法分類	一次葬(I類A)
砂敷(I d層)	無し。
時期	近世～近代
備考	人骨はほぼ原位置を保っているが、調査期間内に動かされてる。

第95表 49号墓遺物出土一覧

出土地	岩陰内 床面						岩陰外 表土
	沖縄産 施釉陶器		沖縄産 無釉陶器		白磁	金属製品	
種類	碗	酒器	壺	小杯	煙管	釘	瓶
	I類-A-無文	I類-2	I類-A		吸口	II類-B-a	I類-A-無文
個数	2	1	1	1	1	2	1

图六三 49号墓室平面图

平剖面：纵剖
平剖面：横剖



墓室小平面图
[人骨·盗掘出土物]



图六三 49号墓



墓全景 [北より]



岩陰内・人骨・遺物出土状況① [東より]



岩陰内・人骨・遺物出土状況② [北より]



岩陰内・人骨・遺物出土状況③ [北より]

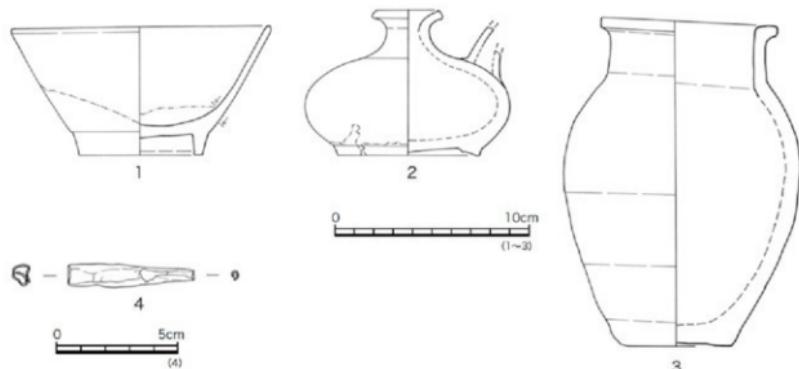


岩陰内：完掘状況 [東より]

第96表 49号墓出土遺物観察一覧

単位: cm

博団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径/縁径 器高 底径/擴径	分類	観察所見	出土地
第83図 ・ 図版 134	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.3 6.6 6.3	I-A	灰釉。疊付けにわずかに砂が付着。素地は灰白色で細粒子。	岩陰内 床面
		2	酒器	口～底	3.6 7.45 7.25	I-2	黒色釉を高台脇まで施し、高台は露胎とする。疊付けに砂が付着する。高台の成形が丁寧である。素地は灰白色で微粒子。	
	沖縄産 無釉陶器	3	壺	口～底	9.1 16.8 5.8	I-A	小型。肩部から屈曲して明確な腰を持って垂直に立ち上がる。素地は暗赤褐色で細粒子、微砂粒が僅かに含まれる。	
	煙管	4	吸口	破損	— 5.15 —	—	全長5.15cm、重量3.9g。吸口から羅字接続部までは残存するが、全体的につぶされ、原型を留めていない。接合部が剥離して巻き込むように内部に入り込んでいる。銅製。	



第83図 49号墓出土遺物 沖縄産施釉陶器 (1・2)、沖縄産無釉陶器 (3)、煙管 (4)



図版134 49号墓出土遺物

第37節 50号墓

1. 遺構

観察一覧（第97表）に示す。

2. 出土遺物

墓室内外から18点の遺物が確認された。種類は沖縄産無釉陶器、本土産近現代磁器、ガラス瓶、鉄片がある。本土産近現代磁器が主体となることから本古墓群の中でも新しい様相を呈する。



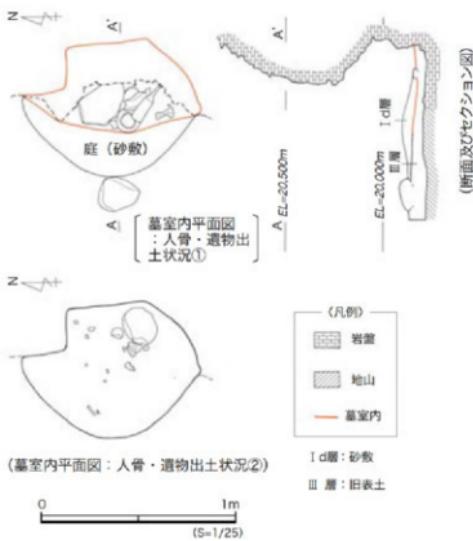
図版135 50号墓出土遺物集合

第97表 50号墓觀察一覧

挿図番号	第84図
図版番号	図版136
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出しているやや平坦地。
構造	掘込み墓(V類A ii)
	規模 小規模。縱(東-西軸)約0.45m×横(北-南軸)約0.7m×墓室内高さ約0.25~0.4m。
	工法 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤を掘り込み、地面を少し掘り下げて整地。 墓室内奥・右・左壁:掘込まれた岩盤。
	天井 掘り込まれている岩盤。
	床 旧表土(III層)直上を利用していると思われる。
	墓口 石灰岩の礫石で閉じている。 墓口の方位:西
人骨・遺物	墓室内から人骨はほとんど出土しないため、持ち主によって移転されていると思われる。
出土状況	墓室内から沖縄産無釉陶器(壺)の底部が出てることから、転用器として使用していた可能性がある。
葬法分類	二次葬(II類D)
砂敷(I d層)	墓室内から墓口前まで砂が敷かれており、墓口前に砂敷で庭を形成。
時期	近・現代
備考	墓室内・外ともに上面が平らな丸い石が置かれているが、墓室内の平石は床石で、墓室外の平石は供物・香炉を乗せる台石の可能性がある。 岩盤続きの南西部に8号墓がある。

第98表 50号墓遺物出土状況

器種・分類	出土地 種類	室内 床面				室外 表土				合計
		沖縄産 無釉陶器	本土産 近・現代 磁器	ガラス 製品	小計	沖縄産 無釉陶器	本土産 近・現代 磁器	金属 製品	小計	
碗			2		2		2		2	4
皿			1		1				0	1
杯					0		1		1	1
小杯			1		1				0	1
瓶					0		2		2	2
壺	IV類				0	1			1	1
					0	4			4	4
水甕		1			1	1			1	2
鉄片					0			1	1	1
ガラス瓶					1	1			0	1
合計		1	4	1	6	6	5	1	12	18



第84図 50号墓



人骨・遺物出土状況① [西より]

人骨・遺物出土状況② [西より]



手前: 50号墓・左奥: 7号墓 [南西より]



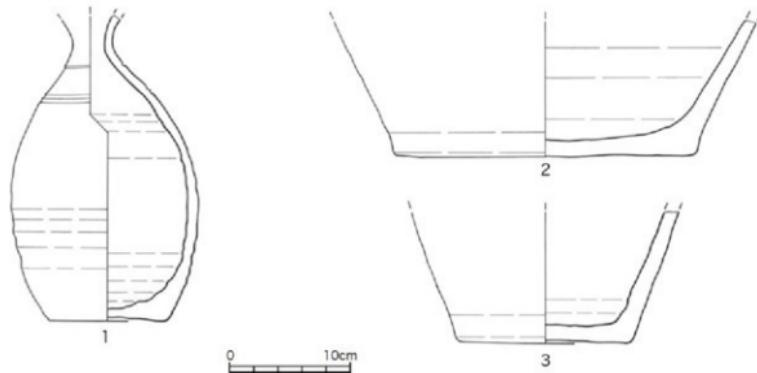
手前: 50号墓・右奥: 8号墓 [北西より]

図版136 50号墓

第99表 50号墓出土遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見	出土地
第85図 ・ 図版 137	沖縄産 無軸陶器	1	壺	頸～底	— — 9.5	IV	頭部下方に1条、胴部上方に2条の沈圈線を施す。 素地は暗赤褐色で微粒子。大粒の砂粒が器面に露出し、ザラザラする。	室外 表土
		2	水甕	底	— — 24.8	—	赤褐色で微粒子。	室内 床面
		3			— — 14.0	—	赤褐色で細粒子、大粒の砂粒を含む。	室外 表土



第85図 50号墓出土遺物 沖縄産無軸陶器



図版137 50号墓出土遺物

第38節 51号遺構

1. 遺構

観察一覧（第100表）に示す。

2. 出土遺物

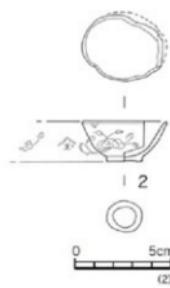
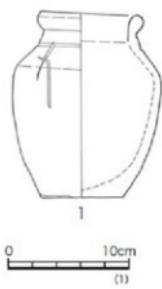
遺構内から3点の遺物が確認された。種類と量は沖縄産無釉陶器の壺1点、本土産近現代磁器の碗1点、玉製の耳杯1点である。玉製の耳杯は本古墓で1点確認されたのみで、類例も確認できず希少品である。

1は沖縄産無釉陶器の壺で、分類はII-B。肩部と頸部の境界に1条の沈周線を施す。肩部に判がある。素地は暗赤褐色で細粒子、微砂粒を含む。口径8.2cm、器高15.3cm、底径6.8cm。遺構内表土より出土。

2は玉製耳杯（酒杯）で、口縁部から底部の資料である。中国産で、別名青玉耳杯と呼ばれるもの。18世紀頃か。天藍凍（青みがかかった灰色）と呼ばれる種類の凍石（蠟石）で、所々に褐色の斑が見られる。この凍石を耳杯の形状に加工しているもの。両面には凍石を削った細かい痕が見られる。口縁部が弱く外反する。外面には「全」の文字と、牡丹文が彫り込まれている。口径長軸4.3cm、口径短軸3.6cm、器高2.05cm、底径1.8cm。遺構内表土より出土。

第100表 51号遺構観察一覧

挿図番号	—
図版番号	—
立地	調査区北側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している斜面地。
構造	分類 性格不明遺構（集石遺構）
	規模 不明。
	工法 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤に沿って、多くの隕石を小高く積んでいる。
遺物出土状況	遺物は散在して出土。注目できる出土遺物として、玉製耳杯がある。
時期	近・現代（？）
備考	岩盤続き（南東側）に49号墓がある。



図版138 51号遺構出土遺物集合

第86図 51号遺構出土遺物 沖縄産無釉陶器(1)、玉製耳杯(2)



図版139 51号遺構出土遺物

第39節 53号墓

墓室内外から5点の遺物が確認された。種類と量は沖縄産無釉陶器1点、本土産近現代磁器の皿1点、簪2点、玉1点である。本古墓群では玉の出土は少なく希少品である。

1は花形（1類）の簪で花のみ残存する。花弁は6枚で径は2.5cm、厚さ0.4cm、中心から花弁に向かって緩やかに湾曲する。中央には7個の花心が浅く象られる。重量7.0g。銅製。室内床面出土。

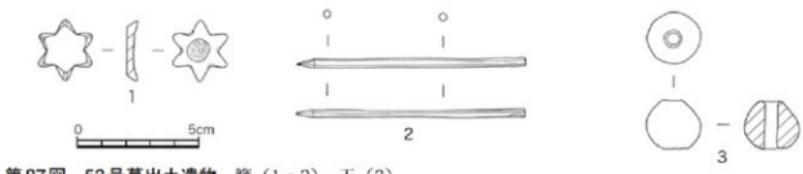
2も簪で竿のみ残存し、分類は不明。長さ9.4cm。竿の断面は六角形で厚さ0.35cm。約3cm銅の腐食により面が

つぶれている部分が見られる。先端は六角錐で鋭く尖る。重量5.1g。銅製。室外表土出土。

3は玉でガラス製と思われる。一部破損しており、表面に多数のひび割れと、小さい丸ミノで掘ったような削り痕が無数に見られる。表面に僅かだが、白・青・黄色の顔料が付着しているが、絵付けされていたかは不明。最大幅2.2cm、孔径0.5cm、重量10.1g。室外表土より出土。

第101表 53号墓観察一覧

挿図番号	第88図
図版番号	図版142
立地	調査区西側の斜面地。
構造	石積石室墓（1類B i d）
規模	縦（北東—南西軸）約2m×横（北西—南東軸）約2.2m。 墓室内：約0.8m四方×高さ不明
工法	緩やかな斜面を利用して、地面を少し掘り下げて整地。墓室内の開口を石積みで補足する。
天井	蓋石を乗せていたと思われるが、確認時には無かつた。
床	床石（砂岩）を敷いており、床石直上を利用。
墓口	何で閉じられていたか不明。墓口の方位：西
人骨・遺物	墓室内から人骨・遺物はほとんど出土しないことから、持ち主によって移転されていると思われる。
出土状況	
葬法分類	葬法不明（III類）
砂敷（1d層）	墓口前から広範囲に砂が敷かれており、庭を形成。
時期	近世（？）～近・現代（？）
備考	墓の破損状況が著しく、造成によって天井部等は破壊されている。



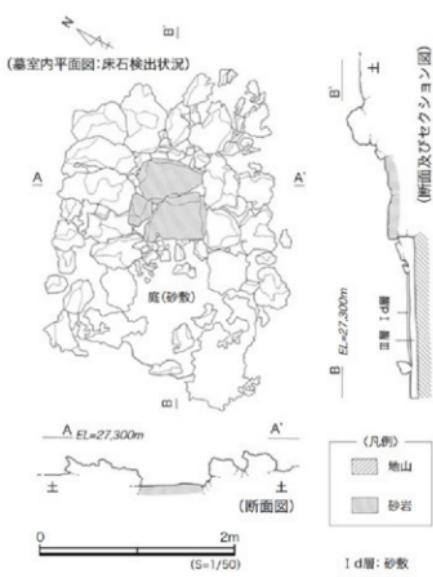
第87図 53号墓出土遺物 簪（1・2）、玉（3）



図版141 53号墓出土遺物



図版140 53号墓出土遺物集合



第88図 53号墓



図版142 53号墓

第40節 54号墓

発掘調査中は確認できなかったが、発掘調査終了後の工事中に発見され、遺物が当センターに郵送されてきたものである。詳細な古墓の形態や出土状況等は不明である。71点確認された。種類はマンガン釉が掛けられた専用蔵骨器、沖縄産無釉陶器の転用蔵骨器、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、染付・瑠璃釉等の中国産磁器、肥前系白磁、本土産近現代磁器、煙管・簪・釘等の金属製品。銭貨である。



図版143 54号墓出土遺物集合

第102表 54号墓出土遺物出土地状況

器種・分類	種類	蔵骨器		沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	染付	肥前系 白磁	琉球釉	本土產 近・現代 磁器	金属 製品	銭貨	合計
		専用	転用									
瓶子型の蓋		1										1
瓶	I類	A	無文		5							5
		B			1							1
		分類なし			1	2	2		1			6
小瓶												0
瓶												0
小杯							1		1			2
瓶	I類	3			1							1
	II類	2			1							1
	III類	3	B		1							1
	VI類	1			1							1
	四角				1							1
	分類なし						1					1
	I類	小			1							1
乗	II類	1	A	小	1							1
	分類なし				1							1
煙管	垂直								3			3
管	吸口								3			3
釘	I類				1				2			2
	圓頭								1			1
	完品								2			2
破損	圓有り								3			3
	圓無し								6			6
鉄片									18			18
近代板										1		1
岩種不明					2							2
合計		1	1	14	2	3	5	2	4	28	1	71

第103表a 54号墓出土遺物観察一覧

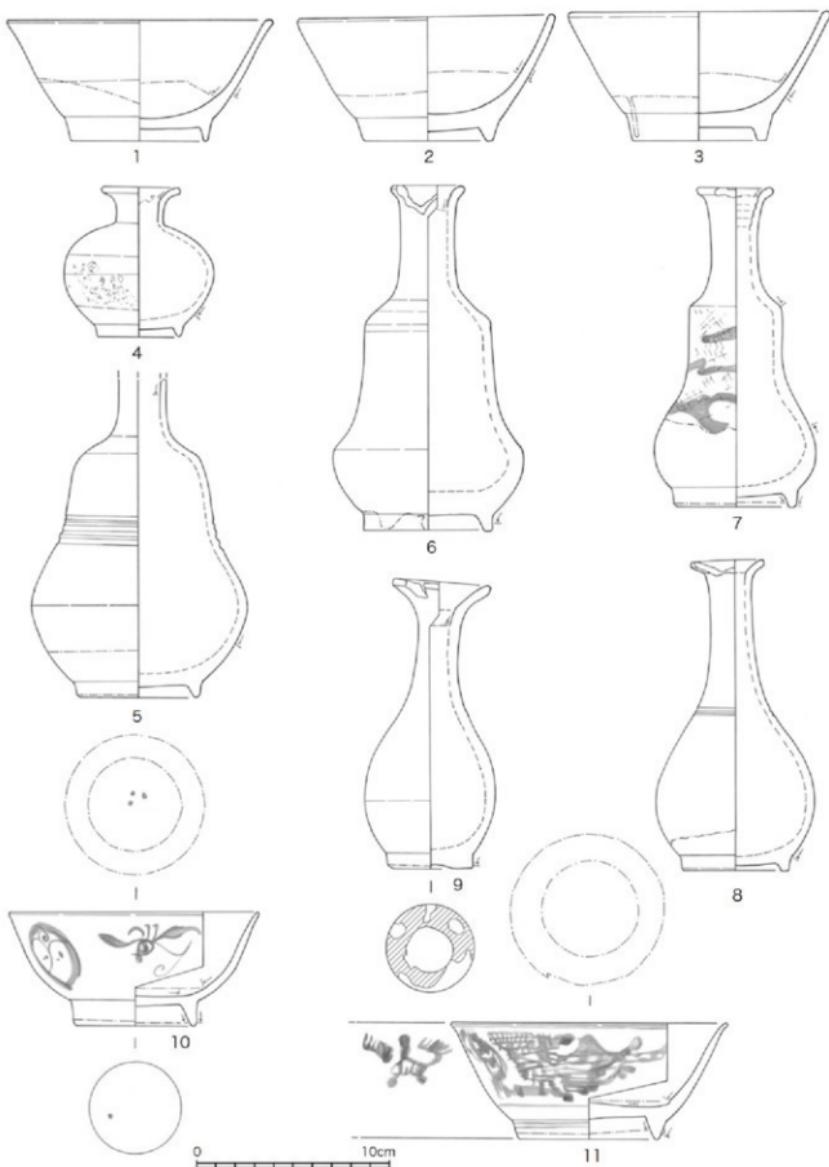
単位:cm

押印番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 器高 底径	分類	観察所見					
第89 図 ・ 図 版 144	沖縄産 施釉陶器	1	碗	口～底	13.6 6.2 7.0	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。					
					13.7 6.5 6.6	I-A	灰釉。素地は灰白色で細粒子。豊付けにアルマナが僅かに付着する。					
		3	壺	口～底	13.4 6.6 6.8	I-B	素地は橙色で細粒子、微砂粒が含まれる。					
		4			4.1 7.7 4.2	I	褐色釉を胴部下まで施し、腹部から高台は露胎とする。胴部中央の一部に沙が多数に付着する。素地は灰色で微粒子。					
		5		瓶	— 6.3	I-3	褐色釉を腰部中央まで施し、腰部下方から高台は露胎とする。胴部に4条の沈圓線を施す。素地にはにい乳白色で微粒子。					
		6			3.8 17.6 6.6	II-2	褐色釉を腰部まで施し、高台は露胎とする。素地にはにい乳白色で微粒子。					

第103表b 54号墓出土遺物觀察一覧

単位:cm

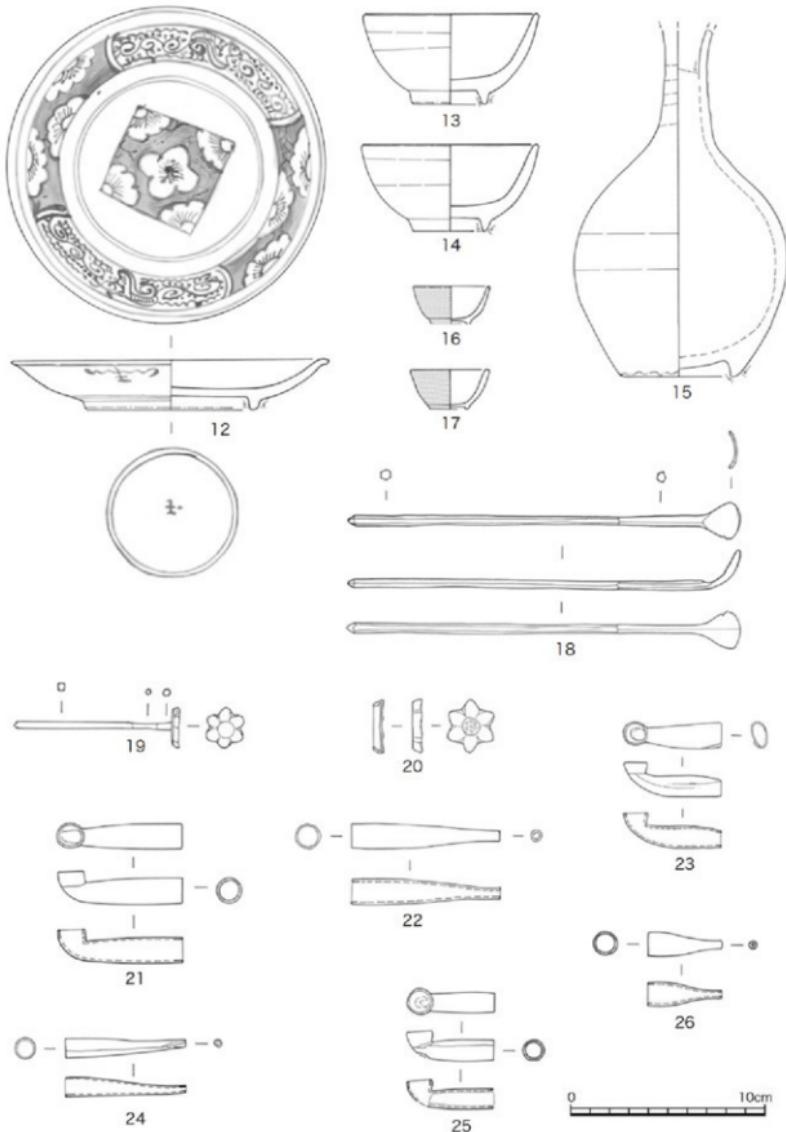
博団番号 図版番号	種類	番号	器種	部位	口径 高 底径	分類	観察所見
第89 図 版 144	沖縄產 施釉陶器	7	瓶	口～底	3.9 16.35 6.2	III-3B	口縁から肩部まで褐色釉を、腹部から高台外側面まで灰釉を施す。外底面は灰釉を鋪に塗る。胴部は施釉とするが、褐色釉を流し掛けする。胴部には格子状の文様を施す。素地は白灰色で微粒子。高台の内外側面に砂が多い量に付着する。
		8			3.8 15.9 5.5	VII	持状の銀り付け高台を持つ製品の再利用品である。持状の高台が取れており、露出面が磨かれている。褐色釉を施す。素地は淡橙色で微粒子。
		9			5.0 14.9 4.4	VI-1	褐色釉を腰部まで施し、高台は施釉とする。素地は淡橙色で微粒子。
	染付	10	碗	口～底	12.8 5.8 6.3	-	徳化窯系。腰部が丸く膨らむ。口縁部は弱く外反する。外面に九文と花卉文が交互に三つづつ配置。見込みに不明文。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇目釉剥ぎ。口唇部・盤付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。
		11			14.2 6.0 7.0	-	徳化窯系。高台から逆の字の間に、弱く外反する。外面に山水画と不明文。高台脇に二条、腰部と口縁部に二条ずつ團渦が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。見込みは蛇目釉剥ぎ。盤付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。
	染付	12	皿	口～底	16.3 2.6 8.8	-	徳化窯系(?)。腰部がやや丸みを帯びる。口縁部は外反する。外面に簡略化した蓮瓣文が三つずつ配されている。外底中央部に「五」。内面に半梅花と区画文(中に唐草文)が交互に配置。見込みには四角窓(中に唐草文)、外面口縁部に一束、腰部に二条、外底面に二条。口縁部に一条。見込みに二条團渦が入る。全体に青味を帯びた透明釉が掛かる。盤付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。
	肥前系 白磁	13	小碗	口～底	9.0 4.7 3.8	-	波佐見焼。1680~1740年代。腰部が丸みを帯び、口縁部が直口を呈する。高台が微弱にへたり状に開く。口唇部に輪郭が掛かる。全体に灰白色の釉が掛かる。盤付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。
		14			9.1 4.5 3.8	-	波佐見焼。1680~1740年代。腰部が丸みを帯び、口縁部が直口を呈する。高台が微弱にへたり状に開く。口唇部に輪郭が掛かる。全体に灰白色の釉が掛かる。盤付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。
		15	瓶	頸～底	- - 6.0	-	肥前産(?)。17世紀後半~18世紀前半。高台から頭部にかけて球状に膨らむ。口縁部は外反するとと思われる。底部は基底底。頭部に糖甌瓶が見られる。全体に灰白色の釉が掛かる。盤付けは釉剥ぎ。素地は灰白色微粒子。
第90 図 版 145	瑞鳴釉	16	小杯	口～底	3.9 1.95 2.0	-	型成形。口縁部は直口。外表面のみに瑞鳴釉が掛かる。内面は青味を帯びた透明釉。口唇部は口だけ。盤付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。
		17			4.0 2.05 1.9	-	型成形。口縁部は直口。外表面のみに瑞鳴釉が掛かる。内面は白黄色の釉が掛かる。口唇部は口だけ。盤付けは釉剥ぎ。素地は白色微粒子。
	簪	18	先端	III	- - -	竿の断面は六角形で先端から13.9cmの所で面が互い違いになる。竿幅は先端に向って若干太くなり、先端部は六角錐となる。カブは一部欠けており、そこから少しひびきが入る。長さ20.1cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重量25.7g、銅製	
		19			- - -	I	花は花弁6枚で径2.0cm、厚さは0.2cmを計る。下部は首、ムダマー、竿先となり、首は径0.4cmの六角形であるが、磨耗して一面が丸みを帯びる。ムダマーは径0.3cmの円形、竿は径0.4cmの四角形で先端に向かって若干太くなる。先端部は四角錐であるが、磨耗して丸みを帯びる。長さ8.5cm、重量9.7g、銅製。
		20			- - -	I	花のみ残存。重量3.2g。花柄は6枚で径は2.7cm、厚さ0.5cmを計る。中央には7個の花心が後く象られる。銅製。
	煙管	21	雁首	完形	- - -	-	火皿外径1.3cm、火皿内径1.1cm、羅宇接続部外径1.3cm、羅宇接続部内径1.0cm。長さ6.4cm、重量17.5g。火皿は継やかなラッパ状。銅製。
		22	吸口	完形	- - -	-	吸口外径0.6cm、吸口内径0.35cm。羅宇接続部外径1.25cm、羅宇接続部内径1.1cm、長さ37.6cm、重量12.5g。胴部は羅宇接続部から吸口にかけて緩やかに細くなり、吸口はほぼ直口。銅製。
		23	雁首	完形	- - -	-	火皿外径1.2cm、火皿内径1.05cm。羅宇接続部外径0.75~1.35cm、羅宇接続部内径0.65~1.2cm、長さ50.0cm、重量8.2g。胴部は上面だけ平坦に形成している。火皿は継やかに細やかなラッパ状。銅製。
		24	吸口	完形	- - -	-	吸口外径0.4cm、吸口内径0.3cm。羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.9cm。長さ6.2cm、重量4.3g。吸口付近は1cm程度が歪んでおり、使用痕の可能性。胴部には接合痕が明確に見られる。銅製。
		25	雁首	破損	- - -	-	火皿外径1.3cm、火皿内径1.15cm。羅宇接続部外径1.0cm、羅宇接続部内径0.85cm、長さ34.5cm、重量6.6g。火皿下が一部欠損。火皿は継やかなラッパ状。内部には羅宇と思われる骨が残存。胴部には接合痕が明確に見られる。銅製。
		26	吸口	完形	- - -	-	吸口外径0.4cm、吸口内径0.25cm。羅宇接続部外径1.2cm、羅宇接続部内径1.05cm、長さ38.3cm、重量5.6g。胴部は羅宇接続部から吸口にかけてやや急激に狭まり、吸口はほぼ直口。銅製。



第89図 54号墓出土遺物① 沖縄産施釉陶器 (1~9) 染付 (10・11)



图版144 54号墓出土遗物①



第90図 54号墓出土遺物② 染付(12)、瑠璃釉(16・17)、肥前系白磁(13～15)、煙管(21～26)、簪(18～20)



图版145 54号墓出土遗物②

第41節 16号墓

墓室外調査中に、本古墓が工事範囲外であることが判明し、調査を中断して保存することとした古墓である。墓室外から回収した遺物のみ報告する。10点確認された。種類は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器、本土産近現代磁器、ガラス瓶がある。



図版146 16号墓出土遺物集合

第104表 16号墓観察一覧

挿図番号	—
図版番号	—
立地	調査区北西側の石灰岩の岩盤が広範囲に露出している平坦地。
構造	分類 モルタルが掛かる墓(Ⅱ類B i)
	規模 調査区外のため調査していない。
	工法 地表から大きく露出している石灰岩の岩盤の一部を利用して、石積みで墓室を開い、その上から墓全体にモルタルを掛けている。
	天井 破損している隙間からの観察では石積みの天井にモルタルを掛けている。
	床 調査区外のため調査していない。
	墓口 破損している隙間からの観察では、石積みで閉じ、その上からモルタルを掛けている。 墓口の方位:南西。
人骨・遺物 出土状況	墓室外の遺物は取り上げたが、墓室内は開けていないので不明。
葬法分類	未調査のため不明(Ⅲ類)。
砂敷(I d層)	墓前には確認できなかつた(墓室内は未調査)。
時期	近・現代(?)
備考	調査当初から確認していた墓であるが、工事範囲外のため未調査。



図版147 16号墓 周辺伐開状況

第5章 人骨

第1節 はじめに

与那国島潮原古墓群から出土した近現代人骨について報告する。人骨は、平成16・17年度に実施された沖縄県立埋蔵文化財センターの発掘調査において出土したものである。与那国島は日本の最西端に位置しており、日本列島への人の流れを考える上では南の入り口として重要な島である。これまで、人骨調査はほとんど進んでいなかったが、平成14・15年度に行われた嘉田地区古墓群の調査において人骨が出土し、特に生活痕などに興味深い知見が得られている¹⁾。今回出土した人骨も形質や生活に関する多くの情報を含んでおり、貴重な追加例と考えられる。以下に人骨調査の概略を報告する。

第2節 資料

本遺跡から出土した人骨の一覧を第105表に示す。最小個体数の推定に基づく全体の出土人骨数は77体で、32基の墓から検出された。しかし、嘉田地区古墓群と同様に、すでに移転した後の墓や造成の際に壊された墓も含まれているので、検出された人骨の数は実際の被葬者数よりもかなり少ないものと思われる。人骨のほとんどは洗骨され改葬されたものであるが、5号墓では原位置を保った一次葬の人骨が検出されている。

第3節 調査の方法

被葬者数の推定：

散乱した状態で検出された人骨から、以下の手順によって被葬者数（最小個体数）を推定した。まず、人骨の部位を同定する。次にその部位が何体分あるかを推定するわけであるが、その際、重複を避けるために、同一部位のみ（例えば上腕骨の下端部、右側頭骨など）を数える。また、それぞれの部位ごとに性別・年齢の推定も試みる。最後に、情報を整理し、被葬者数の推定値とする。第106表のような場合、最も情報量の多い右大腿骨から成人8体（男性6、女性1、性別不明1）、小児1体と推定できる。しかしながら、頭骨と右脛骨の鑑定結果は成人中に女性2体が含まれることを示しているので、大腿骨で性別判定が出来なかつた成人は女性と考えることが可能で、この表から推定できる被葬者数は成人8体（男性6、女性2）、小児1体、計9体となる。但し、散乱人骨の場合は保存状態が一様ではなく、個体によってはほとんど失われてしまった部位がある可能性もあるため、得られた被葬者数は最小個体数、すなわち少なくとも9体分が確認できたということになる。

年齢区分・計測など：

人骨鑑定の際に用いた年齢区分はKnussman(1988)²⁾を参考に、乳児（出生～1歳）、幼児（1～約6歳）、小児（約6～約14歳）、若年（約14～約20歳）、成年（約20～約40歳）、熟年（約40～約60歳）、老年（約60歳以上）とした。

通常の計測はKnussman (1988)²⁾に、顔面平坦度はYamaguchi (1973)³⁾に従った。また、形質の特徴を知るための比較資料としては、嘉田地区古墓群¹⁾、西表島近現代⁴⁾、宮古島長墓⁵⁾、ヤッチのガマ近現代⁶⁾、沖縄貝塚時代⁷⁾、銘苅4号墓⁸⁾、津雲縄文^{9) 10) 11)}、渡来系弥生人とされる金隈¹²⁾、西南日本現代¹³⁾を用いた。現代人の身長は厚生労働省公表の統計データ¹⁴⁾を参照した。

第4節 出土人骨の所見

1号墓出土の入骨（成人11体、小児1体）：

比較的保存良好な人骨がまとめて出土している。1号墓からは2基の厨子が検出され、厨子1には成人男性1体が、厨子2には成人の男女各1体がそれぞれ納められていた。また、墓室内床面からは散乱人骨が多數検出されたが、骨の部位を鑑定した結果、少なくとも成人8体、小児1体、計9体分が含まれることが分かった。これらを合計すると、1号墓には成人11体、小児1体、計12体が葬られていたことになる。但し、散乱人骨には厨子からこぼれ落ちた人骨片が含まれている可能性も否定できない。

1) 扉子1 人骨（成人男性1体）：

保存状態不良の人骨片少量が出土した。骨片にはサイズの大きい肋骨片が含まれているため、少なくとも成人男性1体が納められていたと推定されるが、年齢などの詳細は不明である。

2) 扉子2 人骨（成人男性1体・成人女性1体）：

下顎骨、左腓骨、左踵骨がそれぞれ2体分確認されたので、少なくとも成人2体が含まれる。また、比較的の保存の良い男性の四肢骨が含まれているので、その中の1体は男性である。さらに、サイズが小さく女性のものと推定される左橈骨があることから、成人女性も含まれている。よって、扉子2に納められているのは成人男女各1体と考えられる。

3) 墓室内人骨（成人男性6体・成人女性2体・小児1体）：

墓室内からは比較的の保存良好な人骨が散乱した状態で多数検出されている。これらの入骨を鑑定し整理した結果、成人男性6体（成年、熟年、熟年－老年各1体を含む）、成人女性2体（熟年、熟年－老年各1体）、小児1体、計9体分が確認された。年齢は上顎骨と下顎骨の歯の咬耗度、歯槽骨の状態等から推定した。

頭蓋骨の保存状態は比較的良好である。四肢骨も保存良好なもののが多かったが、かなりの骨に骨膜炎や変形性関節症の痕跡など、生活の厳しさを示す所見が認められた。

2号墓出土の人骨（詳細不明）：

詳細は不明である。

4号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

成人の足指骨が少量検出されているが、詳細は不明である。

5号墓出土の人骨（熟年男性1体・成人女性1体）：

保存良好な男性人骨1体分が出土している。男性人骨はほぼ解剖学的位置関係を保って出土しており、一次葬と考えられる。年齢は歯の咬耗度（Broca 2度）から熟年と推定した。本人骨は両側下腿骨（脛骨・腓骨）に骨膜炎の痕跡が認められ、また、右足根骨（内側楔状骨）と第一中足骨が癒着するなど、慢性の感染症に罹患していたと思われる。日常的な生活環境はかなり厳しいものだったのだろう。

このほか、5号墓からは成人女性と思われる人骨片少量（頭蓋骨片、左膝蓋骨、右踵骨片）が検出された。男性が葬られる前に同じ場所に葬られていたと思われるが、洗骨・改葬の際に取り残されたのだろうか。詳細は不明である。

7号墓出土の人骨（成年女性1体）：

骨の保存状態は悪く、残存する骨は右寛骨片、左脛骨、左右腓骨、足根骨、肋骨片、椎骨片など一体分である。全体的に華奢でサイズも小さいことから性別は女性と推定される。また、脛骨に骨端線が認められることから年齢は20歳代前半と思われる。

8号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

少量の成人骨片が墓室内および庭から出土しているが、詳細は不明である。

9号墓出土の人骨（乳児1体）：

生後間もない乳児骨片が少量検出された。残存する骨は右側頭骨、右大腿骨、左脛骨、左右腓骨など一体分である。成人骨は検出されていない。

10号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

墓室内床面から少量の成人骨片が出土している。また、墓室外からも椎骨や肋骨などの成人骨片が検出されているが、詳細は不明である。

11号墓出土の人骨（詳細不明）：

墓周辺から成人のものと思われる下顎大臼歯が出土しているが、詳細は不明である。

14号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

墓室内から成人の頭骨片、肋骨片、歯などが出土している。歯の咬耗度はBrocaの1－2度であることから、成年から熟年（30代－40代）くらいの成人骨1体が含まれていると思われるが、詳細は不明である。墓室外からも左上腕骨片など、少量の骨片が出土している。

15号墓出土の人骨（性別不明成人1体・乳児1体）：

墓室内から成人の手根骨と歯が、また、乳児のものと思われる椎骨片、左脛骨、指骨片などが出土している。

22号墓出土の入骨（性別不明成人1体）：

墓室内から成人の頭骨片、椎骨片などが出土しているが、詳細は不明である。

23号墓出土の入骨（熟年男性1体、性別不明成人1体）：

男性人骨1体分が検出された。男性人骨の保存状態は比較的良好である。年齢は歯槽骨および残存歯の状況から熟年と推定した。このほか、23号墓からは左腓骨が1本余分に検出されており、男性人骨以外にも成人骨が葬られていた可能性があるが、詳細は不明である。

24号墓出土の入骨（成人男性7体、成人女性3体、性別不明成人1体、性別不明若年1体）：

24号墓には5基の厨子が納められており、4基の厨子から人骨が出土したほか、墓室内床面から散乱した人骨が検出されている。出土人骨の内訳は以下の通りである。

すなわち、厨子1には性別不明の成人と思われる人骨片、厨子2には成人男性と性別不明成人各1体、厨子3には成人男女が各1体、厨子5には成人男性2体、成人女性1体、墓室内床面からは成人男性3体、成人女性1体が検出された。これらを合計すると、24号墓には成人11体、若年1体、計12体が葬られていたことになる。但し、1号墓と同様に、散乱人骨には厨子からこぼれた人骨片が含まれている可能性がある。尚、本墓のみ、焼骨が検出された。焼骨が検出されたのは厨子1、厨子5、床面である。

1) 厨子1 入骨（性別不明成人1体）：

保存状態不良の人骨片少量が出土した。骨片には焼骨が含まれているが、詳細は不明である。

2) 厨子2 入骨（成人男性1体）：

比較的保存良好な男性人骨1体分が納められていた。頭蓋骨の保存が不良のため詳細な年齢は不明であるが、四肢骨等のサイズから成人には達していると思われる。

3) 厨子3 入骨（老年男性1体・成人女性1体）：

成人男女各1体の全身骨が納められていた。男性の下顎骨はほとんどの歯が生前に脱落し、歯槽骨の吸収も頗著なことから年齢は老年に達していたと思われる。女性の下顎骨は破損が見られるものの、歯槽骨の吸収などは見られないことから、成年あるいは熟年と推定される。

4) 厨子5 入骨（成人男性2体・成人女性1体）：

成人男女各1体の全身骨が納められていた。男性の下顎骨はほとんどの歯が生前に脱落し、歯槽骨の吸収も頗著なことから年齢は老年に達していたと思われる。女性の下顎骨は破損が見られるものの、歯槽骨の吸収などは見られないことから、成年あるいは熟年と推定される。

5) 墓室内人骨（成人男性6体・成人女性2体・小兒1体）：

比較的保存良好な人骨が墓室内から散乱した状態で多数検出されている。これらの人骨を鑑定し整理した結果、成人男性6体（成年、熟年、熟年—老年各1体を含む）、成人女性2体（熟年、熟年—老年各1体）、小兒1体、計9体分が確認された。年齢は上顎骨と下顎骨の歯の咬耗度、歯槽骨の状態等から推定した。

頭蓋骨の保存状態は比較的良好である。四肢骨も保存良好なものが多かったが、かなりの骨に骨膜炎や変形性関節症の痕跡など、生活の厳しさを示す所見が認められた。

25号墓出土の入骨（熟年女性1体）：

女性と推定される人骨片1体分が確認された。保存状態は全体的に悪く、特に下肢骨のほとんどが失われていた。残存歯および頸骨の状態から年齢は熟年に達していたと思われる。

26号墓出土の入骨（老年男性1体・熟年男性1体・熟年女性1体・幼児1体）：

ほぼ3体分の成人全身骨と幼児骨1体分が出土している。成人骨の構成は最も情報量の多かった大腿骨の特徴から男性2体、女性1体と推定した。年齢は女性頭蓋の上顎歯槽部の状態から、女性は熟年に達していたと考えられる。また、すべての歯が脱落し、歯槽骨の吸収も頗著な下顎骨と熟年と推定される下顎骨2体分があることから、男性のうち、1体は老年、他の1体も熟年に達していたと思われる。

27号墓出土の入骨（成人男性3体・成人女性2体・性別不明成人1体）：

厨子内から成人女性1体、墓室内床面から散乱した状態で成人男性3体、性別不明成人1体が検出されている。

1) 厨子内出土の入骨（成人女性1体）：

成人女性の全身骨片が認められていた。骨端線などは見られないが、頭蓋骨片の縫合部が開離しているの

で、比較的若い年齢と思われる。

2) 墓室内床面出土の人骨（成人男性3体・成人女性1体・性別不明成人1体）：

成人の右側頭骨が5体分確認できるので、少なくとも5体の成人骨が含まれていると思われる。側頭骨のうち2体は性別の判定が出来なかったが、3体は男性である。一方、大腿骨が左右とも4体分あったが、そのうち1体は女性、3体は男性と推定されるので、成人5体の内訳は男性3体、女性1体、性別不明成人1体と考えられる。

29号墓出土の人骨（成人男性2体・成人女性2体・性別不明若年1体・幼児2体）：

左側頭骨が成人4体分、若年1体分、幼児2体分、計7体分検出された。成人のうち1体は女性のものと推定されたが、残り3体分は性判定が困難だった。一方、四肢骨のうち最も情報量の多かった右大腿骨は成人男性2体分、成人女性2体分、性別不明若年1体分、幼児1体分と推定されたことから、全体としては成人男性2体、成人女性2体、性別不明若年1体分、幼児2体分、計7体分が含まれていると考えられる。女性と推定される脛骨には骨膜炎の痕跡も認められた。

30号墓出土の人骨（成人男性1体）：

成人男性の頭骨片、右鎖骨片、桡骨片、大腿骨片が検出された。年齢等の詳細は不明である。

31号墓出土の人骨（成人男性5体・成人女性2体）：

墓室内床面から成人の全身骨7体分が散乱した状態で検出された。最も情報量の多かったものは右大腿骨で、男性5体分、女性2体分、計7体分が確認された。また、男性と推定される大腿骨と脛骨に骨膜炎の痕跡が認められた。

33号墓出土の人骨（老年男性1体）：

岩陰を利用した墓から、保存良好な成人男性骨1体分が検出された。寛骨の特徴から性別は明らかに男性、ほとんどの歯が生前に脱落し、歯槽骨にも顕著な吸収が認められることから年齢はほぼ老年に達していたと考えられる。

34・35号墓出土の人骨（詳細不明）：

周辺から骨片が少量検出されているが、詳細は不明である。

36号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

岩陰から少量の指骨片、歯片等が検出されているが、詳細は不明である。

38号墓出土の人骨（成人男性1体・小児1体）：

墓室内から成人男性1体分が検出されたが、頭蓋骨の保存が悪く、詳細な年齢の推定は出来なかった。また、小児骨1体分も確認された。

39号墓出土の人骨（性別不明成人1体・若年1体）：

墓周辺から頭骨片、四肢骨片などが出土している。頭骨片には成人の他に若年と推定される側頭骨片も含まれている。詳細は不明である。

41号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

墓周辺から成人の指骨片が検出されているが、詳細は不明である。

48号墓出土の人骨（幼児1体）：

岩陰から幼児の全身骨片1体分が検出されている。

49号墓出土の人骨（成年男性1体）：

岩陰から成年男性の人骨1体分が出土した。保存状態は比較的良好である。頭蓋骨の特徴および四肢骨が頑丈であることから、性別は男性、歯の咬耗度（Broca 1～2度）から年齢は成年と推定した。

50号墓出土の人骨（乳児1体）：

墓室内から乳児と推定される左脛骨、椎骨片などが出土した。

53号墓出土の人骨（性別不明成人1体）：

墓室内から成人の指骨、歯などの骨片が出土した。詳細は不明である。

54号墓出土の人骨（成人男性2体・成人女性3体）：

成人骨片5体分が検出された。左大腿骨が男性2体分、女性3体分あることから、成人の内訳は男性2体、女性3体と推定される。また下顎骨片から少なくとも老年2体、熟年1体が含まれていると考えられたが、

性判定が困難だったため、いずれも成人という記載にとどめた。女性の左尺骨肘関節部に変形性関節症、左桡骨遠位端部に骨折が疑われる病変が認められた。また、男女ともに骨膜炎の痕跡のある下腿骨が認められた。

第 105 表 潮原古墓群出土人骨の構成（最小個体数の推定値）

墓番号	成 人				未 成 人					計	備 考
	男性	女性	性別不明	成人計	若年	小兒	幼児	乳児	未成人計		
1- 床面	6	2		8		1			1	9	
1- 犁子1	1			1						1	
1- 犁子2	1	1		2						2	
2											詳細不明
4				1	1					1	
5	1	1		2						2	男性の全身骨と少量の女性人骨
7		1		1						1	
8			1	1						1	骨片、詳細不明
9								1	1	1	
10		1	1							1	骨片少量
11											箇1本のみ、詳細不明
14		1	1							1	骨片、箇
15		1	1					1	1	2	
22		1	1							1	
23	1		1	2						2	男性1体の全身骨と少量の成人骨片
24- 犁子1			1	1						1	骨片、焼骨含む
24- 犁子2	1			1						1	
24- 犁子3	1	1		2						2	
24- 犁子5	2	1		3						3	焼骨含む
24- 床面	3	1		4						4	焼骨含む（変形あり）
25		1		1						1	
26	2	1		3				1	1	4	
27- 犁子	1			1						1	
27- 床面	3	1	1	5						5	
29	2	2		4	1		2		3	7	
30	1			1						1	
31	5	2		7						7	
33	1			1						1	
34,35											詳細不明
36		1	1							1	骨片、詳細不明
38	1		1		1				1	2	
39			1	1	1				1	2	骨片
41											詳細不明
48						1		1	1	1	
49	1			1						1	
50								1	1	1	
53			1	1						1	
54	2	3		5						5	
計	35	19	12	66	2	2	4	3	11	77	

第 106 表 潮原古墓群 1 号墓墓室内散乱人骨

頭骨	側	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨
$\sigma^a : 3$ $\varphi : 2$ $? : 1$ $小 : 1$	右	$\sigma^a : 2$ $? : 3$ $小 : 1$	$\sigma^a : 3$ $小 : 1$	$\sigma^a : 3$ $? : 1$ $小 : 1$	$\sigma^a : 6$ $\varphi : 1$ $? : 1$ $小 : 1$	$\sigma^a : 2$ $\varphi : 2$ $? : 2$ $小 : 1$
$\sigma^a : 3$ $\varphi : 2$ $? : 1$ $小 : 1$	左	$\sigma^a : 3$ $\varphi : 1$	$\sigma^a : 4$ $小 : 1$	$\sigma^a : 2$ $\varphi : 1$ $? : 1$ $小 : 1$	$\sigma^a : 4$ $\varphi : 1$ $? : 2$ $小 : 1$	$\sigma^a : 1$ $? : 3$ $小 : 1$

σ^a : 成人男性 φ : 成人女性 ? : 性別不明成人 小 : 小兒

第5節 人骨の形質

頭蓋骨：(図版148-150)

頭蓋骨の主要計測値を第107表に示す。全体的に骨の保存状態が悪く計測や観察ができた例数は少ないが、報告例の少ない与那国島の貴重な追加資料である。形質の特徴は男女ともに同様の傾向を示しているので、比較は男性についてのみ行っている。頭形を示す長幅示数は長頭型に属しており、短頭-中頭型が多い沖縄集団の中では特徴的である(第91図)。顎面は高径が小さく幅径が大きい傾向を示している。眼窩は高径も幅径も小さく、全体のサイズが小さい傾向がある。示数は中眼窓型である。

顎面平坦度示数は全体に小さく、平坦な顎立ちだったことを示している。これは近現代の沖縄集団に共通の特徴であり、瀬原も他の沖縄集団と似た特徴をもっていると言える。ただ、女性については、同じ与那国島の嘉田地区人骨と同様に、前頭部がやや立体制的な傾向を示した。

潮原頭蓋は長頭で低額、平坦な顎立ちという特徴を示しているが、全体としては沖縄の近現代人のグループに属すると考えて大過ないと思われる。

四肢骨：

1) 四肢骨計測値

上肢骨計測値を第108、109、110表に示す。四肢骨についても頭蓋骨同様に、男性について他集団との比較を行った(第113表)。瀬原集団上腕骨の幅径・周径は沖縄貝塚、津雲、金隈など先史時代人よりも全般的に華奢である。このような傾向は中世以降の他の沖縄集団にも認められた。

下肢骨の計測値を第111、112表に示す。下肢骨は全体的に頑丈で筋附着部も明瞭である。大腿骨、脛骨とともに骨体部の計測値はヤッヂのガマ近現代人および沖縄先史時代人と同様の傾向を示した。沖縄集団の中では嘉田地区、中世の銘苅4号墓の大腿骨が他集団より頑丈である。津雲縄文人のように、狩猟採集を生業にした集団に見られる大腿骨の柱状傾向(大腿骨背面の粗線が発達して柱を張り付けたようになる)や脛骨の扁平性は認められなかった。

第92図は四肢骨の主要な示数を他の集団と比較したものである。柱状傾向を示す大腿骨中央断面示数は瀬原と沖縄貝塚時代がともに小さい。脛骨の扁平性を示す栄養孔位断面示数は、津雲縄文人以外は大体同じ傾向を示している。また、相対的な上股の発達程度を示す示数(上腕骨最小周/大腿骨中央周)は、貝塚時代人や縄文人では大きく上股が発達していたことを示しているが、他の集団は下肢が発達していた弥生人に近い値を示している。全体としては瀬原集団の生活はヤッヂのガマなどと同様の生活形態だったと思われる。

2) 身長の推定

身長は大腿骨、脛骨、上腕骨、桡骨などの四肢骨最大長からピアソンの式を用いて推定した。その際、明らかに同一個体と分かるものについては一方のみを用いたが、他については最大長が得られた資料すべてを用いて推定した。したがって、同一個体を重複して推定している可能性もあるが、平均値は実際の値からそれほど大きく外れることはないと思われる。

得られた平均身長は男性157.5cm、女性144.6cmとなり、いずれも低身長である(第114表)。しかしながら、沖縄の集団の中では中世の銘苅4号墓に次いで大きな値になっている(第93図)。同じ与那国島の嘉田地区は最も低い値を示していることを考えると、与那国島では身長の変異が大きかったかも知れない。特記事項：(図版151)

瀬原の四肢骨には感染症や骨折の痕跡など、生活環境の厳しさを示す病変(ストレスマーク)が多く認められた。観察できた骨のうち骨膜炎の痕跡が認められたものを集計したところ、第115表の結果が得られた。尚、下腿については、腓骨の保存状態が悪かったため脛骨のみを調査した。

骨膜炎の痕跡が最も多く観察されたのは脛骨である。ストレスマークは下肢、特に下腿に現れやすいことが知られており、瀬原集団の生活環境もかなり厳しいものであったことが推察される。

第107表 頭蓋主要計測値

		男 性			女 性		
		N	Mean	S. D.	N	Mean	S. D.
1	頭蓋最大長	6	187.7	8.96	5	180.6	6.99
5	頭蓋基底長	3	102.7	2.08	2	101.0	2.83
8	頭蓋最大幅	5	139.6	5.90	5	133.4	3.85
9	最小前頭幅	5	98.0	5.24	4	90.3	5.68
17	バジ ウル・アーレグマ高	3	141.3	4.16	3	135.7	2.89
23	頭 周	5	534.4	11.61	3	503.0	17.06
24	横弧長	5	330.2	5.97	3	306.3	14.05
25	矢状弧長	3	403.3	12.66	3	377.7	19.22
26	前頭弧長	5	137.2	5.89	4	126.5	5.80
27	頭頂弧長	5	145.2	5.76	4	126.3	5.74
28	後頭弧長	3	125.7	19.35	3	124.0	13.86
29	前頭弦長	5	116.6	3.65	4	110.8	4.99
30	頭頂弦長	4	129.0	2.58	4	115.3	3.95
31	後頭弦長	3	98.3	4.51	3	103.3	9.29
40	顎 長	3	100.3	1.15	2	100.0	8.49
45	頬骨弓幅	3	136.0	3.46	1	126	
46	中顎幅	3	98.7	8.02	3	96.0	3.46
48	上顎高 (alv)	3	67.0	3.00	4	64.8	3.77
511	眼窩幅(1)	5	40.2	1.48	4	39.5	1.73
521	眼窩高(1)	5	32.4	2.07	4	33.5	1.29
54	鼻 幅	3	24.7	1.15	4	24.5	1.73
55	鼻 高	3	50.3	0.58	4	49.3	2.22
8/1	頭蓋長幅示数	5	73.2	3.55	5	73.9	3.06
17/1	頭蓋長高示数	3	74.3	2.16	3	75.8	1.60
17/8	頭蓋幅高示数	3	101.5	8.62	3	101.3	3.14
48/45	上顎示数K(alv)	3	49.3	1.24	1	47.6	
52/51	眼窩示数(1)	5	80.6	4.39	4	84.8	1.67
54/55	鼻示数	3	53.0	6.51	4	49.8	3.03
顎面平坦度							
前頭骨弦							
	垂線高	5	94.0	2.47	5	92.1	3.82
	平坦度示数	5	14.1	2.37	5	15.9	2.03
鼻骨弦							
	垂線高	5	15.0	2.21	5	17.2	1.55
	平坦度示数	4	8.7	3.08	3	9.3	1.73
頬上顎弦							
	垂線高	4	2.4	0.82	3	3.4	0.51
	平坦度示数	4	27.8	4.60	3	36.8	4.56
頬上顎弦							
	垂線高	3	96.0	6.88	3	93.9	1.90
	平坦度示数	3	24.1	4.04	3	19.3	4.09
		3	25.4	5.80	3	20.5	4.03

(mm)

第108表 上腕骨主要計測値

No.	項目	男性			女性		
		N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
1	最大長	右	4	290.8	11.09	1	245
		左	3	290.3	15.53		
2	全長	右	4	286.0	11.11	1	243
		左	3	285.3	14.57		
5	中央最大幅	右	14	23.3	1.86	4	19.8
		左	18	22.3	1.53		
6	中央最小幅	右	14	16.9	0.92	4	14.0
		左	18	17.2	1.58		
7	最小周	右	15	61.2	4.18	5	53.6
		左	17	60.6	4.37		
7a	中央周	右	14	67.2	5.01	4	57.3
		左	18	65.5	4.42		
6/5	体断面示数	右	14	73.0	5.18	4	70.8
		左	18	77.1	5.26		
7/1	長厚示数	右	4	20.4	1.53	1	20.8
		左	3	20.0	1.23		

(mm)

第109表 尺骨主要計測値

No.	項目	男性			女性		
		N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
1	最大長	右	2	237.5	0.71	1	204
		左	1	273			
2	生理長	右	3	218.7	21.08	1	182
		左	1	207			
3	最小周	右	6	37.7	2.88	1	29
		左	9	36.2	2.54		
11	体矢状径	右	15	13.3	1.10	2	30.5
		左	19	12.6	1.12		
12	体横径	右	15	16.9	1.36	2	13.0
		左	19	16.3	1.42		
3/2	長厚示数	右	3	17.3	1.49	1	15.9
		左	1	17.4			
11/12	体断面示数	右	15	79.1	8.34	3	87.2
		左	19	77.7	10.02		

(mm)

第110表 槌骨主要計測値

No.	項目	男性			女性		
		N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
1	最大長	右	4	224.8	10.08	1	193
		左	3	219.3	3.21		
2	生理長	右	4	214.8	10.05	1	186
		左	3	208.0	4.36		
3	最小周	右	11	40.8	3.37	4	34.5
		左	14	40.7	3.27		
4	体横径	右	12	15.6	1.56	3	13.3
		左	13	15.8	1.54		
5	体矢状径	右	12	11.6	1.00	3	9.7
		左	13	11.6	1.12		
3/2	長厚示数	右	4	19.6	1.77	1	16.7
		左	3	18.7	0.31		
5/4	体断面示数	右	12	75.0	9.56	3	72.5
		左	13	74.0	6.83		

(mm)

第111表 大腿骨主要計測値 (mm)

No.	項目	男性			女性			
		N	Mean	S. D.	N	Mean	S. D.	
1	最大長	右			1	398		
		左	1	406				
2	全長	左	1	403				
6	体中央矢状径	右	22	26.9	2.07	11	22.6	1.50
		左	22	26.6	1.94	9	23.3	1.73
7	体中央横径	右	22	26.8	2.16	11	25.2	1.60
		左	22	26.7	1.70	9	24.9	1.83
8	体中央周径	右	21	83.8	4.94	11	75.5	3.21
		左	22	83.7	3.85	9	75.7	2.83
9	体上横径	右	18	30.8	1.96	10	29.8	1.62
		左	19	30.9	1.66	7	29.3	1.25
10	体上矢状径	右	18	23.1	1.89	10	20.3	1.06
		左	19	23.5	1.68	7	21.3	1.38
6/7	体中央断面示数	右	22	101.0	10.53	11	90.2	7.30
		左	22	100.0	8.82	9	94.4	11.97
10/9	体上断面示数	右	18	75.1	6.20	10	68.3	5.51
		左	19	76.1	5.98	7	72.8	5.23

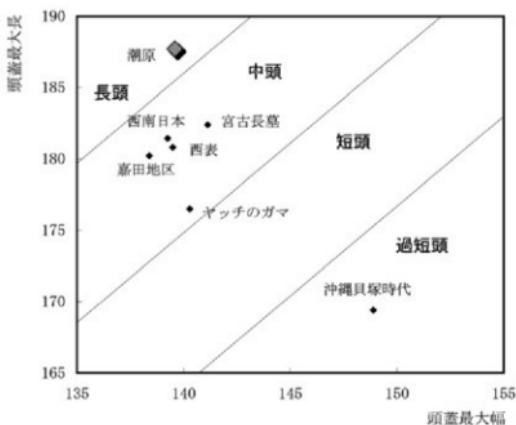
第112表 腰骨主要計測値 (mm)

No.	項目	男性			女性			
		N	Mean	S. D.	N	Mean	S. D.	
1	全長	r	1	300.0				
		1	2	342.5	3.54			
1a	最大長	r	1	308.0				
		1	2	348.0	4.24			
8a	栄養孔位最大径	r	11	33.3	1.85	5	28.4	0.89
		1	11	33.4	1.86	4	29.3	2.06
9a	栄養孔位横径	r	11	23.0	1.48	5	21.0	0.71
		1	11	22.6	1.86	4	20.3	0.96
10a	栄養孔位周	r	11	88.5	4.61	5	78.6	0.89
		1	11	88.7	5.22	4	79.3	4.35
10b	最小周	r	10	72.9	2.96	7	65.4	1.90
		1	7	74.3	6.60	1	66.0	
9a/8a	栄養孔位断面示数	r	10	69.6	4.53	5	74.0	3.41
		1	11	67.9	4.81	4	69.3	1.89

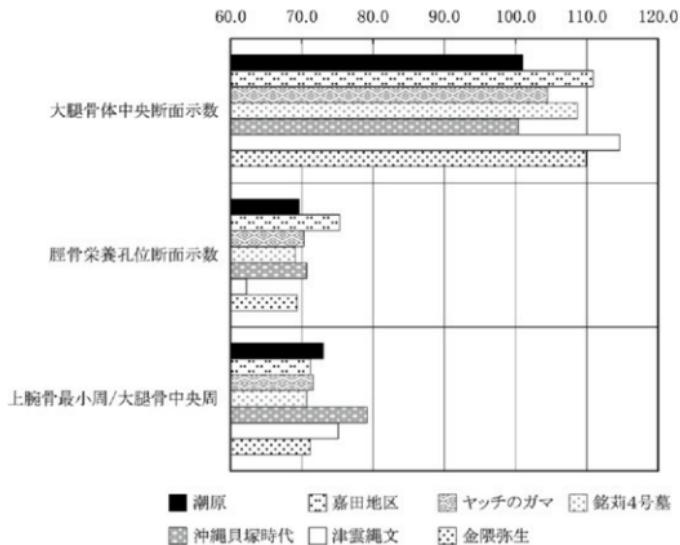
第113表 四肢骨主要計測値の比較(男性)

	潮原	嘉田地区	ヤッヂのガマ	銘苅4号墓	沖縄貝塚時代	津雲縄文	金隈弥生
上腕骨							
中央最大幅	23.3	22.6	21.6	22.1	26.1	23.9	24.1
中央最小幅	16.9	17.2	16.0	16.2	17.8	17.5	17.8
体断面示数	73.0	75.2	74.2	72.9	68.3	72.7	74.0
最小周	61.2	61.0	59.6	60.0	65.8	65.2	64.8
大腿骨							
中央矢状径	26.9	28.5	26.7	28.1	26.3	29.3	29.7
中央横径	26.8	25.8	25.6	26.0	26.3	25.5	27.1
中央周	83.8	85.7	83.2	84.9	83.1	86.8	91.0
体中央断面示数	101.0	110.9	104.5	108.7	100.4	114.6	109.9
脛骨							
栄養孔位径	33.3	32.3	31.6	34.8	32.2	35.4	36.9
栄養孔位横径	23.0	24.3	22.1	24.0	22.6	21.9	25.5
栄養孔位周	88.5	89.3	84.4	94.6	87.8	92.2	98.5
骨体最小周	72.9	75.0	70.6	73.9	74.1	77.4	77.1
栄養孔位断面示数	69.6	75.3	70.3	69.1	70.7	62.2	69.3

(mm)



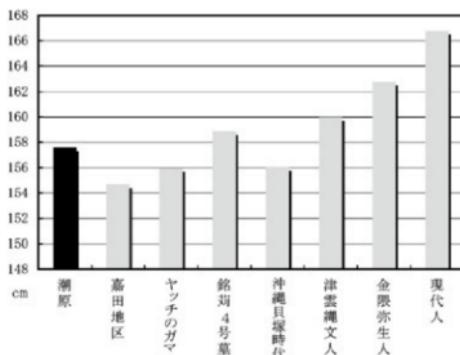
第91図 頭蓋長幅示数の比較



第92図 四肢骨主要示数の比較

第114表 推定身長

男性			女性		
墓番号	推定値	部位	墓番号	推定値	部位
1号墓	157.6	大腿骨	27号墓	150.3	大腿骨
5号墓	162.1	脛骨	54号墓	139.0	上腕骨
33号墓	151.8	脛骨	25号墓	145.7	桡骨
49号墓	160.6	脛骨	54号墓	143.4	桡骨
1号墓	158.3	上腕骨			
1号墓	154.9	上腕骨			
5号墓	157.2	上腕骨			
33号墓	150.2	上腕骨			
49号墓	156.9	上腕骨			
1号墓	156.6	桡骨			
23号墓	163.5	桡骨			
26号墓	156.6	桡骨			
33号墓	156.9	桡骨			
38号墓	158.9	桡骨			
49号墓	160.8	桡骨			
平均値	157.5		平均値	144.6	



第93図 推定身長の比較（男性）

第115表 骨膜炎痕のみられた四肢骨

		上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨
男性	r	1/21	0/20	2/13	1/26	8/17
	I	0/19	1/22	0/15	1/20	4/17
女性	r	0/6	0/5	0/6	1/9	0/9
	I	2/9	1/5	1/12	1/10	1/7
性別不明	r	1/4	0/1	0/2	0/5	2/5
	I	0/0	0/4	1/4	0/6	4/10
成人計	r	2/31 (0.06)	0/26 (0.00)	2/21 (0.10)	2/40 (0.05)	10/31 (0.32)
	I	2/28 (0.07)	2/31 (0.06)	2/31 (0.06)	2/36 (0.06)	9/34 (0.26)

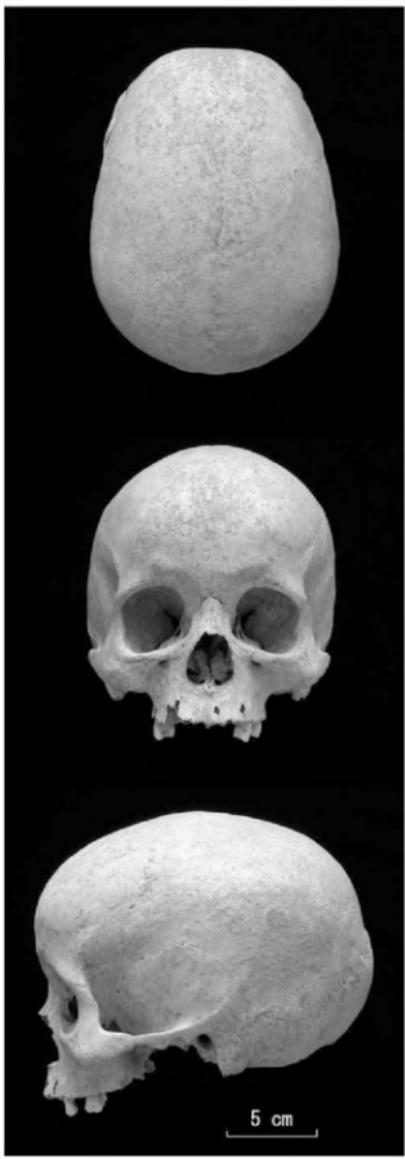
第6節 まとめ

沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成16・17年度与那国島潮原古墓群の調査において、近現代と考えられる人骨が多數出土した。調査例の少ない与那国島では貴重な追加資料である。調査結果を要約すると以下のようになる。

1. 被葬者数は少なくとも77体分と推定された。その構成は男性34体、女性20体、性別不明の成人12体、若年2体、小児2体、幼児4体、乳児3体である。
2. ほとんどの人骨は洗骨され改葬されたものであるが、5号墓では一次葬のままの人骨が出土した。
3. 24号墓から火を受けた骨片が検出された。ほとんどは骨になった後に二次的に焼かれたと思われる骨片であるが、一部に火葬骨と思われる変形した骨片も認められた。個体数などの詳細は不明である。
4. 形質については、頭形は長頭型、顔面部は幅径が大きく低顎で平坦な顔立ちである。
5. 四肢骨については、大腿骨の柱状傾向、脛骨の扁平性とともに認められなかった。男性の平均推定身長は157.5cm、女性は144.6cmで低身長である。
6. 四肢骨には生活環境の厳しさを示す骨膜炎や骨折痕などがみられた。

参考文献

- 1) 沖縄県立埋蔵文化財センター (2004) 「与那国島 嘉田地区古墓群」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集.
- 2) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 3) Yamaguchi B. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bulletin of the National Science Museum, vol.16, pp.161-171.
- 4) TAGAYA, A. and J. IKEDA (1976) A Multivariate analysis of the cranial measurements of the Ryukyu Islanders (male). J. Anthropol. Soc. Nippon 84(3): 204-229.
- 5) 池田次郎 (1974) 沖縄・宮古島現代人頭骨の計測. 人類学雑誌 82 pp.150-160.
- 6) 謂久嶺忠彦, 土肥直美, 石田肇, 瑞慶覧朝盛, 泉水奏, 佐宗亜衣子, 比嘉貴子 (2001) ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨. 「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集, 沖縄県立埋蔵文化財センター, pp.345-385.
- 7) 土肥直美, 泉水奏, 瑞慶覧朝盛, 謂久嶺忠彦 (2000) 骨からみた沖縄先史時代人の生活. 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編, 琉球・東アジアの人と文化(下巻), 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会, pp.431-448.
- 8) 那覇市教育委員会 (1999) 「銘苅古墓群(II)」 那覇市文化財調査報告書第40集.
- 9) 清野謙次, 宮本博人 (1925) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第二部頭蓋骨の研究. 人類学雑誌 41(3,4)
- 10) 清野謙次, 平井隆 (1928a) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第三部上肢骨の研究. 人類学雑誌 43(3附), pp.179-301.
- 11) 清野謙次, 平井隆 (1928b) 津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第四部下肢骨の研究. 人類学雑誌 43(4附, 5附), pp.303-390.
- 12) 中橋孝博, 土肥直美, 永井昌文 (1985) 金隈遺跡出土の弥生時代人骨. 「史跡 金隈遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集, 福岡市教育委員会, pp.43-145.
- 13) 原田忠昭 (1954) 西南日本現代人頭骨の人類学的研究. 人類学研究 1-1.2, pp.1-51.
- 14) 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室「国民健康・栄養調査報告」



1号墓70 男性



1号墓73 男性



5号墓 男性

图版149 人骨2



1号墓71 女性

图版150 人骨3



1号墓72 女性



上腕骨にみられた病変
(左：正常標本 中：変形性関節症 右：骨折)



脛骨にみられた病変
(左：正常標本 他：骨膜炎痕)

第6章 結語

平成16・17年度にわたる潮原古墓群発掘調査の成果を報告してきた。本事業は与那国空港拡張工事に伴って、与那国町教育委員会の協力のもと、沖縄県教育委員会が主体となって沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。今回の発掘調査の成果を、墓の立地環境、遺構、遺物、葬法、人骨の五項目に分け、総括することをまとめたい。

1. 立地環境

潮原古墓群は、与那国島北岸中央付近の与那国町字潮原に位置し、風・潮害から畠を保護するために植えたアダン林に囲まれたところに墓域が広がっている。北西から東にかかるアダン林の外側にはシマアザミが植生する。内陸から海岸に向かって舌状に延びる斜面地をV字状に囲むように墓を構築しており、北西～東側には石灰岩の岩盤が広範囲に露出し、南側は石灰岩の露出があり見られない。墓の立地場所が北側に向かって緩やかに傾斜する地形に位置するため、現地標高は標高17～31mと幅広い。

2. 遺構

A) 墓

調査区内の南側の斜面には石積石室墓（22～31・53号）の一群がある。潮原地区的墓域の中でも、立地が標高23～30mと墓域の中でも高い位置に造られており、眺めの良い場所に立地している。これらの墓は斜面を利用していることもあって、墓口がやや西向きである。南側に位置する石積石室墓には、外観が似る墓（23～27・29～31号）を多く見ることができる。墓の破損状況が著しい28・53号墓も、同様の外観を有していたと考えられる。

54号墓は未調査のため、判断はできないが、南側の斜面に位置し、出土遺物も南側の一群と似ていることから、南側の一群と同様の外観をした石積石室墓の可能性がある。

墓群の北西側から東側にかけて存在する墓として、岩陰墓・モルタルが掛かる墓・掘込墓・半地下水式石積墓・フイッシャー墓が分布しており、南側と比較して様々な形態的特徴を持つ。共通要素として、これらの墓は石灰岩の岩盤が地表から大きく露出する且つ広範囲に広がる所を最大限に利用しており、また、岩盤を背にするため、墓口の向きは剥き出しの岩盤によって左右される。モルタルが掛かる墓には、外観が亀甲墓に似る墓（2・4・7・10・15・42号）がある。

今回調査した古墓群には砂が敷かれる墓が多く見られる。敷かれる場所も墓室内のみ、墓室内から墓口前までの範囲、墓口前のみと様々である。石積石室墓である22号墓は、沖縄で良く見られる墓と同様に石積みで塙を造って墓庭のような空間を形成しており、その石積みの範囲内に砂が敷かれていた。この22号墓を参考に、今回墓口前に砂を敷くというものは墓庭の範囲を形成するためのものとし、「庭」と称したが、池間栄三氏の報告では墓に敷かれた砂について「(略)墓参の人々は、墓場に着くと直先に、墓前に撒いてある白砂の上を見る。白砂の上に亡者の足跡又は鳥の足跡があると信じているからである。(略)」(池間1959)とあり、墓庭形成のためというよりも、与那国葬儀風習の一つのようである。他に、墓室内のみに砂を敷くもの、墓室内から墓口前まで砂を敷くものがあるが、詳細は不明である。

砂敷の他に、海砂利（II b層）を墓室内に敷いている石積石室墓（24・25号）がある。この2基の墓は、砂利を敷く位置が異なっており、24号墓は整地した地山の上に砂利を敷き、その上に床石を敷く。25号墓は整地した地面の上に砂利を敷き、その上にさらに盛土（II a層）をして、床石を敷く。25号墓の盛土は、墓口を閉じる板石が倒れないように固定する土として盛っているものと考えられるが、砂利を敷く位置、砂利を敷く意図については砂敷きと同様に今後検討が必要である。

前述の25号墓の盛土についての補足だが、24・25号墓とも構造は似ているが、盛土の有る無しにより、墓の使われ方に違いがあると考えられる。24号墓は天井に蓋石を乗せた後に、墓口を閉じるようにしており、25号墓は、墓口の板石を土で固定した後に蓋石を乗せる。つまり、25号墓は墓口が開けられない造りになっている。この2基の遺物の出土状況からみても、24号墓には、人骨を収めた転用蔵骨器が多数出土したことから、墓口からものを出し入れ出来る状態にしており、25号墓は、墓室内の規模、蔵骨器転用品1つの

みの出土から、個人墓で、墓口を開ける機会が無い前提で、このような造りにしたのではないだろうか。

盛土（II a 層）を使用する墓として他に同様の石積石室墓である26・29・30号墓がある。使用意図は不明瞭だが、おそらく、墓を形成するときに墓室内の床となる部分を平らに整地するが、床にあたる部分以外は地形上斜面地になっているので、墓口前の広場の形成として、盛土により高さを補い、調整しているのではないだろうか。

B) 性格不明遺構

今回、性格不明遺構としてとりあげたものは、11・17・20・21・35・37・47・51号の9基あり、人骨が出土せず、墓としての機能を持っていたのか、また、何らかの遺構なのか判別が出来なかったものである。

11号は12号墓との関連があるように思えるもの。17号は聞き取りによると、家畜小屋の可能性がある。20・21・37・51号は集石遺構で、人骨・遺物が出土していないことから性格不明だが、一次葬の仮安置所として機能していたものとも考えられる。35号は礫石が散乱している。47号は岩盤の割れ目に沖縄産無釉陶器（壺）の破片が散在して出土したことから、使用しなくなった遺物の廃棄場所とも考えられる。

3. 遺物

遺物は墓の持ち主により移転されているため、どのような遺物構成があったのか不明瞭となっている墓もある。今回確認出来た遺物では、沖縄産施釉陶器が246点、沖縄産無釉陶器が204点と、沖縄産陶器が圧倒的な出土量を占めている。その次に本土産近現代磁器、ガラス製品、中国産磁器、肥前系磁器、簪、煙管、藏骨器（専用品・転用品）と続いていくが、釘の出土量も946点（破損品も含む）と多く、丸釘と角釘の2種類がある。洗骨後に収める藏骨器について、嘉田地区古墓群と異なることは、パナリ焼（土器）が出てこなかつたことが挙げられる。

墓域内の南に位置する石積石室墓の一群の中で、外觀が似る墓に共通していることは、多量の副葬品等の遺物が出土することである。墓室内からは多量の沖縄産施釉陶器が主体として、中国産磁器・肥前系磁器が出土し、墓室外からは沖縄産無釉陶器が主体として出土することである。それに対し、北西から東にかけて位置する一群は、本土産近現代磁器を中心となり、ガラス瓶、プラスチック製品が出土している。この一群の中でも、モルタルが掛かり、外觀が亀甲墓に似る墓は比較的本土産近現代磁器、ガラス瓶が多く出土する傾向がある。また、南側の石積石室墓の一群と異なり、副葬品等の遺物がはっきりと少なくなるのも特徴である。

釘については、丸釘のみ出土する墓（2・4・5・7～10・15・41・54号）、角釘のみ出土している墓（26・38・49号）、角・丸釘両方が出土している墓（1・14号）がある。中尾近世墓地（大分県教育委員会1999）の資料を参考にすると、丸釘から角釘へ変化する時期の墓群と考えられ、時代が明治20年代前後から、それ以降の墓という位置づけが想定出来る。分布域は北側の一群に集中しているが、26号墓の1基のみ南側の一群で角釘が確認されている。

釘が出土する墓は木棺が使われていたと思われる。この木棺は与那国には葬儀屋が無いことから村人達で造っていたとされる（池間1959）。釘が出土する墓室内の大きさを測定すると縦約1.2～1.8m（平均約1.5m）、横約0.5～0.7m（平均約0.6m）、高さ約0.4～0.7m（平均約0.64m）の間に収まる（26号墓は、人骨・遺物が集中して出土する場所を除いた空間を測定、また、1・36・38・41・49号墓は岩陰内の規模が不明瞭なことから省く）。これらの墓に使われていたと思われる木棺の大きさについて考えてみる。釘が出土した位置を基準にして大きさを測定した墓（2・5・9号）から推測すると、釘の分布は長方形状に縦約1～1.3m（平均約1.2m）の間隔、横0.45～0.5m（平均約0.5m）の間隔で出土している。これにより墓室内の規模と、釘出土範囲の平均値が合うことから、木棺は規格的であった可能性がある。

特殊な出方をしている遺物として、床石直下から出土している白磁の小杯（24号墓）、煙管・簪（26号墓）がある。このような出方をしている墓はこの2基だけで、詳細は不明だが、墓の持ち主達の何らかの意向があつたのではないかと思われる。

4. 葬法

今回調査した古墓群には、人骨が原位置を保つ一次葬段階の状況で確認された墓（5・33・49号墓）がある。

これらの墓は、何らかの理由により一次葬で完結させた墓、又は、改葬をする前提だった仮安置場で、何らかの理由で改葬が行なえなかった墓と考えられる。ちなみに、33号墓は釘が出土しないことから、風葬の可能性がある。その他に、一次葬は行っていると思われるが、二次葬まで行ったか不明な墓（2・4・7～10・14・15・38・41号）。二次葬（蔵骨器使用）のみと思われる墓（3・6・12・22～25・27・29・34・39・40・42・50・53号）。散骨状態で出土した墓（31号）。墓の破損状況が著しい、又は、遺物がほとんど出土しないため葬法が不明な墓（13・28・30・48・54号）がある。遺物が一点しか出土しないことから葬法が不明な墓に48号墓を入れているが、風葬の可能性がある。

一・二次葬兼用の墓として1・26・36号墓が挙げられる。特に岩陰墓である1号墓は、葬法が段階ごとに明瞭に捉えられた。岩陰内右側では人骨がほぼ原位置を保ったまま的一次葬段階の状況で検出された。岩陰内中央部では、石組みで囲われていたと思われる場所があり、その中に転用蔵骨器を使用して二次葬を行う場所があった。岩陰内左側には人骨が散在していた。これらのことから、同一岩陰内で葬法の役割位置が決められており、岩陰右側は、遺骸を木棺に収め暫くの間安置しておくシリヒラシ（洗骨前の遺骸安置場）としての場所。岩陰内中央の石匂いは、木棺に収めていた遺骸を洗骨して転用蔵骨器に収めるタナ（洗骨後の納骨器安置場）としての場所。岩陰内左側は岩陰内中央の石匂い内に納骨器の入る場所が無くなると、散骨するイケ（人骨の合葬場）としての場所。このように葬法の段階によって場所を決められていた。36号墓（岩陰墓）は人骨がほとんど出土しなかったが、釘が出土し、石匂いの中に蔵骨器が置かれているなど似ている点があることから、1号墓と同じ機能を持っていた墓の可能性がある。

26号墓（石積石室墓）は墓室内が広く、人骨・蔵骨器・遺物が墓口前に集中して出土しており、墓室外からではあるが、釘（角釘）が出土していることから、墓室内の奥の空間で一次葬を行っていた可能性が高い。

5. 人骨

潮原古墓群から出土している人骨は成人が約86%（男性約53%・女性約29%・不明約18%）と大きく占めている。小規模な造りの50号墓には乳児の骨が出ていて、墓の規模もそれに合わせて造られていることがわかる。この他に注目できるものとして、24号墓の蔵骨器（転用蔵骨器1・5・6）から焼骨が出ている。西銘章氏が行った聞き取り調査（西銘2004）によると、現在の与那国では水で洗骨した後に、さらに火で焼くとの報告がある。

5号墓の一次葬人骨は、腰骨が擦り減っていることなどから過酷な労働をしていた人の墓である。

6.まとめ

墓を葬法別に分けると一次葬用の墓、二次葬用の墓、一・二次兼用する墓の三つのタイプがある。岩陰墓（1・33・36・39・41・49号墓）は一次葬が行われており、1・36号墓は同墓内で二次葬までの段階を踏んでいる。41号墓は岩陰内に沖縄産無釉陶器（水甕）の底部が出土していることから、これを蔵骨器転用品と扱うなら、二次葬（洗骨後に納骨器に収める）まで行っていた可能性がある。二次葬のみの墓は、同じ墓域内で岩陰墓（33・39・49号墓）のように、一次葬を行っていた場所から移されて来ているはずであるが、墓の併存関係についてはわからなかった。葬法について注目できることとして、釘の出土する墓については墓室内の規模、釘の出土位置から規格された木棺で一次葬をしていた可能性があることと、24号墓の転用蔵骨器1・5・6内から焼かれた骨が出ていていることである。

南の斜面に並ぶ22～31号の石積石室墓（53号墓は遺物がほとんど出土せず、持ち主により移転されていると思われる事から除く）に共通することとして、墓室内から沖縄産施釉陶器を中心に、中国産磁器、肥前産磁器が出土し、墓室外から沖縄産無釉陶器を中心に出土しており、北西から東にかけて分布する墓（地表に大きく露出する石灰岩の岩盤を利用する）は、岩陰墓と38号（掘込み墓）を除いて、墓ごとに本土産近現代磁器、ガラス瓶、プラスチック製品など近現代の遺物が出土している。

上記のことから、調査区内北西側から東側にかけて分布する一群はモルタルが掛かる墓が多いことも含め、新しい時期の様相が窺え、南側に位置する一群は、北西から東にかけて分布する一群よりも古い時期の様相が窺えることができ、潮原古墓群は、墓域が南側から北側に向かって移り広がっていったと考えられる。

以上のことと、その他の刊行物等を参考に、潮原古墓群は近世から近・現代の間に位置づけられる。

最後に今回報告書作成に関わった皆様、また、与那国町での約九ヶ月間にわたる発掘調査に協力して頂いた与那国町教育委員会・発掘作業員・与那国町民の皆様、真夜中にも拘らず診察してくださった与那国町診療所の先生、民宿でお世話になった方々に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 安里嗣淳 1989 「南琉球文化圏における無土器新石器期の位置」『琉中歴史関係論文集』第2回琉中歴史関係国際学術会議実行委員会編
- 安里嗣淳 2003 「与那国島トウグル浜遺跡の編年的位置の再検討」『紀要 沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 安里 進 1997 『伊祖の入れ御拌領墓の厨子獣と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－』浦添市文化財調査研究報告書 第25集 浦添市教育委員会
- 池間栄三 1959 『与那国島の歴史』自費出版
- 浦添教育委員会 2004 「墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書」浦添市文化財調査研究報告書
- 大分県教育委員会 1999 『中尾近世墓地－国道10号線旦の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 沖縄県教育委員会 1980 「第IV章 調査地域における遺跡の概要 8. 与那国島』『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』
- 沖縄県教育委員会 1985 『トウグル浜遺跡－与那国空港整備工事に伴う発掘調査報告－』
- 沖縄県教育委員会 2000 「第2章 与那国空港整備予定地周辺の遺跡」『空港整備予定地周辺の遺跡－与那国空港・新多良間空港・波照間空港整備予定地周辺における遺跡詳細分布調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第138集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第20集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『嘉田地区古墓群－嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『ナカンダカリヤマの古墓群－急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第26集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『首里城跡－上の毛及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第27集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集
- 沖縄大学学生文化協会 1971 「国頭比地部落・与那国島報告」『郷土』第10号
- 喜合場永眞 1977 「八重山列島の葬礼習俗」『八重山民俗誌』上巻 沖縄タイムス
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

- 九州近世陶磁学会 2002 『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる 第二分冊』第12回九州近世陶磁
学会資料
- 九州近世陶磁学会 2006 『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 九州編』第16回九州近世陶磁
学会資料
- 笹森儀助 1895 「琉球群島における人類学上の事実」『東京人類学雑誌』第10巻 第113・114号
- 多和田真淳 1960 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『文化財要覧』1960年版
- 琉球政府文化財保護委員会 (『沖縄文化財調査報告』(1956~1962年) 沖縄県教育委員会監修 那覇出版社 1978年)
- 知念 勇 1989 「与那国島の遺跡」『県立博物館総合調査報告書 IV』沖縄県立博物館
- 永井昌文 1964 「与那国島大和墓由来の頭骨について」『八重山群島学術調査報告』2号九州大学学術調査
委員会
- 新村 出編 1998 『広辞苑』岩波書店 第5版
- 西銘 章 2004 「南島考古」『沖縄における葬墓制の変化－近世墓研究ノート－』第23号 沖縄考古学会
- 西銘 章 2004 「第6章 3人骨」『嘉田地区古墓群－嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第21集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 山城直子 1998 「第V章 第2節」『銘苅古墓群(II)－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査
報告IV－』那覇市文化財調査報告書第40集 那覇市教育委員会
- 与那国町 2002 『町史第一巻 与那国島 交響する島宇宙 日本最西端 どうなんちまの地名と風土』
- 与那国町教育委員会 1979 『与那国町の文化財』
- 与那国町教育委員会 1986 『慶田崎遺跡－久部良小学校体育館建設工事に伴う緊急発掘調査－』与那国町
文化財調査報告書第1集
- 与那国町教育委員会 1988 『与那原遺跡－個人農家の畠地改良等の伴う緊急発掘調査－』与那国町文化財
調査報告書第2集
- 与那国町教育委員会 2002 『島仲村跡遺跡－島仲地区遺跡詳細分布調査に係る調査報告書－』与那国町文化
財調査報告書第3集

— 報告書の流れ —



1. 水洗い



2. 注記



3. 接合・復元



4. 写真撮影



5. 実測



6. 人骨調査



7. 原稿執筆



8. 職場体験（西原高校）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	よなぐにじま すうばるこぼぐん							
書名	与那国島 潮原古墓群							
刷書名	—与那国空港拡張工事に係る緊急発掘調査報告—							
卷次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	片桐千恵紀、山田浩久、伊波直樹、山本正昭、羽方誠、土肥直美							
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'"				°'"
潮原古墓群	沖縄県 与那国町	473821		24° 28' 16"	122° 59' 44"	2004.12.4 ～ 2005.9.2	3ha	与那国空港 拡張工事
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
潮原古墓群	その他の墓	近世 ～ 近・現代	石積石室墓 半地下式石積墓 岩陰墓等	沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、 中国産陶磁器、タイ産褐釉陶器、 肥前系磁器、本土産近現代磁器、 簪、煙管、錢貨、その他金属製品、 ガラス瓶、人骨等			沖縄産陶器を主体的に出土する古墓群と本土産近現代磁器が含まれる古墓群では、墓の形態や立地、副葬品等の様相が異なり、それぞれ一定のまとまりがあることがわかった。	
要約	潮原古墓群は与那国空港拡張工事に伴い緊急発掘調査が実施された。合計45基の古墓や遺構調査の結果、多様な形態や立地を持つ古墓が存在することが確認され、それと共に、保存状態が良好な沖縄産陶器を中心とした多種多様な近世～近・現代にかけての遺物が出土した。詳細な資料整理の結果、沖縄産陶器を中心的に出土する古墓群と本土産近現代磁器が含まれる古墓群では、墓の形態や立地、副葬品等の様相が異なり、それぞれに一定のまとまりがあることがわかった。また、人骨調査では少なくとも77体の被葬者が確認され、中には火葬されたと考えられる人骨が認められた。							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第43集

与那国島
潮原古墓群

—与那国空港拡張工事に伴う緊急調査報告—

発行年 平成19（2007）年3月30日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7

T E L 098-835-8751・8752

印 刷 株式会社 沖産業

〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐2-1-1

T E L 098-898-2191

